2003 iEARN 国際会議 inJAPAN

ハンドブック

2003年7月21日(月・祝) ～ 25日(金)

兵庫県立淡路夢舞台国際会議場

目次

1　ご挨拶

1　高木 洋子 (2003iEARN 国際会議大会委員長)
2　赤堀 侃司 (大会組織委員長)
3　ピーター コーペン (iEARN インターナショナル理事)

4　会議のご案内

4　会議概要
6　会議プログラム
8　プログラム早見表

9　基調講演

9　「ICTを活用し学校及び学校外教育の効果を高め、情報社会における若者の力の向上を目指す」
ユネスコ情報社会部門プログラム専門官
ボヤン・ラドイコフ 博士

14　「震災からの復興 Hyogo Phoenix Plan」
兵庫県産業労働部国際交流局長
西田 裕 氏

「震災遺児と、国際的な遺児の連帯」
あしなが育英会レインボーハウス

15　「iEARN Changed My World (iEARN が私の世界を変えた)」
iEARN ユース代表
Ms.サラ・アラーム

19　「Peace through ICTs」
関西学院大学客員教授
田島 幹雄 博士

22　分科会とワークショップ

22　分科会発表者へのお願い
23　ポスターセッションについて
24　分科会タイムテーブル

58　ユース・サミット

60　イベントのご案内

淡路人形芝居　「恵比須舞」
お茶会と琴の体験
「ありがとうアート」
本の交換

裏表紙 兵庫県立淡路夢舞台国際会議場(見取図と連絡先)

2003 iEARN 国際会議 ハンドブック (非売品)
表紙イラスト 京都工芸繊維大学広告研究会
Copyright (C) 2003 JEARN.　All Right Reserved.

ご挨拶

2003 iEARN 国際会議大会委員長　　高木　洋子

実に多くの問題がありましたが、特に兵庫県とその教育委員会、関西学院大学、世界中の iEARN の皆様からの熱い励ましによって、なんとか問題を乗り越え、本日、2003 年 iEARN 国際会議を開催する日を迎えることができました。

私たちはプログラムのチャートやスケジュール作成、食事の場所、交通、名札、PC と回線、発表の部屋割りなど....多くのことを決めてきました。ホストとして準備してきたことは、時間と場所の設定という 2 面の iEARN 国際会議です。時間は 2003 年 7 月 21 日から 25 日。場所は兵庫県淡路夢舞台（夢を語る舞台）です。

参加される皆様には大切な役割があります。皆様の発表、報告、討論、にこやかな笑声、握手やハグ、歌やダンスによって、この 2 面の国際会議を生き生きとした立体的な 3 面の国際会議にしていただくことです。世界中から集まる皆様によって、淡路夢舞台は様々に異なった文化と教育が集まる所となります。この地球の東西南北から運ばれる文化と教育の十字路となります。

この十字路における会議のゴールはなんでしょうか。ありのままの現実を見る。この地球上の子供たちの未来を見る。5 年後、10 年後の教育を見る。そして iEARN の心で未来への道を探る。

さあ、淡路夢舞台へようこそ！

GREETINGS

There were so many obstacles on our way. We barely overcame them but, strongly supported by the Hyogo Prefecture and its Board of Education, Kwansei Gakuin University and iEARN's heartfelt encouragement coming from around the world, today we have arrived at iEARN Conference in 2003.

We made table charts, room and time schedules, refreshment stations, local transportation arrangements, name tags, PCs and lines availability, presentation platforms, and handled a multitude of other details. What we have achieved, as your host, is a two dimensional- time and space- iEARN Conference. The time is now from July 21 to July 25. The space is AWAJI Yume Butai (the place to reveal your dreams) in Hyogo Prefecture, Japan.

Now YOU are going to play the most important role in building this two dimensional conference into an active three dimensional conference, filling time and space with your presentations, reports, discussions, smiles and laughter, hugs, songs and dancing.... Because you have come from all over the world, AWAJI Yume Butai offers many different types of cultural and educational experiences. Coming from East and West, from North and South, we are all gathering at the Crossroads of Culture and Education.

What must we do to reach our conference goal here at the Crossroads? Look at the present. See the future of children on this earth. Envision education in five years, in ten years. Find future milestones to strive toward with iEARN spirit.

Welcome to iEARN Conference 2003 at AWAJI Yume Butai !

Yoko Takagi, Executive Director
2003 iEARN Conference

2003 iEARN 国際会議 in Japan へようこそ

大会組織委員長
赤堀　侃司

ようこそ、2003 iEARN 国際会議 in Japan に来ていただきまして、ありがとうございます、大会組織委員会として、心から歓迎いたします。

さて、iEARN は、世界中の教育者や子供達が、インターネットなどのメディアを使いながら、いくつかのプロジェクトを実践しながら、国際交流を行っているネットワークです。そして、世界の教員や子供達が一カ所に集まって、お互いの実践や教育問題などを直接に情報交流することによって、国際理解を深める趣旨が、国際会議です。今年は、日本で開催されることになりました。研究者の研究発表の場としての国際会議は多く開催されていますが、小中高等学校の先生方や子供達が集まって、研究発表したり交流したりすることは、日本では初めての快挙と思います。

世界中の教員が、同じ問題に悩み、苦しみ、そして喜びことを、交流しましょう。そして、こんな点が異なっているのかということも、お互いに交流しましょう。会場は、淡路島の夢舞台という、この国際会議には最もふさわしい会場です。文字どおり、教育に賭ける夢を語り合いましょう。素晴らしい会議になることを、心からお祈りします。

Welcome to 2003 iEARN Conference in Japan

Exective Director of Conference Steering Committee
Kanji Akahori

We sincerely appreciate your participation to 2003 iERAN Conference in Japan. As the representative of conference steering committee, I would like to express our great gratitude to your visiting to Japan.

As it is well known, the purpose of iEARN is to promote international understanding by exchanging ideas, opinions, and information, through conducting the project, and held the annual international conference to realize participants' face-to-face communication, and they can exchange information, and talk their dreams and problems on pedagogical issues. This year's conference site is " Awaji Yume Butai" located in Awaji island in Hyogo prefecture, and " Yume" means a dream, "Butai" means a theater, therefore, this site is the best for exchanging our ideas and dreams. Let's talk each other, and share our hopes and educational problems for sustainable cooperation of world wide schools as shown in the conference theme "At the Crossroads: Finding Future Milestones".

We hope hearty that you enjoy and satisfy the conference and fruitful discussion.

Dear iEARN Friends, Family and Colleagues,

It is a privilege to be asked to share a few words with you.

First, I would like to thank the remarkable iEARN team in Japan for their commitment and courage to persevere under very difficult circumstances. To me, they capture the heart and soul of iEARN, which is to be committed to having people learn through experience that they can make a meaningful difference in the world by working together.

It often is not easy. It often takes a unique person to participate in iEARN. Yet, when it comes to education, our children and the future health and welfare of our planet, isn't it better to light candles together than to curse the darkness?

At the first iEARN teachers conference "candles" were lit in Moscow, in 1989, on July 4th, the U.S. day of independence. The Russian teachers surprised the U.S. teachers by lighting bright sparklers, which are a traditional symbol of that holiday. That spirit of independent thinking in the field of Education has grown since 1989 to what you experienced in your conference in Japan. The credit for that goes to you, the participants in iEARN.

I hope you have experienced that iEARN offers gifts that work on several levels (what I like to call in English, the 3-A's):

1. Academics: Discovering new teaching and learning skills to apply in the classroom.
2. Attitude: Learning that we can change and expand the way we think about education, people and the planet, and
3. Action: Learning how to apply these skills and attitudes in order to make a meaningful difference in the world.

And, there is something else: a special gift that is available. The only way to explain that gift is to quote a great teacher of mine who said that you need to give people something to keep their minds busy so that their souls can touch.

I hope that you have also received these gifts and that you will share all you have received with others when you return home. Why? In order to inspire your teaching, your learning and to make the world a better place.

With Peace, Love and Light,

Peter Copen

2003 iEARN 国際会議 in Japan 会議概要

大会名称：2003 iEARN 国際会議 in Japan（第 10 回国際会議、第 7 回 Youth Summit）
テ ー マ：At the Crossroads: Find ingFuture Milestones　未来への道しるべ
期　　間：2003 年 7 月 21 日（月・祝）～7 月 25 日（金）
主　　催：特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構
（通称 JEARN、理事長 高木洋子）
会　　場：兵庫県立淡路夢舞台国際会議場

特別協力：兵庫県、兵庫県教育委員会、関西学院大学、東浦町、東浦町教育委員会、淡路町、淡路町教育委員会、三田市、三田市教育委員会

後　　援：総務省、外務省、文部科学省、経済産業省、大阪府、大阪府教育委員会、三重県教育委員会、京都府教育委員会、神戸市教育委員会、伊丹市教育委員会、西宮市教育委員会、宝塚市教育委員会、芦屋市教育委員会、三木市教育委員会、篠山市教育委員会、川西市教育委員会、明石市教育委員会、尼崎市教育委員会、小野市教育委員会、氷上郡教育委員会、高槻市教育委員会、摂津市教育委員会、岡山市教育委員会、佐倉市教育委員会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、（財）全国商業高等学校協会、兵庫県私学中学高等学校連合会、兵庫県高等学校商業教育協会、西宮市立総合教育センター、兵庫県国際交流協会、宝塚市国際交流協会、三重県生活部国際チーム、日本教育工学協会（J AET）、（社）日本教育工学振興会（JAPET）、（財）コンピュータ教育開発センター（CEC）、兵庫ニューメディア推進協議会、日本ユネスコ協会連盟、国際協力事業団（JICA）

特別協賛：（財）マルチメディア振興センター、
科学芸術財団（Sc ence and Arts Foundation）

協賛団体：（財）関西テレビ青少年育成事業団、関西学院大学、
啓明女学院高等学校／啓明学院中学校、国際教育センター、
（財）国際コミュニケーション基金、国際電子ネットワーキング教育学会（AGENE）、三田広陵ライオンズクラブ、情報教育学研究会（IEC）、情報通信月間推進協議会、
全国外国語教育振興協会、（財）中央教育研究所、

（財）中内力コンベンション振興財団、（社）日本教育工学振興会（JAPET）、
（財）松下視聴覚教育研究財団、湊川短期大学、iEARN-USA、
USA 教育省（US Department of Education）、世界銀行（Would Bank）

協賛企業：アイテック阪神（株）、アスクル（株）、（株）育英社、（株）ECC、
インフォミーム（株）、上野製薬（株）、（株）内田洋行、
NEC インターチャネル（株）、（株）NTT ドコモ関西、オムロン（株）、
カシオ計算機（株）、カノープス（株）、関西国際空港（株）、関西電力（株）、
キリンビール（株）、近畿コカ・コーラボトラーズ（株）、近畿日本鉄道（株）、
公文教育研究会、ケージーパルテック（株）、（株）ケイ・オプティコム、
慧通信技術工業（有）、コクヨ（株）、小西酒造（株）、（株）サイバーランド、
サイレックス・テクノロジー（株）、サントリー（株）、三洋電機（株）、実教出版
（株）、（株）J-COM 関西、（株）ジャストシステム、シャープ（株）、（株）JTB、
スズキ教育ソフト（株）、西菱電機（株）、（有）聖和地所、千年一酒造（株）、
ダイキン工業（株）、武田薬品工業（株）、（株）竹中工務店、（株）東芝、
東洋紡績（株）、西日本電信電話（株）（NTT 西日本）、
西日本旅客鉄道（株）（JR 西日本）、日本コカ・コーラ（株）、
日本スマートテクノロジーズ（株）、日本生命保険（相）、（株）日本発破技研、
（株）ネットマークス、バディ・コミュニケーション（株）、阪神シティケーブル
（株）、
阪神特機サービス（株）、バンドー化学（株）、パイオニア（株）、
日立ソフトウェアエンジニアリング（株）、（株）藤製作所、（株）富士通、
フジッコ（株）、プラスビジョン（株）、（株）ブロードネットマックス、
（株）ポーム、（株）北摂コミュニティ開発センター、松下電器産業（株）、
三菱電機（株）、（株）モトックス、ヤノ電器（株）、（株）UFJ 銀行、
（株）ライフアジャスト、
米州開発銀行（IADB：The Inter American Development Bank）、
SEED(Schlumberger Excellence in Educational Development)

（※）　本会議は、関西元気文化圏参加事業です。
本会議は、情報通信月間参加行事です。

大会プログラム

7 月 21 日 (月・祝)

9:00-12:00　受付

13:00-16:30　開会式

第1部 オープニングセレモニー

(主管:NPO 法人グローバルプロジェクト推進機構 JEARN)

オープニング 「淡路人形浄瑠璃」(人形座)

開会宣言(大会委員長　高木　洋子)

各国参加者紹介(大会組織委員長　赤堀　侃司)

来賓挨拶

兵庫県　知事　井戸　敏三　様

関西学院大学　学長　平松　一夫　様

第 2 部 国際シンポジウム(主管: 関西学院大学)

基調講演 K001

「ICT を活用し学校及び学校外教育の効果を高め、情報社会における若者　の力の向上を目指す」

ユネスコ情報社会部門プログラム専門官

ボヤン・ラドイコフ博士 (IT と教育のカリキュラムコーディネータ)

パネルディスカッション

「手をつなごう！世界の子ども

～インターネットが広げる国際交流～」

パネリスト

奈良人司 (文部科学省、国際教育課課長)

高木洋子(NPO法人「グローバルプロジェクト推進機構」代表)

カムラン・エラヒアン(「スクール・オン・ライン」創設者、VC「グローバル・カタリスト・パートナーズ」会長)

後藤稔(関西学院高等部教諭、2003 年「ドリームスクール」プロジェクト参加)

コーディネーター

赤堀　侃司 (東京工業大学教授)

7 月 22 日 (火)

9:30-11:00　全体会

基調講演 P001

「震災からの復興」Hyogo Phoenix Plan

兵庫県産業労働部国際交流局長

「震災遺児と、国際的な遺児の連帯」

あしなが育英会レインボーハウス

11:20-17:00　分科会およびワークショップ
ポスターセッション (11:20-13:40 2 階回廊)
本の交換 (レセプションホール B)
ありがとうアート (レセプションホール B)

7 月 23 日 (水)

9:30-11:00　全体会 (メインホール)
基調講演 P002
「iEARN changed my world (iEARN が私の世界を変えた)」
iEARN Youth 代表 Ms. Sarah Alam (Pakistan)
11:20-17:00　分科会およびワークショップ
ポスターセッション (11:20-13:40 2 階回廊)
本の交換 (レセプションホール B)
お茶席と琴の体験 (茶室)
18:00-21:00　情報交換会 (ウェスティンホテル淡路)

7 月 24 日 (木)

9:30-11:00　全体会 (メインホール)
基調講演 P003
「PEACE THROUGH ICTs」
田島幹雄 先生(関西学院大学総合政策学部客員教授)
11:20-17:00　分科会およびワークショップ
Poster Session (11:20-13:40 2nd floor corridor)
Book Exchange (Reception Hall B)

7 月 25 日 (金)

10:00-12:35　閉会式 (メインホール)
会議の記録ビデオ上映
大会会長のことば
ユースの報告
「ねがい」合唱
「ねがい」ビデオ(台湾)と演奏
希望者に自由に感想を述べてもらう
各国に1つ土産を渡す
全員合唱「上を向いて歩こう」
次の開催地の紹介(チェコ)
閉会

２００３ iEARN Conference

	21日 月	22日 火	23日 水	24日 木	25日 金
6:30	起床	起床	起床	起床	起床
7:00	朝食	朝食【各宿舎】	朝食【各宿舎】	朝食【各宿舎】	朝食【各宿舎】
7:30					
8:00					チェックアウト
8:30	移動	移動	移動	移動	
9:00	参加登録【ロビー】				移動
9:30		全体会【メインホール】	全体会【メインホール】	全体会【メインホール】	
10:00					閉会式【メインホール】 / ポスターセッション(撤退)【回廊】
10:30					
11:00		休憩	休憩	休憩	
11:30	昼食【レセプB】	分科会A / ポスターセッション【回廊】 / 昼食【レセプB】	分科会A / ポスターセッション【回廊】 / 昼食【レセプB】	分科会A / ポスターセッション【回廊】 / 昼食【レセプB】	
12:00		分科会B	分科会B	分科会B	
12:30					
13:00	開会式【メインホール】 / ポスターセッション準備【回廊】	分科会C	分科会C	分科会C	昼食【レセプB】
13:30					
14:00	基調講演【メインホール】	分科会D	分科会D	分科会D	オプショナルツアー(宿泊付)
14:30		分科会E	分科会E	分科会E	移動
15:00	シンポジウム【メインホール】				
15:30		分科会F	分科会F	分科会F	
16:00					チェックイン
16:30	休憩	分科会G	分科会G	分科会G	
17:00		分科会V【メインホール】(ビデオ放映) / 休憩	休憩	分科会V【メインホール】(ビデオ放映) / 休憩	ホテルで休憩
17:30	自由時間 / 夕食(A班300名)【ウェスティン/大宴会場】	夕食(A班300名)【ウェスティン/大宴会場】	情報交換会【ウェスティン/大宴会場】	夕食(A班300名)【ウェスティン/大宴会場】	
18:00					
18:30	会場準備				
19:00	自由時間・移動 / 夕食(B班300名)【ウェスティン/大宴会場】	自由時間・移動 / 会場準備		自由時間・移動 / 会場準備	
19:30		夕食(B班300名)【ウェスティン/大宴会場】		夕食(B班300名)【ウェスティン/大宴会場】	
20:00	移動				
20:30	チェックイン		移動		
21:00		移動		移動	
21:30	休憩・就寝	休憩・就寝	休憩・就寝	休憩・就寝	
22:00					

ABSTRACT:

Enhancing effectiveness of formal and non-formal education through ICTs and empowering youth in the information society

The emergence of the information society is a turning point in human history. This evolution is causing deep transformations in which gathering knowledge has not only become the principal driving power of social changes but also holds the promise that many of the problems confronting societies could be properly addressed.

The efforts to ensure digital inclusion, currently observed at different rates in the world, arouse hopes for improved educational schemes. Recent developments demonstrate, however, glaring disparities of access to information and knowledge sources.

In this perspective, among the main challenges national and international institutions have to address is the bridging successfully the existing digital divide, which accentuates the contrasts in development, often excluding entire groups - even countries - from the benefits of the emerging information society. Thus, disadvantaged groups and large illiterate populations do not have access to essential educational tools, which they very much need and which could certainly improve their present conditions.

UNESCO's core missions - to promote "the free exchange of ideas and knowledge" and to "maintain, increase and diffuse knowledge" - have never been more relevant as information and communication technologies (ICTs) open up new prospects for progress in the creation and exchange of knowledge, in the placement of education at the heart of the agendas for development, and in the promotion of creativity and intercultural dialogue.

In the process of improving educational opportunities thanks to the increased use of, and access to, ICTs, there are several parameters, which will have to be taken into account. The growth of information networks and ICT applications will not in it lay the foundations of truly efficient and solid knowledge modules and reliable formal and non-formal education schemes. While replicating information will become fast and relatively cheap, constructing and disseminating knowledge, taking into account its complex cognitive elements, is a far more laborious and costly process. Knowledge societies, capable of applying existing information to the generation of new knowledge, are built up through long-term institutional and social mediations. They inevitably induce the need for a clear vision of specific social goals to be attained, particularly in order to enhance equitable access to formal and non-formal education and require some clear-cut choices to be made by national decision-makers in this regard.

If the potential of ITCs and scientific and technological progress is to be harnessed fully for the development of education, the information society has to be shaped in a way enabling its evolution towards knowledge societies.

Guided by the United Nations Millennium Declaration, the international community should be able, during the forthcoming World Summit on the Information Society (Geneva, December 2003), to focus constructively on the following objectives:

- Agreeing on common principles for the consolidation of knowledge societies;
- Promoting the use of ICTs for capacity building, empowerment, governance and social participation;
- Strengthening capacities for scientific research, information sharing and cultural creativity, performances and exchanges;
- Enhancing learning opportunities through access to diversified contents and delivery systems.

Access to education is a basic human right and it should be secured by all means. Free, compulsory and universal primary education is among the most clearly defined of educational rights which governments and international organisations have a duty and responsibility to make a reality. Advancing the right to education should therefore be a central concern in the information society and strong emphasis should be placed on harnessing the potential of ITCs for ensuring a really inclusive education process.

Using ICTs for better education also implies the formation of networks of educational specialists, an increase of exchanges and co-operation in the fields of education, science and culture as well as the application of new methods of content development and access to education and scientific information such as the modalities of distance learning e.g. virtual universities, virtual laboratories and research groups etc.

ICTs offer the potential to expand the present scope of teaching and learning, breaking through traditional constraints of space and time as well as boundaries of existing educational systems. Progress towards learning societies is based on the need to acquire new knowledge throughout one's life. ICTs offer more and more varied opportunities for learning outside formal education systems. But as educational demand increases and supply diversifies, increased disparities can be observed with respect to access, affordability and quality. After decades during which education was acknowledged as a public good that promotes equity through free basic schooling and fosters social cohesion, the accelerating privatisation of educational goods and services, partly driven by the potential and impact of ICTs, poses an entirely new challenge both for the international community and for national authorities.

ICTs are innovative and experimental tools which make it possible to modernise education. Their potential should be fully recognised as new delivery mechanisms for system-wide expansion of educational provision, especially through distance education and open learning opportunities, including non-formal education. The Education For All (EFA) objectives set out by the international community in Dakar, Senegal, in April 2000, encourage an increased use of ITCs with a view to reaching out to the excluded, to improving the quality of available content, to enhancing and considerably upgrading teachers' skills, and to establishing and strengthening reliable education management systems.

There is a need in this context for a dialogue between all stakeholders in education - governmental, non-governmental (in particular teachers' associations), private sector and intergovernmental organisations - so as to foster better public understanding of educational issues influenced by ICTs. Platforms for

dialogue and action involving both the public- and the private-sector providers of educational goods and services should be given particular attention.
There is also a need to address ethical and legal issues concerning the use of ICTs in education: e.g. ownership of knowledge; legal frameworks of use of contents and educational materials; the impact of education on cultural diversity, etc. Some principles and actions may be proposed and promoted with respect to the above:

Principles

- ICTs must contribute to enhancing the quality of teaching and learning, the sharing of knowledge and information.
- ICTs have the potential to introduce in the educational process more flexible responses to societal needs.
- The potential of ICTs to lower the cost of education and to improve internal and external efficiencies of education systems must be grasped.
- The Information Society must seize the opportunities of ICTs as innovative and experimental tools to renew education.
- ICTs should be seen both as curriculum per se and as pedagogical tools capable of enhancing the effectiveness of educational services.
- Widespread dialogue among all stakeholders and consensus building at national and international levels can yield strategies and policies for expanding access to education and learning, progressing towards EFA targets nationally, and renewing formal and non formal education systems.

Actions

- Disseminating knowledge and best practices related to the use of ICTs in education and learning processes and to their impact on education systems (e.g. through online clearing houses and multimedia resource centres).
- Demonstrating the impact of ICT-based alternative delivery systems through pilot projects, notably for achieving EFA targets.
- Furthering teacher training in the use of ICTs in education as well as new forms of networking of teacher institutions and teachers.
- Promoting the use by governments of ICT-based delivery systems in formal and non-formal education, using different mixes of new and traditional media and appropriate methodologies.
- Disseminating results of research on ICT-facilitated dynamics of the teaching/learning process and their impact on content and teacher-learner interaction, in particular as regards distance education and teacher training and development.
- Fostering international debate and reflection in favour of developing internationally compatible descriptors and standards for distance and e-learning courseware, and for e-learning institutions.

In summary, ICTs offer the potential to expand the scope of teaching and learning, breaking through traditional constraints of space and time as well as boundaries of current education systems. The observed privatisation of educational services, partly driven by the potential and impact of ICTs, poses

an entirely new challenge for the international community. In this context the different stakeholders will have to define the best way for taking advantage of ICTs in order to improve the quality of teaching and learning, sharing knowledge and information, introducing a higher degree of flexibility in response to societal needs, lowering the cost of formal and non formal education and improving the efficiency of the existing education systems.

* * *

For an Information Society to be open and inclusive, high prio rity should be accorded to addressing the needs of those disadvantaged and marginalised groups that are usually excluded. Improving and expanding access to the benefits of the information society for young people is therefore a crucial issue. National and international authorities should adopt principles and encourage actions that actively assist young people in participating in the process of both "producing" and "consuming" information. The strategy should be aimed at helping young people to benefit from ICTs for network strengthening, information sharing, creating knowledge resources and developing skills necessary for work in the new digital environment. It should also set the stage for the creation of national and regional youth information and communication networks, and provide for appropriate technologies and training for disadvantaged young people, specialised NGOs and youth leaders particularly in post-conflict zones.

Various concrete actions should be designed, promoted and implemented in this respect. For instance, it is important to stress efforts targeting a) consensus building around shared values and ethical principles that should underlie the information society; b) strengthening capacity building for ICT use by young people e.g. through multimedia community centres; c) promotion of the development of appropriate information and communication tools to support decision making and to encourage intergenerational dialogue; d) encouragement of the formulation of policies for enhancing the role of young people in the information society; e) furtherance of the access of young people to information and knowledge sources as a prerequisite for their competent social decisions, behaviour and participation, and, finally, f) improvement of training of the younger generation in ICT literacy and technical skills in order to enable it to enter the information society empowered.

UNESCO has long recognised the power of information as a vehicle for positive social transformation and development. The INFOYOUTH network (www.infoyouth.org), created in 1991, is a good example of its efforts to leverage new technologies as a catalyst and platform for addressing the needs of young people, particularly those in developing countries.

The main objectives of the INFOYOUTH network are to provide an overview of youth policies and programmes throughout the world and to develop a reliable network for information sharing and exchange of experiences thereby creating an effective toolkit for accessing, selecting and disseminating relevant information at the international, national and local levels. Societal and attitudinal transformations are difficult to implement and require sustained long-term efforts. By providing mechanisms to facilitate its participation INFOYOUTH enables today's youth to become an active participant in social life and a key partner in developing truly sustainable strategies for development.

Some recommendations for enhancing youth empowerment through ICTs

By embracing young people as equal partners and supporting their efforts through various actions at the policy and project levels greater strides can be made towards harvesting the full potential of ICTs and youth in addressing key development challenges. Following are a some recommendations suggested for furthering this process:

1) Promote global access to multilingual information and knowledge sources for young people including opportunities for quality education in formal and non-formal settings, training in ICTs skills and information on issues having a practical impact on their every day lives;

2) Promote affordable access to the global information network, especially in disadvantaged areas, and expand the information infrastructure to create more opportunities for development at the local/community level through distance learning, community multimedia centres, and related opportunities;

3) Encourage equitable expansion of the information society by promoting ethical principles, building capacity to generate knowledge and content at the local level and in local languages, increasing public domain content and quality open-source software and involving young people in the process of developing guidelines for the emerging knowledge society;

4) Provide opportunities for cultivating the creativity of youth, open life-long learning opportunities for young people, and promote their access to careers dealing with ICTs;

5) Implement special programmes such as fellowships and competitions that would improve the meaningful access of young people to ICTs, support youth efforts to foste sustainable development and a culture of peace, and enabling disabled and handicapped youth to participate more actively in society;

6) Improve co-ordination of efforts among all actors (policy makers, international community, civil society and private sector) in addressing youth- and information-related issues and enhancing the participation of youth in the formulation of policies that impact their future.

Dr Boyan Radoykov
Programme Specialist
Information Society Division
UNESCO

Paris, June 2003

Hyogo Phoenix Plan

(The Great Hanshin-Awaji Earthquake Reconstruction Plan)

The Great Hanshin-Awaji Earthquake resulted in an unprecedented catastrophe. Our reconstruction efforts should aim not only to replace what was lost during the disaster, but also to solve various issues that we are presently facing toward the creation of a brighter future. Based on this recognition, the Great Hanshin-Awaji Earthquake Reconstruction Plan (Hyogo Phoenix Plan) has adopted a new focus to realize the rebirth of disaster-affected areas.

Outline of the Plan
Established: July 1995
Target Year: 2005
Target Areas: The 10 cities and 10 towns in Hyogo Prefecture

Basic Theme
Harmonious Coexistence Between People and Nature, People and People, and People and Society

Basic Goals
Creation of a Society Dedicated to Public Welfare Tailored for the 21st Century
Creation of a Culturally Rich Society Open to the World
Creation of a Society Where Existing Industries Grow and New Industries Flourish
Creation of a Disaster-Resistant Metropolis Where People Can Live With Confidence
Formation of a Multi-Centered Network-Type Metropolitan Area

The Final Three-Year Programs
In December 2002, the Final Three-Year Programs of the Hyogo Phoenix Plan were established to tackle the issues that remained to be solved within the last three years of the period designated for the Hyogo Phoenix Plan. The Programs also aim to ensure that achievements gained through the past reconstruction efforts be relayed to a "mature society" in the 21st century.
In planning the Programs, the current status of the disaster-stricken areas and the progress being made toward creative reconstruction were reviewed thoroughly. Efforts are being made to identify remaining issues to be solved as well as basic directions to be followed during the last three-year period. The Programs indicate the initiatives of primary importance as well as the directions that should be taken in implementing policies both for solving these issues and developing further existing policies.

Wings for peace
Anonymous

I am not an angel but I wear my wings to fly,
my mission is for peace and love,
this is what they signify,
I am not an angel but someday I would like to be,
for the world is full of violence
and I want you all to see,
If we wear our wings for peace and love
and promote the good within,
we'll rid this world of all of the hate,
violence, crime and sin,
I am not an angel, my home is here on earth,
I take flight to the clouds,
for there my dreams have worth,
So wear your wings and fly away,
spread your kindness and love,
to build the world of peace that God intended,
and that we are all dreaming of!
"WHAT YOU BELIEVE...BECOMES YOUR WORLD

I am Sarah Alam, currently doing my Bachelors in Mass Communications from Karachi University. I have an interest in writing for social issues which is leading me towards the field of journalism. That is also the main reason behind my involvement in iEARN. I joined iEARN way back in the year 2000, currently I am working as the Student facilitator for iEARN-Pakistan and Youth Representative for the iEARN Management Assembly. iEARN is a global community of more than 5000 schools and over 100 youth organizations promoting and strengthening relationships among the various people of different countries which is very evident in today's unique gathering in this hall . I really feel privileged to talk to you all and share my story.

As far as my involvement in iEARN is concerned: it has been 3 years since I have been involved in iEARN. Over the span of three years there has been a drastic change in my lifestyle and personality. I find myself very different from what I was 3 years back. My sister who is an educator introduced me to iEARN. As a 9th grade student I joined iEARN with no clue of what iEARN was all about. Later the discovery of iEARN and its philosophies and knowing and working with iEARNers all around changed my life forever. This experience proved instrumental in the way I perceive the world and its habitants today.

Today I am invited in front of this huge gathering to share my story of change, which is not only the story of one child and student but in it also reflects the paradigm shift in the thinking and perceptions of hundreds of Pakistani youth who are participating in iEARN and I am sure of the iEARN students globally.

iEARN served as a tool for me to express my ideas and opinions and hence I started off my writing by getting involved in the discussions carried in the youth forum, a place for students to interact with each other and get a better understanding. The youth forum is one place where thousands of students unite together and form a bond of friendship irrespective of their boundaries. The youth forum later on lead me to the civics forum and therefore I became an active participant of iEARN CIVICS: **Community Voices Collaborative Solutions a project for students and educators from** Algeria, Egypt, India, Jordan, Lebanon, Morocco, Pakistan, Sri Lanka and Tunisia who are participating and focusing on projects and issues of civic education. It is through this project I was involved in meaningful dialogues relating to current issues and religious prejudices with students from participating countries. These discussions provided me an opportunity to discuss the customs and practices prevailing in my country and also Islamic beliefs. It was through these discussions I was able to clear some weird myths and misconceptions.

These discussions not only helped me in clearing the mysterious perceptions of others regarding the people of my country but also helped me in having a better picture of others. It broadened my vision and opened my eyes. These discussions, though prolonged ones, opened new gates of friendship and understanding about the issues like religious beliefs, understanding cultural differences and thus helping us in being tolerant of each other and iEARN oriented.

These discussions helped me in becoming a citizen of the world which previously I believe was not. As I never felt a bond between myself and others belonging to different cultures but yet it is after my involvement in iEARN, I started feeling the pain for others. Not only me but all the iEARNers around the world unite together in each others sorrows and happy moments and let each other feel their presence and their support which builds up a strong bond that lasts forever.

This is the essence of iEARN connecting people irrespective of their identities. In the span of 3 years I have countless friends in every corner of the world who have their hearts open for me. This is what I could never imagine before joining iEARN. The best part of iEARN in my opinion is that it has helped me in learning the world map and know about countries that I never ever heard of before joining the splendid iEARN family. It makes me feel proud when I see that I have a wide spread family all around the world.

iEARN has also served as a tool for sharing ideas and opinions as it provided me a forum where I could let others know my views and which became the basis of my writing. Hence I started writing my own articles picking up social issues like peace, terrorism, women's rights,

child labor and so on. It is the interest I developed in writing that urged me into digging out bitter realities of life often from which we turn our backs.

Yet it also dawned on me that when we think every thing is right in reality that is not true. As this interest that I developed in writing exposed me to horrifying realities which made me aware of the oppressed ones. It is due to this urge for writing and sharing with my iEARN friends the injustice that prevail in the world I became aware of innocent young children who are being used as camel jockeys by the Arab Sheikhs in the Gulf states, the sex labourers who work day and night in the red light areas of Lahore and various parts of India. These bitter facts not only made me write about them but also urged me to do some thing to put a stop to this menace that is rapidly eating humanity. Often some of my thoughts left me with a lot of questions which were often answered by many of my fellow iEARNers with whom I shared my concerns.

The tremendous amount of responses I received for my writings made us all realize the importance of humanity and justice which is fading away from our world but this realization grew us all the more close together and hence opened new gates of friendship and understanding and building respect for each other. iEARN provided me an opportunity to be involved in authentic reading and writing as I have been interacting with real people whom I know and care for. I therefore have been writing for a real purpose on issues our globe is facing.

iEARN has indeed provided me courage to stand up against the evil and fight for justice and our rights.

All these factors have been the basis of my enthusiasm and therefore I am now facilitating and working effectively to make a difference with my counterparts in different countries in two online projects that are on child labour and drugs. Through both these projects we tend to create awareness among the youth and come up with concrete steps to evade these social problems that our globe is facing today.

We are fighting to save the innocent victims who are falling prey to these fatal diseases that are spreading enormously throughout the world.

As I reflect over my 3 years span within iEARN I realize that I have covered a long journey full of experiences. iEARN not only provided me courage and boldness but also provided me an opportunity to prove myself and let myself be known all around the world. It is because of iEARN I was provided an opportunity to be a Key note presenter last year in National Educational Computing Conference held in San Antonio, Texas. This was my first experience of public speaking. As I remember in school I always used to hesitate in participating in debates or in activities that involved public speaking I always lacked confidence and it is through iEARN I gained confidence. Hence I delivered a speech in front of 8000 people. That turned out to be my first step towards recognizing myself and that even

I could do something constructive. It is after that I started getting involved in numerous iEARN programs in participating schools in Pakistan and also supporting iEARN members nationwide.

Later on I was elected as the Youth Representative for iEARN globally which enabled me to raise the concerns and voice of the Youth. It made me closer to many students from various parts of the world and thus giving me lots of new friends across the globe.

Apart from building relationships, iEARN enhanced my professional skills. By participating in professional development courses on creative writing, I can now facilitate workshops which were a big deal for me before joining this wonderful organization. iEARN also provided me an opportunity to participate in conferences where I was provided with a chance of meeting and learning from knowledgeable people. I recently attended the Bridge regional teachers' conference held in Alexandria in June which turned out to be a great learning experience for me.

iEARN is indeed a tool for learning and making a difference in a healthy and friendly atmosphere. I believe iEARN is one place where people from around the world unite together to develop an understanding for each other. Therefore I can rightly term iEARN as a key to unity and acceptance and a path of peace and friendship.

My ambition now is to facilitate more and more youth representatives from around the world so that they could benefit in a similar manner.

PEACE THROUGH ICTs

Mikio Tajima

I am greatly honoured to speak at the 10th iEARN Conference and, at the same time, feel very much at home in this international gathering of 500 people from 70 countries.

This gathering reminds me of my good old days at the United Nations where I served for 33 years as an international civil servant. International civil servants are very unique creatures. Just like you, we are also from various parts of the world where our backgrounds - way of life, cultures, religions, languages, values - are so different. Naturally, now and then we have differences of opinion, even friction and misunderstandings. And yet, we can be united and active in the name of a higher objective, that is, WORLD PEACE. This international civil service institution is an important experiment, which must succeed and which may very well serve as a model for our impending Global Governance world.

We are living in a world of globalization. Globalization is like an ocean wave. It cannot be stopped but may possibly be slowed down. Globalization has bright aspects as well as dark aspects. The bright aspects are many but so are the dark aspects. What is of major concern is that so many developing countries are not benefitting from globalization. Information Technology is a case in point.

As the Secretary-General of the United Nations, Mr. Kofi Annan, stated in his Millennium Address that many developing countries, in particular, the least-developed countries are urgently in need of computers as well as training of local users. Accordingly, both the governments of developed countries and private sectors are requested to donate the equipment. Equally important is the dispatch of young instructors, in particular, young university graduates, who are urged to undertake this task. Here, I believe, ICTs may have an important role to play.

People are constantly asking, "What do you mean by peace and how can we achieve

it?" There are two types of PEACE; passive peace and active peace. Passive peace refers to peace without violence. Some people may very well live in non-violent country but still under a dictatorial regime. The other type of peace is active peace, that is, peace without structural violence, often resulting from extreme poverty, injustice, serious human rights violation, environmental degradation etc. Unless both types of peace are realized, there will be no real peace. Peace should not be taken for granted. Peace is not free. Some may think it is free like the air we breathe or the water we drink. Peace must be eagerly sought and won.

One thing is certain. We are living in a world of interdependence. We need each other. We must co-exist in peace. We have no alternatives. We are all equal but are different. We must respect our differences. Human rights must also be respected. Trust must be built not just at the governmental level but also at all citizens' levels such as NGOs like ICTs, mass media, academia and business community levels. Under no circumstances should doors be closed. No one should be excluded. Dialogue must be promoted.

Peace education is the answer. So far, peace studies are taught primarily at the university level but age-wise the university level is already too late. If somewhere a kind of peace education is already instituted at the level lower than university, I would say "Congratulations and well done". Ideally, I would say peace education must begin at the grammar school level. Here, again, ICTs has a distinct role to play. Through ICTs, a culture of peace could be promoted and youth around the world could be brought closer.

In many developing countries, the lack of educational opportunities is adversely affecting their economic and social development. Too many youth are deprived of educational opportunities. Economic realities are such that they are forced to work, instead of going to school, in order to support his or her family. Also, in those countries with internal or domestic conflicts, they are often forced to become child-soldiers. When conflicts are over, even when they return home, they encounter serious difficulties in adjusting themselves to their former communities. Theyremain so weak, so helpless, with no hope.

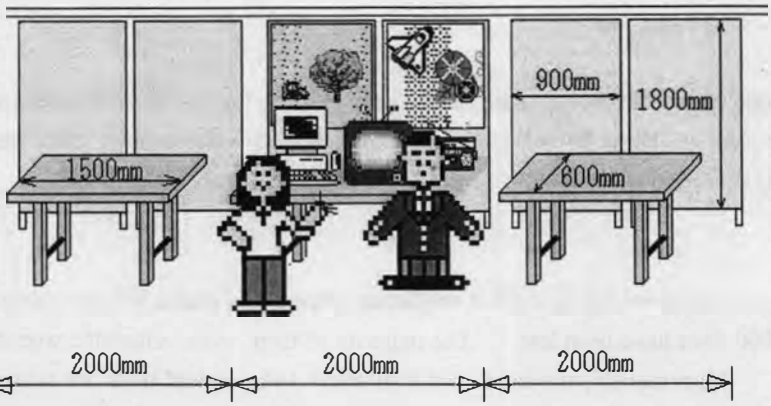
Looking around the world, there are so many ongoing internal or domestic conflicts. The fact that we have far more internal conflicts than inter-country conflicts is a post-Cold War phenomenon.

I myself was involved in conflict resolution work in Sri Lanka where to date more than 70,000 lives have been lost. The majority of them were vulnerable women and children. Miraculously, the truce is still in effect and political talks are continuing. Most importantly, parallel to the political talks, confidence-building efforts are being carried out nearly at all levels, in particular, at the citizens' levels. Confidence-building is time-consuming but is of critical importance if peace is to be sustained. Here, again, ICTs' potential is tremendous. A culture of peace needs to be developed and nourished. Sharing of experience like you are doing here in Awaji is of vital importance.

As you may recall, in the case of Northern Ireland, at one point Irish women in opposing camps rose up by saying "Enough is enough" and jointly organized a women's march in Belfast - involving both Catholics and Protestants - , which led to a breakthrough in their political negotiations. In the same way, youth can be encouraged, even empowered to be young peace workers in their own rights. In so doing, our young people can be transformed into a positive force in society.

Peace education at the grammar school level should be a universal goal and it is hoped that ICTs will take its rightful place in this process. The youth are our hope for the future and all efforts in support of future generations will be amply rewarded.

ポスターセッション



スペース

幅 2m　奥行 1m　(ただし回廊の幅は約 3.2m)

主催者側準備物

○テーブル(長さ 1500mm 幅 600mm 高さ 700mm 程度)1台
○ポスター掲示用パネル(W900×H2100mm　板面有効寸法 W900×H1800mm)2枚
○電源コンセント2口(ICT 部会で敷設)
○情報コンセント1口(ICT 部会で敷設)

発表者側準備物

○掲示用ポスター、パソコン等必要な機材
持ち込み機材については発表者自身が責任管理して下さい

セッションの時間

○11:20－13:40
(上記の時間には、できる限りブースにいて下さい)
○当日の16:20までは掲示可能です。

機材の搬入

○9:00－11:20に、発表者がご自分で搬入してください。
○特に高額な機材(PC、Video etc)については、ご本人が持ち込んで下さい。
○宅急便利用については、「夢舞台アイアーン宛」に、
　当日午前10時まで指定または前日午後2時～4時指定で送付して下さい。
本部で一旦預かりますが、保管倉庫がありませんので、破損、紛失等の損害補償は一切できません。

機材の搬出

13:40以降　16:30までに発表者がご自分で搬出してください。
宅急便利用者は、着払い発送で利用できるように検討中です。

分科会発表者へのお願い

事前打合せ

・現在の所、特に設けておりません

発表時間

・発表時間は厳守して下さい。

発表時間の例

・発表者の発表（20分）＋質疑応答（20分）
構成は、発表者が自由に決めて下さい。

プレゼンテーション用機材

・各分科会場に、PC（Windows＋office）とビデオプロジェクター(All rooms are equiped with Windows+Office PC and LCD Video Projector.) があります。

・Power Point, Word, Excel, Internet Explorer を使ったプレゼンテーションが可能です。

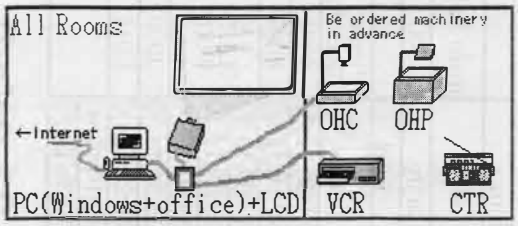
・その他の必要機材については、あらかじめ登録して下さい。できる限り準備します。
登録終了しました（7月13日）
http://www.ipc.kit.ac.jp/ yujin/iEARN2003/

係員

・メインホール以外には、司会は設けておりません。
各発表者が会議を進めていって下さい。

- タイムキーパーが1名、IT補助員が1名います。
  IT機器の設定やトラブルについては、IT補助員の指示に従って下さい。

・通訳は原則としておりません。
- （参加者で簡単な通訳可能な人に EJ バッチをつけていただくなどを含めて、ただ今検討中です。）
- 緊急に通訳が必要なトラブルが生じたときは、タイムキーパーに申し出て下さい。
- その他のトラブルについては、タイムキーパーに相談して下さい。



July 22 (Tue)

floor		2F			3F						4F					floor	
room		main hall	reception hall B	Corridor	301	302	304	305	311A	311B	401	402	403	404	405	room	
capacity		600	200		140	30	25	25	64	64	15	15	40	40	70	capacity	
Session	time															time	Session
	9:30-11:00	Plenary Meeting			Youth											9:30-11:00	
A	11:20-12:00	J071	Lunch	Poster Session		E091	E026		E008	J035	JEARN W008	The Internet room	E085	J047	J026	11:20-12:00	A
B	12:10-12:50	E007				E028	E110	E063	E072	J067			J054	E002	J044	12:10-12:50	B
C	13:00-13:40	iEARN W007				E067	E013	E122	E062	J019			E081	E078	J048	13:00-13:40	C
D	13:50-14:30					E041	E069	E061	E050	J027	The Internet room		E022	E014	J011	13:50-14:30	D
E	14:40-15:20		Video Conference			E040	E111	E009	E094	W003			E012	J017	J033	14:40-15:20	E
F	15:30-16:10	J006				E024	E119	E114					E092	E090	J003	15:30-16:10	F
G	16:20-17:00	E011				E113	J074	E120	E056				E018	J015	J028	16:20-17:00	G
V	17:10-17:30		TV news													17:10-17:30	V
	17:30-19:30															17:30-19:30	

July 23 (Wed)

floor		2F			3F						4F					floor	
room		main hall	reception hall B	Corridor	301	302	304	305	311A	311B	401	402	403	404	405	room	
capacity		600	200		140	30	25	25	64	64	15	15	40	40	70	capacity	
Session	time															time	Session
	9:30-11:00	Plenary Meeting			Youth											9:30-11:00	
A	11:20-12:00	E023	Lunch	Poster Session		E033	E108	E112	J065		JEARN W008	The Internet room	E093	E020	J043	11:20-12:00	A
B	12:10-12:50	J014				E077	E100	E115					E098	E048	E035	12:10-12:50	B
C	13:00-13:40	E003				E099	E065	E095	E079	J025			J007	E075	J005	13:00-13:40	C
D	13:50-14:30	J045				E017	E116	E021	E084	J059	The Internet room		J009	E060	J013	13:50-14:30	D
E	14:40-15:20	J008	E066			E032	E055	E051	J042	W002			E046	E107	iEARN W010	14:40-15:20	E
F	15:30-16:10	Teddy bear W006	Video Conference			E105	E054	E038	E037				E044	E030		15:30-16:10	F
G	16:20-17:00					E031	J075	E016	E034				E080	J030		16:20-17:00	G
V	17:10-17:30		TV news													17:10-17:30	V
	17:30-19:30															17:30-19:30	

July 24 (Thu)

floor		2F			3F						4F					floor	
room		main hall	reception hall B	Corridor	301	302	304	305	311A	311B	401	402	403	404	405	room	
capacity		600	200		140	30	25	25	64	64	15	15	40	40	70	capacity	
Session	time															time	Session
	9:30-11:00	Plenary Meeting														9:30-11:00	
A	11:20-12:00	J069				E068	E058	E059	J049	J057			J058	J032		11:20-12:00	A
B	12:10-12:50	J018	Lunch	Poster Session		E109	E027	E045	E001	J029	JEARN W008		E074	J002		12:10-12:50	B
C	13:00-13:40	J068			Youth	E101	E104		J037	J040		The Internet room	E057	E010		13:00-13:40	C
D	13:50-14:30	iEARN W010				E106	E118	E121	J038	J031			J051	J010	W001	13:50-14:30	D
E	14:40-15:20		W011			E047	E005	E117			The Internet room		E102	E053		14:40-15:20	E
F	15:30-16:10	J001				E097	E004	E064	W009				E088	J034		15:30-16:10	F
G	16:20-17:00		W005			E052	J076	E073					J073	E089		16:20-17:00	G
V	17:10-17:30															17:10-17:30	V
	17:30-19:30		TV news													17:30-19:30	

Poster Session

July 22 (Tue)

booth	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10
article ID	E006	E029	E043	J004	J016	J056	J036	J053	J077	

July 23 (Wed)

booth	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11
article ID	E019	E039	E082	E103	J012	J041	J052	J061	J046	J022	J079

July 24 (Thu)

booth	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11
article ID	J020	J023	J024	J039	J072	E096	J021	E042	E025	J062	J070

July 22 - Room 302

22-302-A (11:20 - 12:00)

English

E091 ***汚染:人類のもたらした脅威***

by SUBHODEEP SARKER(India)

汚染:人類のもたらした脅威はじめに:科学技術の現代では汚染は日常生活において無視できない。汚染は人体や自然環境に害をもたらし、水の惑星、地球上で、生命が生き延びるのが困難になってきた。汚染の原因は多すぎてとても書ききれない。もっとも深刻で生命にかかわるのが、水質汚染、土壌汚染、そして大気汚染である。衆知のとおり、宇宙の存続に欠かせない4大元素である炭素、水素、酸素、窒素にとっては液体(たとえば水)が運搬にもっとも重要である。地球では環境システム全体の中で、水は異なる栄養度のところに栄養を運び、食物連鎖や食物の仕組みを保つだけではなく、水の循環や栄養の循環といった自然現象やその過程、循環を完成させている。水質汚染:この原因は主に下水処理設備の不備、不衛生な処理水を放水すること、石油の漏出、また富栄養化である。石油漏出による大惨事は1991年のイラク対クウェートの湾岸戦争の最中におこった。国連軍が介入し、イラク敗戦で戦争は幕を引いたが、戦争中のクウェート国内の石油備蓄設備の破壊で、石油が漏出して水質が汚染し、何千もの水中生物の生命が奪われた。石油が漏出量は、世界中の石油需要の15日分だったと推定されている。土壌汚染: 土壌汚染もまた破壊的な公害である。人間を含めた地球上の有機物にとって土壌はもっとも基本的な植物の源である。土壌が汚染すると地球上の生き物の生命が脅かされる。土壌は殺虫剤や同様の物質の使用過多に起因するものが大半で、これらの物質には収穫や病気に対する抵抗力、土壌の肥沃度を低下させる毒素が含まれている。大気汚染: 水質や土壌の汚染は大災害をもたらすが地域的なものであるのに対して、世界規模で問題となっているのが大気汚染である。大気汚染の原因は無数にある。工場からの気体排出物や温室効果ガス、炭化水素が石油を燃やすことで大気に排出されたり、缶やスプレーに充填されたクロロフルオロカーボン(CFCs)が排出されるのもある。これらのうちではCFCsの排出がもっとも危険で皮膚癌の原因となる危険な太陽の紫外線から地球を守るオゾン層を破壊する。救済策:環境汚染と戦うには、まず自然界の汚染を観察し、環境に与える破壊効果を注意深く分析しなければならない。次に、総合的な浄化設備を整える必要がある。そうすることで何度も水をリサイクルして正しく利用することができ、またリサイクル後の水の純度や安全性が保障される。

22-302-B (12:10 - 12:50)

English

E028 ***伝統と習慣の改善について***

by Mitra Fathollahpour(Iran)

アイアーンプロ開発オンラインコース(社会科、作文、EFL-ESL、科学)に 複数のイラン人の先生方が参加された事があります。 それは先生方にとっても、またその生徒達にとっても、学ぶ事への基礎と なるプロジェクト、情報伝達技術、E-Leaningとアイアーンの魂により親し む為のとても素晴らしい機会となりました。 社会科コースですでに行われているプロジェクトのうちの一つに伝統と習慣 の改善(CIVICS Projectの一つ)があります。 Kherad高校の生徒達が3つのグループに分かれて、アメリカのニューヨーク の生徒達と共同で研究しました。このプロジェクトは、「社会的価値」 の概念の手がかりを学ぶ助けとなるように、9学年の社会科コースからの 練習企画として計画されました。最終的な成果として生徒達は、簡単なサイ トをデザインし、そこに自分の学校のサイトをリンクさせました。 このようなプロジェクトによって、自己への自信、伝達能力、英語、IT、 研究技能の局面において、生徒達に深く影響を与えました。

22-302-C (13:00 - 13:40)

English

E067 ***伝説と迷信***

by Ines Pearson(USA)

このプロジェクトは、私の生徒とスペイン語を母国語とする生徒と共に取り組みました。彼らは Miami Country Day School の生徒です。日本、イラン、ロシアの学校とも共に取り組んでいます。

22-302-D (13:50 - 14:30)

English

E041 ***iEARN学習サークル***

by バリー S クラマー、 マーガレット リエル(United States)

1学期内に終えられる双方向型の共同執筆作業を中心とした確立されたiEARNプロジェクトを捜しておられますか？学習サークルは世界中のいくつかの学校とプロジェクトを基にしてパートナーシップを組む非常に双方向的なものです。各セッションの期間は14週間で、毎年9月ー1月と1月ー5月の2つのセッションがあります。コンピューター新聞、場所と視点、マインドワークの分野においてオンラインの共同作業が提供されます。コンピューター新聞は全カリキュラムを通して新聞の作成を促します。場所と視点は生徒に異なるところに住む人々と自分たちの知識を共有することによって、地域の歴史、文化、政府、地理を探求するよう働きかけます。マインドワークはもっと創造力に富んだ解説文を書けるようにしたり、いろいろな形の自己表現ができるように考えられており、書くことをテーマにしています。本プレゼンテーションは学習サークルの仕組みを説明し、サンプルのプロジェクトを紹介し、次回学習サークルセッションに参加するために必要なすべての詳細を述べます」。

22-302-E (14:40 - 15:20)

English

E044 ***New Teaching Method for Teachers***

by Mohammad Soleymani(Iran)

Learning is for living The teacher should make the students ready for their future lives. To do this, the teacher in his/her teaching should use all the available facilities in order to get the students involved with the subject of learning. Instructional softwares, internet and useful education sites, are the devices which A teacher can get help from them in order to give a successful teaching. In this pattern the teacher asks the students in order to their goals, with the help of the available facilities, gather the information and then report them to the class. The teacher should just guide and lead.

22-302-F (15:30 - 16:10)

English

E024 ***賞賛と悲しみ***

by neda shirazi(Iran)

私たちはイランの英語教師です。"書き"を教えるのにはたくさんの問題があり、主に、"読み"と"語り"に重点を置いています。私たちは生徒に主題を与え、それについての文章を書いてもらいます。それらの文章を訂正するのにはかなりの時間がかかります。しかし、今では、I-EARNを利用すると、英語の書きの指導が、随分と簡単になっています。(これは、二年生の三クラスの全員が、結果にたどり着くための情報集めを手伝ってくれたチームワークのおかげです。)

22-302-G (16:20 - 17:00)

English

E113 ***私たちのアイアーンプロジェクト:私たち自身と地域への貢献***

by Mrs. Azza Fawzy(Egypt)

エジプトの教師と生徒たちが2003年のプロジェクトについて説明し、参加者自身や学校、そして地域にどういう影響があったのかを話します。

July 22 - Room 304

22-304-A (11:20 - 12:00)

English

E026 ***教師の役割の変化***

by ザーラ バシュト バヴィアン(Iran)

今日、生徒は膨大な量の情報を手に入れることができます。教師だけが情報を与えるものではなくなっています。それは教師が自分たちの役割を変えていかなくてはいけないことを意味します。生徒に情報を与えることが教師の仕事ではありません。教師は情報をどのようにして使うのか、その指導だけを生徒にすべきです。教師はこの役割をどのようにして果たしていけばよいかをお話したいと思います。

22-304-B (12:10 - 12:50)

English, Spanish

E110 ***テレコミュニケーションプロジェクト・マネージャー***

by Palmira Santamaria, Nica Dalmau, (Catalonia, Spain)

皆さんが参加するプロジェクトの多くは、参加者が情報を入手したり、自分自身や他の参加者による投稿を参照することなどができるウェブサイトを持っています。一般には、ウェブサイトの作成は大変な労力を要します。HTMLの知識がある程度必要とされるためです。「テレコミュニケーションプロジェクト・マネージャー」は、テレマティックスプロジェクトに参加する学校による、自らのプロジェクトのサイトとして使用できるウェブサイト作成への可能性を提供します。

22-304-C (13:00 - 13:40)

English

E013 ***技術とインターネット:ウガンダの社会経済的発達におけるインターネット技術の影響のケーススタディ***

by ルクワゴ ジュリオ(Uganda)

背景知識として:これは基本的に、ウガンダがIT技術を経験した期間を考察するケーススタディです。インターネットを通して情報が流れ、世界はひとつの地球村となり、携帯電話によって距離は通信伝達を阻むものでなくなりました。それ故、わが国のインターネットや携帯電話の使用による技術進歩の動きをを見ることは、ビジネス取引を効果的にしたり、学術研究をやりやすくしたり、情報社会を構築していくためのはずみになります。IT技術がどの程度我々の社会に影響を与えたか、また、いわゆるサイバー世代と言われる世代の人々の反応について、スライドによってよくわかっていただけると思います。プレゼンテーションをよりおもしろいものにするため、インターネットカフェの人々の様子のスライド等も盛りこむつもりです。IT技術がウガンダの人々の社会経済傾向をどのような影響を及ぼしたか、その一例をお見せしたいと思います。

22-304-D (13:50 - 14:30)

English

E069 ***イランスクールネット:若者を向上させる手段***

by MOHAMMAD REZA SHOKHMGAR(Iran)

イランスクールネットは、今、イランの教育機関で重要な役割を果たしています。若者がプログラムを通して情報技術(IT)に慣れるための適した手段を提供しています。プロジェクトをするためにお互いにアクセスしたり、セミナーを開いたりする可能性のある150以上の教育および文化センターの取材が、このNGOの重要な役割の一つです。イランスクールネットのこの4年間の経験は、他の国に効果をもたらすものだと認識されるでしょう。このプレゼンテーションでは、成功するための要因と、今後の計画と共に今まで行ってきたプログラムやプロジェクトについて話し合います。

22-304-E (14:40 - 15:20)

English

E111 ***私たちのアイアーン・プロジェクト:自身とコミュニティーに役立てる.***

by Mr. Ali Abou Lila, Mr. Alaa Megahed(Egypt)

エジプトの教師と生徒が2003年に行ったプロジェクトについて説明し、プロジェクトが自分たちの生活や学校、コミュニティーにどのように影響を与えたか語ります。

22-304-E
(14:40 - 15:20)

English

E040 ***望ましい学校の条件***

by Ghavifekr Mahnaz

望ましい学校の条件1. 望ましい、又は良い学校は学生にとって幸せですばらしい場所であること。2. 教師の教え方が良い。3. 学生のモラル、規律上の行いの特別な掲示がある。4. 新しいテクノロジーや科学について学生に情報を与える。5. 学生に知識を与えるために、科学などいろいろな種類の本を置いている良い図書館がある。6. いろいろな種類のスポーツや身体活動が生徒にとって幸せな場所を作ることを気づかなければならない。7. 生徒が実験を行うための実験室を備えてなければならない。

22-304-F
(15:30 - 16:10)

E119 ***情報技術の活用でビジネスを換える***

by RAIFF MORUFF ADEWALE(NIGERIA)

一つの組織から他の組織に情報を伝達する手段を持たない人々にとって、業務管理は非常に困難を伴ってきた。十分に資金を持たないビジネスマンは異なる組織の間での取引を苦労なく遂行することが可能であるとは考えていなかった。ところが、情報技術の発達により、知性や利益、人間関係、国際関係を改善する機会が広がり、心を通わせる機会も広がりました。

22-304-G
(16:20 - 17:00)

English

J074 ***Reseach based presentations in the School of Policy Studies***

by School of Policy studies students A (Japan)

Second year students at the SPS, Kwansei Gakuin Univ produce a reseach based presentation focusing on a comtemporary issue in Japan. Secondary and primary research is used to investigate the problem and current solitions, as well as formulate new policy solutions.Leadership and accountability within the terms is developed through the use of coordinator roles, which are specific jobs for team members. Participants are invited to view the results: well organised, audience friendly,visually interesting, and content rich presentations.

July 22 - Room 305

22-305-A
(11:20 - 12:00)

English

E112 ***私たちのアイアーンプロジェクト:私たちと地域へのメリット***

by Mrs. Mohga El Khamisy, Mrs. Nahed Lotfy(Egypt)

エジプトの教師と生徒たちが2003年のプロジェクトについて説明し、参加者自身の生活、学校、そして地域社会にどういう影響があったのかを発表します。

22-305-B
(12:10 - 12:50)

English

E063 ***The role of community library to develop the rural education in Nepal***

by Bashanta Devkota(Nepal)

Nepal is a small country expanding on southern lap of the Himalayas sand-witched between two Asian giants China and India .But the educational development and practices of Nepal is differ than neighbors. The educational norms and values of Nepal are self defined by the physical, social and political situations of Nepal. The most ignored part of education sector in Nepal is library. .Nepalese literacy comprises 42% in data. . In the fiscal year 2002/03 Nepalese government had allocated the budget for education to be US $ 184646423 which is 15% of the total budget. The budget separated for education ignores the sector of library.The privatization in education has added different challenges for the government. Private boarding schools and colleges are increasing day by day, selling expensive education to middle and higher class of the population. Education provided by the government schools are inferior compared that provided by private sector. Thus the same education system of the country produces two classes of students. The level of educational differences between urban setting and rural setting students bridges the community library established in rural Nepal. Most libraries in Nepal are run by government or non-government sectors, are located especially in cities, and are well equipped to the needs of city dwellers only. Many villages in Nepal do not have a single bookstore, let alone a library. People in these rural areas lack means, books and other materials. Quantitatively, more than seven hundred libraries were established but they faced the problems of sustainability.Established in 1991, Rural Education And Development is a non-profit and non-governmental organization based in Nevada, U.S.A. with the objective of opening libraries in rural areas of Nepal. READ is the only organization in Nepal working in the field of Community libraries with the primary focus of helping to establish, promote and strengthen such libraries in the rural villages of Nepal. Since its inception, READ is contributing its efforts to rural village people to set up libraries. READ does not implement its project directly. It provides the financial as well as technical support to the community. The responsibility of project implementation and its smooth operation solely rest on the community. The primary focus of the READ library is sustainability. The objectives of READ are- Help establish community resource libraries- Facilitate local initiatives by improving support to physical development- Provide training and skill to run the libraries in an effective and sustainable way- Provide support to facilitate the felt need of the libraries. Within the 12 yrs of our experience we are able to form a 32 self-sustained libraries with the country ,the Thak community library is one of the best in South Asia .These libraries not the place just holding educational materials and lending to community people but they act as a community educational development center . I would like to share our effort and its outcome of community library for the development of educational system to entire world through the iEARN Conference

22-305-C (13:00 - 13:40)
English

E122

by (Czech Republic)

22-305-D (13:50 - 14:30)
English

E061 ***人々はアフリカ文化をどう見ているか***

by Bernard Acheampong(Ghana)

当日、会場で発表します。

22-305-E (14:40 - 15:20)
English

E009 ***公開ソフトウエアーデジタル・ディバイド(情報格差)の架け橋***

by チャールズ　ブルースター(United Kingdom)

デジタル・ディバイド(情報格差)についての懸念が叫ばれています。これは、コンピューターを使いこなすことができ、同等の技術を持つ人達と繋がることのできる人達(主に先進国の人達)と、それほど恵まれてない人達(先進国、発展途上国の両方の人達)との間に存在する格差です。それは、貧困、教育の機会の欠如によるものであったり、設備を入手できない、通信伝達のためのインフラが整っていないというということもありましょう。今日、多くの企業、施設はコンピューター・ハードウェアを3年経ったら減価償却してしまいます。イギリスの地方でも、例えば、1990年代終わり頃からの中程度のPCが修理調整されて、わずかな金額で買うことができます。ヨーロッパや北アメリカの全域で、また、あえて言わせていただくなら日本でも、発展途上国の学校や大学に送ることのできるPCを手に入れることができるかもしれません。ただ問題は、こういったPCでうまく機能するMSウィンドウズOS の初期のバージョンのものを手に入れることがだんだん難しくなってきていることです。そこで私は教師がLinuxやUNIXを使う基本的なコンピュータースキルを身につけることができるよう国際的な協力を呼びかけたいと思います。これら公開OSは1995年頃以降のPCであればどのような標準的な仕様でも使えます。Linux、UNIXには公開または無料のアプリケーションがあり、コンピューターの素人でもうまく使えるようになっています。ワープロ、スプレッドシート、プレゼンテーション・グラフィック、データベース、インターネットなどがそれです。また、OSにはC/C++パールプログラムサポートが組み込まれています。長期的なプロジェクトではありますが、「デジタル・ディバイド(情報格差)」の解消に役立つプロジェクトです。

22-305-F (15:30 - 16:10)
English

E114 ***Education in Kenya***

by Gordon Ondiek Nyabade(Kenya)

22-305-G (16:20 - 17:00)

E120 ***世界の音楽***

by SAHEED OLALEKAN OKUNOLA(NIGERIA)

音楽は人生の最高の癒しであり続けてきた。到達できると考えたこともなかった高みに音楽は私たちを連れて行ってくれる。傷ついた心を持つ人の魂の価値を讃え、高めてくれる。音楽は感動の源であり、美しい旋律である。

July 22 - Room 311A

22-311A-A (11:20 - 12:00)
English

E008 ***世界の自動車の発展***

by chibueze adiele(South Africa)

世界の自動車の整備－自動車の改善と可能性のために

22-311A-B (12:10 - 12:50)
English

E072 ***伝説と迷信***

by Ines Pearson(USA)

3つの高校のスペイン語の授業でアメリカ、ラテンアメリカの伝説と民話を翻訳しました。生徒は翻訳するだけでなく、彼ら自身の伝説をイラスト付きで作りました。3つの伝説はイラン、日本、ロシアのパートナークラスで共有されました。

22-311A-C (13:00 - 13:40)
English

E062 ***アイアーン、我々と地球***

by Ulker Kazimova(Azerbaijan)

ここではアゼルバイジャンの生徒によるアイアーンプロジェクトについて話巣予定である。世界中の生徒とどうやって協働したかを伝えたい。私の生徒4人が発表を手伝ってくれることになっている。「わが国の偉大な芸術家」プロジェクトについてまず話す。このプロジェクトでは、参加した生徒がアゼルバイジャンの芸術家について話をした後、その作品の一部を供覧し、興味を持ったことを質問し、本や冊子にまとめたものを配布した。次に別の生徒がアゼルバイジャンの学校が参加した「音楽」プロジェクトについて発表する。さまざまな音楽を紹介し、世界中の若者に人気のある音楽について話す。アゼルバイジャンの音楽、作曲家を紹介し、参加者に、アゼルバイジャンの音楽の一部を聴かせ、オペラやバレーの一部を見せた。興味深く聴いてくれた人たちにCDを配った。次に、三人目の生徒が建築物について話す。「建築と居住空間」プロジェクトに参加し、オンライン雑誌作りに協働した学校からである。ここでは世界の建築実例が供覧され、過去と現代の建造物の違いについて聴衆と話し合う。アゼルバイジャンの建築物の実例がいくつか供覧され、いくつかの場所に関する興味深い言い伝えなども紹介する。4人目の生徒はこの世界における教育の重要性につい

て話す。さまざまな学校システムが紹介され、聴衆に質問が投げかけられる。生徒は参加しているプロジェクトや、アイアーンをどのように取り入れているのかを話す。最後にいろいろな国での祝日や文化行事について話し、歴史とのつながりについて検討する。一番最後に、参加者に我々の発表で何か新しいことを学んだかを尋ねるつもりである。

22-311A-D (13:50 - 14:30) English

E050 ***教育におけるビジョンを達成する手立てとしてのeラーニング***

by アリ・アガ・カシリ(iran)

政府主導の情報技術(IT)の革新政策によりインターネットは世界に広がり、世界中で、簡単・安価に使うことができる、有用なものとなっています。この仕組みを学校でのe-ラーニングを以下のような目的を持って発展させるのに取り入れない手はありません。1.学校の科学のレベルを上げる、2.さまざまな違う趣向を持つ生徒や教師を満足させる多様な素材がある、3.時間のあるときに生徒が直接使うことが出来る、4.安価で効率的な質の高い学習が、時と場所を選ばずに行える。これらは教育の質を高めるために学校で考えなければならない重要な点です。現代の技術社会での学校にはeラーニングは欠かせません。学校に、eラーニングに関するビジョン(ビジョンとは何を創りたいかという明確な夢)と登録ウェブサイト、それに生徒と学校の協力さえあれば、実現できます。生徒と教師はeラーニングを学校では学校内のネットを通して、家ではパソコンでインターネットを通して利用することができます。今回の発表では、世界中のウェブを使ったeラーニングについて話し、eラーニングの目的とは、楽しく効率的な学習方法であり、eラーニングに必要なもののリストとeラーニングシステムの整備された学校の実例を紹介します。 Ali Agha Kasiri テヘラン市Shohaday_e_Karegar高等学校(イラン)副教育長 & IT管理責任者 2003年4月

22-311A-E (14:40 - 15:20) English

E094 ***7C:グローバル学習の七つの条件***

by Bob Hofman(Netherlands)

新しい学習法のICT&Eビジョンにおけるグローバル学習の7条件を定義した。7Cとは、コミュニティに根ざした、文脈重視の、協働する、能力に根ざした、関連性をもった、創造的な、配慮した学習のこと。これらは以前から言われているが、知識は次々リサイクルしていくもの。これはBob Hofmanの提唱で教育における変化を捉えた試みの概念で、すべての善意とエネルギーを適切に導くために、Bobは21世紀の学習のための問題解決を毎日探した。いっしょにサーフィンしてみませんか。7Cのどれかを見失っていないか？　追加すべきことは？　教授法が変わり、ほんものの学習の手助けをするためにどうしたらよいか？　学校などの教育機関にとってのこれからの役割とは？　あなたの回答・ご意見を次へ。sevenseas@ict-edu.nl

22-311A-G (16:20 - 17:00) English

E056 ***グローバル・アート・プロジェクト(グローバル芸術共同研究)***

by Rekichinskaya Elena、Olga Novak(USA/ Russia)

私たちは次のグローバル芸術プロジェクト(iEARN)、『動物の美』と『民話』を平行して発表します。これらのプロジェクトはすべて芸術に基づいており、学際的な面を持っています。プレゼンテーションは英語で行われるでしょうが、見てもおもしろいでしょう。すべてのプロジェクトは小学校から高校まですべての年代の子供に適しています。Global Artは教える過程にも学ぶ過程にも重要な役割を果たしている。芸術の言葉は、世界共通であり世界中の人が理解できるものである。それは私たちが自分の意志を伝えたり、自然の美や平和などを互いに感じるのを助けてくれる。Global Artには様々なテーマでたくさんのプロジェクトがある。参加者は自分の考えやアイデアを文字に書いたり絵を描いたりして表現する。私たちはとても人気のある3つのプロジェクトを発表します。「民話」「作品を通して子どもの権利」「多面的な多様性」です。私たちの発表を聞きに来てください。私たちのGlobal Artに参加してください。

July 22 - Room 311B

22-311B-A (11:20 - 12:00) Japaese

J035 ***インターネットで交流する教師たち***

by 梶原末廣(Japan)

学校・教育の課題を乗り越えて行くにはいくつかの方法がある。その有効な手段のひとつに教師自身の意識の変容がある。『日刊・中高教師用ニュースマガジン(MM)』(200年3月26日創刊)の編集・発行を続けながらセミナーやワークショップを開催している。その活動を通して意志ある学びが実現されている。ボトムアップの取り組みが世界中に広がることを祈念している

22-311B-B (12:10 - 12:50) English

J067 ***「すべての子供に教育を」-教育環境に恵まれないインドの子供たち-***

by 太田まさこ(Japan)

「すべての子供に教育を」という運動が、国連やNGO等によって進められているにもかかわらず、貧困や教育の質の低さ等のため、世界には初等教育を受けていない子供が1億2000万人近くいる。このプレゼンテーションは、インドの農村地域の教育環境に恵まれない子供達　ー　教室がなく校庭で授業を受ける子供、働きながら学校へ通う子供、学校へ行かず農場で働いたり、家事を手伝っている子供　ー　についての現地調査の報告である。

22-311B-C (13:00 - 13:40) Japaese

J019 ***海外修学旅行に際しての国際交流のあり方***

by 浅井 徹(Japan)

1999年度に実施した海外修学旅行(ロサンゼルス)に際しての企画立案の流れから事前指導および本番までの問題点と、それをどのように解決したかについての方法を報告します。 また、学校間交流に際しては互いの高校生(神戸市立摩耶兵庫高等学校とアナハイムのロアラ高校)がメーリングリストを使った交流の様子と本番での交流活動(和太鼓演奏など)を報告します。

22-311B-D (13:50 - 14:30) Japanese

J027 ***国際版:我が家の自慢料理 Home Cooking Project***

by 田邊 則彦(Japan)

食文化を通して国際交流の輪を広げる試みを展開したいと思っています。世界の国々や地域の子どもたちから、日常的に食卓にのぼる料理を紹介してもらい、レシピを交換したり、メッセージの交換を行う予定です。将来的にはオンライン料理教室を開催したいと思っています。

22-311B-E (14:40 - 15:20) Japanese

W003 ***開発教育ワークショップとJICAOBの体験談***

by JICA, 山中　信幸

柳学園の山中先生による、開発教育のワークショップです。教え込みの授業ではなく生徒の気づきを大切にした、生徒主体の授業形態について、実際に生徒になって体験します。また、JICA専門家又は協力隊員OBの体験談の体験談もあります。

July 22 - Room 403

22-403-A (11:20 - 12:00) English

E085 ***学習の冒険－国際的カリキュラムを作る***

by リチャード・リグリー(Japan)

「学習の冒険」の背景となっているのは「学習とは広範囲にわたるものである」という考えである。このモデルでは教室は生徒と教師を結び、話し合い、目標を決め、進歩を評価し、技能の獲得に焦点を当てるための、出会いの場である。生徒も教師も積極的に学ぼうとし、両親や社会をも巻き込むものである。ウェブはこれを反映させるように構築されており、交流を促進し、生徒と教師がより広い世界で共通するカリキュラムを開発し、共有することができる。われわれは、小学校と中学校の教室をつなげて、世界中で科学、技術、数学、地理、歴史、言語教養といった共通のテーマに基づいた勉強をするサークルを作りたいと考えている。国際的カリキュラムで一緒に学ぶ基盤を創り、世界中を実際にあるい仮想的に旅し、実践的にあるいは精神的に共同学習を行いその結果を共有する基礎としたい。

22-403-B (12:10 - 12:50) English

J054 ***五ヶ瀬中学におけるICTと衛生を使った遠隔教育***

by シンチ タツロウ(Japan)

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校で進められてきた遠隔学習の概要とその成果について報告する. この遠隔学習は, 主に衛星通信を介して日本科学未来館など他の機関と接続して進められたものであり, 地上系の高速情報通信ネットワークを併用してその学習の一部は全県に配信された. また, 地球観測衛星から得たリモートセンシング画像を利用した環境学習についても報告する.

22-403-C (13:00 - 13:40) English

E081 ***ロシアより愛を込めて***

by Elena Lialiagina(Russia)

22-403-D (13:50 - 14:30) English

E022 ***技術統合サクセス・ストーリー***

by クリス・ヘッケルト(USA)

学校での情報技術統合プログラムを成功させる秘訣は？　成功の鍵となる要素は？　コストはどれ位かかり、また、資金の拠りどころは？　クリフトン・ヒルズ小学校(テネシー州　チャタヌーガ)で実施されたTLCF(Technology Literacy Challenge Fund Grant、情報技術リテラシーへの挑戦補助基金)パイロット・プログラムに関するこのパワーポイント・プレゼンテーションは、このような疑問に答える。このプレゼンテーションは、教師、生徒、保護者、その他関係者による技術統合の過程に焦点をあてる。生徒の学習例、「ベスト・プラクティス」における改良点や成功の鍵は、集収された学力検査のデータに示されている。このような情報は、全て、技術統合の成功例を参考にする際の手助けとして、共有されるだろう。

22-403-E (14:40 - 15:20) English

E012 ***ネパールの教育の多様性***

by Bhagawan Kumar Karki(Nepal)

教育とは知識と発展の源です。教育を受けることは全ての人間の基本的な権利です。国は国民に、より良い教育を与え、この権利を果たさなければなりません。国が国民に教育を受けさせることができない限り、発展することは不可能なのです。アジアの内陸国のひとつであるネパールは、教育においては何の優越性ももっていません。SAARCの国と比較してさえ教育の分野では発展途上にあるのです。多くの理由の中でも、国民の社会的経済的条件に沿った政府の政策がネパールの教育の多様化をもたらしたのです。この、「ネパールにおける教育の多様性」というテーマで、ネパール国民の、富裕者から貧困者まで、町から村まで、上流階級から下層階級までの現存する様々な教育活動に焦点を当てたいと思います。まず最初の所見は、二種類の学校によってもたらされる厳しい状況を記述することになるでしょう。その学校とは、私立学校と、公立学校のことです。裕福な人々は、自分の子供を、より良い教育を受けることができ、多くの物質的な設備のある私立学校へ入れます。彼らは卒業後、より良い機会を得ることができますが、一方で貧困者は、質の悪い教育しか受けられず、非常に限られた設備しか整っていない公立学校に行かなければなりません。さらに、技術情報クラスの生徒にとっては有益であるこの場所で適応される生活条件や方法はネパールの学校や大学で教えられているものなのであると、付け加えさせてください。この文書を通して、ネパールという国は、情報技術を使って利益を得る段階にはまだまだ及んでいないということをわかっていただけるでしょう。

22-403-F (15:30 - 16:10)

English

E092 ***生徒が郷土に伝わるものの価値を理解・享受するのにITCを使おう***

by プラトン　コーネリア(Romania)

昔から伝えられてきたものに我々の眼を向けるプロジェクトを紹介しましょう。周りに目を向けると服装が常に変化し続けてきたものであることがわかるでしょう。しかし、人間はいつからどういう風に自分が見えるかを考えるようになったのでしょう。今日私たちが着ている変化に富んだ服装の祖先はどこに見当たるでしょうか。世界の偉大なデザイナーたちはこれまでに無数に作ってきた衣服のインスピレーションはどこから湧いてきたのでしょうか。あなたが多分想像するとおりです。今日私たちが身に着ける衣服の起源は、古くから伝わる民族衣装の計り知れない値打ちと美に見出されます。それには俗悪なところはなく、人間の魂の純粋さや感受性を表しており、自然の写しがさまざまな色とその持つ象徴性が互いに干渉しあうことで表現されています。私たちは皆信仰と伝統のある古い文化に連なっていると考えています。この普遍的な文化の遺物が具現化されたものは昔の民族衣装以外にどこに探し求めることができるでしょうしばらくの間、昔に戻り、私たちの祖先が何を着ていたのか見てみましょう。出来る限り多くの国の民俗衣装を集めたバーチャル博物館を一緒に作るために、上の線はアイアーン参加国の生徒と教師に届けられた招待状を示しています。この講演の目的は、教室でITCを用いることで、カリキュラムからは無視されてきた、民俗の伝統や価値に対する生徒の意識を高めるのに、有用であることを証明することです。30カ国の生徒と教師が時刻に伝わる民俗衣装や伝統のヴァーチャル展示館を作りあげるのに参加しました。このプロジェクトは世界中の生徒や教師にとって豊かな情報源であり、自らの伝統や民芸、民俗伝承の美と価値を理解し、享受するのに役立ちました。またこのプロジェクトは、写真を取り込む、画像を処理する、あるいはある目的を持って情報を検索する、といった授業でITCを活用する能力を生徒が十分持つことを証明しています。

22-403-G (16:20 - 17:00)

English

E018 ***アート・プロジェクトを通じた友情***

by Majid Sadeghi(Iran)

このプロジェクトは世界中の学生や教師間の理解と友情を生み出すための媒介として芸術を利用しようとするものです。絵画、デッサン、音楽、写真などどんな表現方法でも構いません。学生達は芸術作品を発展させ、分け合うために身の周りにあるものをテーマとして取り上げています。テーマの例としては、暮らしの中のある一日、私の国・あるいは街、世界平和などがあります。基本的に、自分たちのことを表現でき、異なる文化や国で生活する人々との友情を育むために国境を越えていけるものなら何でもかまいません。テーマはまた、共同プロジェクトを発展させることができる学校で選ばれ、特別なテーマも、プロジェクトの協力者によって、基本的には同一のものとされます。学生たちの芸術作品はこのプロジェクトのウェブサイトでご覧いただける予定です。

July 22 - Room 404

22-404-A (11:20 - 12:00)

Japaese

J047 ***情報教育における表現活動と国際交流***

by Akira Ikeda(Japan)

勤務校、大阪市立扇町総合高等学校における実践の報告。地元商店街での販売実習やハワイとの掲示板交流などの様子。授業において、行ったさまざまな実践とその評価について。いろいろな科目において、学校外への情報発信と交流活動を通じて、生徒が身につけたものと、変容について考察したい。フロアとも意見の交換がしたいと考えている。国際交流活動としては、ワールドユースミーティングへの参加、学校間国際交流サイトの運営に参加などの実績あり。

22-404-B (12:10 - 12:50)

English

E002 ***数学をコンピューターで学習するサークル***

by Maryam Behnoodi(Iran)

教育における最も大きな問題の一つは、どうやって数学を教えるかということであり、なぜ生徒達は数学がよく分からないのかという問題であります。私たちは、生徒達がコンピューターを使って自分たちで教え合う仕組みを作っているところです。生徒自身がホームページ上で教えるのです。必要なソフトウェアを使い、互いに協力して教えることをするのです。様々なサイトで教材を探し、手持ちの教材と比較し、教えるのに一番いい方法を選択します。「創造」することがこのサイトの大きな目標です。生徒が自分の作成した作品を見るときの喜びはとても大きなものがあります。このプロジェクトには4つの学校の多くの生徒が参加しています。彼らは数学教授法に革命を起こしたいと思っています。

22-404-C (13:00 - 13:40)

English

E078 ***地理教育へのコンピュータの利用***

by jaleh lotfollahi(iran)

教育界において大きな変化と革新が進歩したインターネットを通じておきつつあります。この変化にそった目的のために、教師自らも教育知識の改善が求められています。イランの地理教師という立場で、生徒の洞察力を強めるために、教育ホームページでインターネットの強みを生かし、利用を試みています。Ms.Haydariと私は、地理的位置を教えるための親切なソフトウェアを企画・準備しています。このプログラムではJAVAを使って、ある課題の地理的位置を描くことができます。このソフトウェアは、まず同じ性格の点を発見し、さらにこれらの点を集めることによって、地理的位置についての洞察力を高めることができます。私が教室でソフトを用いた授業の結果は満足のいくものでした。このプログラムは、http://mathclub.schoolnet.irのホームページで紹介しています。わが国のすべての生徒たちはこのようなソフトを利用することができ、またこれはインターネットの特権のひとつであります。

22-404-D (13:50 - 14:30) English

E014 ***科学・社会分野における共同プロジェクト***

by タライバー一家(USA)

タイトル: 科学・社会分野における共同プロジェクト名前:タライバー一家(Talaiver Family) バージニア科学博物館では、地域の人々、企業、学校および大学と共同で、科学的、技術的な分野における知識の向上に努めている。今回の発表の中で我々は、同博物館によって開発されたプロジェクトのうちの少なくとも3つについて説明を行なう。 1. BOBI: (Bring them out to bring them in)参加させるにはまず連れ出すこと。このプロジェクトでは、パキスタン、インド、ロシアの子どもたちが、動物や鳥に関し、文化的な観点から意見を交わしている。 2. 平穏への模索:麻薬、殺人ならびに暴力に囲まれて生活しているリッチモンド州の子どもたちが、身の回りに平和をもたらすため暴力に立ち向かうための施策について討論を行なった。この討論では、ブラジルから関心のある子どもたちが招待され、生徒と交流を行った。米国およびブラジルの子どもたちは、自分たちの身辺における共通点および相違点について、引き続き討論を行なっている。本プロジェクトは、いまだ継続中である。現在、子どもたちは、国際平和に関する問題へのフィードバックを始めている。 3. 種の力: BOBIの場合と同様、我々は子どもたちに、身の回りの植物や木々の重要性について考えられるよう、関心をもってもらいたいと望んでいる。本プロジェクトの中で子どもたちは、種の成長、およびその成長が地域社会にもたらす科学的、経済的影響について意見を交わすことになっている。タライバー一家の子どもたちは、遠隔通信プロジェクト、インドにおける対照美について発表することになっている。子どもたちがどのようにして自分たちでプロジェクトを作り出すのか。どのようにして他の子どもたちを招待して意見を交換するのか。また現在では、同じようなプロジェクトを作る上でどのような手法が有効なのか。これらの疑問に対して、ジョセフとデイビッドは参加者へフィードバックも行なうことになっている。www.kidlink.org さらに、我々はジェイソンプロジェクトの効果についても紹介するつもりである。ジェイソンとは「真の科学」プロジェクトである。バージニア科学博物館ではバージニア・ビジネス教育共同組合からの資金の提供を受け、4年生から12年生までの先生にトレーニングを行ない、教室での算数、科学および社会の勉強にジェイソンを取り入れることにしている。生徒は年度を通じて、科学者と交流することができる。1月下旬および2月上旬に、ジェイソンはビデオリサーチサイトを放送している。この放送後、バージニア州では、6つのサイトの子どもたちをつなぐ独自のビデオ会議を実行した。これらのサイトには、科学者もしくは専門家も招待されていた。ビデオ会議の間、子どもたちはバージニア州の科学者と交流することで、より多くのことを学習することができた。www.jason.org 発表を聞く側からは、遠隔共同プロジェクトを開発および実行するための秘訣や効果的な世界規模プロジェクトの規準が示されたり、世界中の人々が科学・技術の分野における知識を深めることができるよう、教育者および家族に向けた提案が行なわれるだろう。

22-404-E (14:40 - 15:20) English

J017 ***イントラネットを活用した発達支援システムの実践***

by 西谷 淳(Japan)

発達障害があり特別支援を必要とする甲西町の全ての子どもに対して，町は，平成14年度より療育機関，保育園，小中学校，養護学校，自治体の関係教員，職員を網羅した発達支援システムを構築した．このシステムの一つであるイントラネットは，機関間の壁を越えて，個別の子どもへの支援を長期的に一貫させる働きを果たそうとしている．また，町は，米国のIEPを参考にして「個別指導計画の要綱」を制定しており，イントラネットには個別指導計画の推進に重要な役割を持たせている．全国的にも例がない「発達支援システム」への保護者の期待は非常に大きい．

22-404-F (15:30 - 16:10) English

E090 ***世界の建築***

by コルストー(USA)

世界の建築プロジェクトの成果を報告するとともに、このプロジェクトをカリキュラムに加える方法を話し、このプロジェクトに参加する教師を募ります。

22-404-G (16:20 - 17:00) English

J015 ***教師の判断の一貫性を守るためのモデレーションプログラムの発展と評価***

by ササキ ヒロノリ(Japan)

一定の基準に基ずいた評価における教師の判断の一貫性を守るために、私はモデレーションシステムを用いました。それは、教師が生徒の研究を持ち寄って会議に集まり、与えられたスコアも含めて、評価について討論するというものです。この場合、研究の基準について全員が合意し、その基準のスコアを評価します。ここに、教育委員会ならびに各学校に対してその手順をご説明しました。また、これについて、岡山教育センターでも議論しました。その結果、もし教師が評価や教材をきちんと活用することができれば、生徒の研究を評価する際の一貫性を達成することができるのです。

July 22 - Room 405

22-405-A (11:20 - 12:00) English

J026 ***ロシアより愛をこめて 絵による国際交流***

by 岡崎あかね, 岡本和子, 長田寿和子(Japan)

高槻市立第1中学校の旧1年の生徒たちが、総合的な学習の時間で、人権について考えたり体験したりしたことをまとめ、「未来の夢、平和について」のテーマで 、ポスターを制作しました。そして、iEARN,2002の開催国ロシアの平和を願う隣人との交流が始まりました。「ロシアから愛をこめて日本へ」と題されているように、子どもたち の作品が平和大使として各国を旅しながら、出発国の2002アイアーン開催国ロシアから、2003年開催国、日本へと巡 ってきます。ロシアの先生がたをはじめ、第10回日本開催を祝福して、その思いを形にされた記念すべきプロジェクトです。ロシア、ペテルスブルグから、開催国、極東日本、三田市へと、子どもたちの作品は今、旅の途中です

22-405-B (12:10 - 12:50) Japaese

J044 ***一般教科における情報教育カリキュラムの導入***

by 佐々木 恭隆(Japan)

一般教科に情報教育のカリキュラムを導入することにより、より効率的にITのスキルを身につけると共にその教科においてもより学習意欲を向上させる効果を事例を交えてご紹介いたします。

22-405-C (13:00 - 13:40) Japaese

J048 ***スピーチの授業をとおして***

by 仲澤信明(Japan)

成田国際高校で日頃実践している「スピーチ」の授業をご紹介したいと思います。ALTの先生方とのTTの授業です。1年間に8～9のアクティビティーをします。Show & tell, TV Show, Radio program, Something Japanese, Trouble Shooter(impromputu),Story telling(make a story before and after the picture),Instructional Speech, My Opinion(social Issue),World Expo(computer assisted:Power Point)などです。生徒の生き生きした活動が伝わればいいのですが・・・。去年、今年と文科省のSELHi指定を受け、英語で遺伝子の授業をうけ理科の実験をしソネットの詩の形式を学び(自作の詩を作り)、保健の時間に欲求を葛藤を英語で考え、さまざまな実験的な授業を試行してきました。その一端も紹介できればと思っています。。

22-405-D (13:50 - 14:30) English

J011 ***ネットワークを用いた高校生による英語絵本の質的分析と統合***

by いわみ　りか(Japan)

このプレゼンテーションでは、英語を第二外国語として学ぶ生徒がどのようにして英語学習の意欲を高め、異文化間理解を促進してきたかを評価する。本研究の参与者は、総合学科の選択科目として英語絵本クラスを履修した7名の女子高校生である。生徒たちは自分たちの手で日本の文化を紹介する絵本を創作し、これをホームページで公開した。作品のオーディエンスとのウェブ上の交流(Eメール、BBS)は、生徒たちに、絵本の題材を広げ、協力してページの内容を改善する意欲をもたらした。このプロジェクトを通じて、生徒たちは徐々に英語を学習することに意義を見出し、より主体的な学習に学習に取り組むとともに、自国および外国文化についての意識をも高めていった。

22-405-D (13:50 - 14:30) Japaese

J013 ***ハイスクールハザードマップ High School Hazard Map Projectm7生の安全意識国際比較調査と安全対策ー新世紀型犯罪に巻き込まれないために***

by 米田 謙三(Japan)

日米の中学・高校の教室をインターネットで結び、参加生徒間の議論を通じて、身近な安全に対して、日米の間で違いを学ぶ。また相互に相手国を訪問し、フェイス・ツー・フェイスの交流を行う。現在　国や個人の安全が世界中で脅かされ、安全に対する聖域がなくなりつつある現状とこれに対する国家間や個人の間での姿勢の違いが誤解を生み、信頼を前提とした交流を行うことを困難にしている。本企画は以上の視点をもとに、ITという新しいツールを使いながら、新しい時代の交流のあり方を交流実践を通じて探る。

22-405-E (14:40 - 15:20) Japaese

J033 ***ジャンベとICTがつなぐ三島っ子と世界***

by 辻 慎一郎(Japan)

人口わずか126人の絶海の孤島鹿児島県三島村硫黄島。この島にある三島小中学校は、約10年前にアフリカの太鼓「ジャンベ」と出会いました。毎年訪れるジャンベフォラ「ママディ・ケイタ」さんとの交流はやがて、ジャンベのふるさとアフリカギニアへの中学生4人の旅、ドイツでの16名でのジャンベコンサートと世界へとつながっていきました。昨年度からはICT(TV会議)を使ってさらに海外との交流が進み、ジャンベのふるさとギニアで始まった砂漠化防止への取り組みへの協力へと広がりを見せています。その交流をささえる授業や活動を紹介します

22-405-F (15:30 - 16:10) Japaese

J003 ***3Dサイバースペースを用いた新たな学習環境***

by 濱辺 徹(Japan)

ITの普及とともにe-ラーニングが急速に世の中に浸透しており、既存の教育に大きな影響を及ぼしている。NRIはエデュテインメントとリアルタイムコミュニケーションを主体とした3次元空間双方向学習環境システム3D-IESを開発し、今までにない新しい教育形態を提案している。また、この教授法を確立するために、地理的に離れた国立5大学を結んでの双方向遠隔教育共同実験を実施し、一定の成果を上げるのみならず、外国語教育の分野で新たな潮流を生みだしている。本稿では、3D-IES開発の背景とメカニズムを紹介し新たな教育手法がどのように確立されようとしているかについて報告する。

22-405-G (16:20 - 17:00) Japaese

J028 ***「Friendship doll(青い目の人形)」を活用した共同学習***

by 深井美和(Japan)

日米の友好親善のシンボルとして送られた「Friendship doll(青い目の人形)」を伝え合うきっかけを生み出す素材として取り上げ、コミュニケーション能力の育成を図った共同学習の研究である。画像付電子掲示板を利用して、国際交流を試みており、グローバルな視点をもった交流をすすめていきたいと考えている。

July 22 - Main Hall

22-MH-A (11:20 - 12:00)

English

J071 *自分の脳を自分で育てる- 音読と計算が子どもを発達させる*

by 川島隆太(Japan)

何が子どもたちの脳の発達に有効か、最新の脳科学研究からお伝えします。「脳科学と教育」の関係を明らかにする、今、世界でもっともホットなテーマです。

22-MH-B (12:10 - 12:50)

English

E007 *So far away… … Yet So Close 彼方遠くが・・・こんなに近く*

by Barbara Mink, Hayashi Kaori(United States/Japan)

E07　ここに、国際交流をはかるクラスとの共同学習を進めていく上で、とても有効で役立つ方法を紹介します。それによって教師は互いの絆を深め、また、2つのクラスはひとつになったのです！子供たちは、遥かな距離を隔てた場所で暮らし、話す言葉もそれぞれ異なります。しかしどういうわけか、まるで完璧なパズルのように、しだいにピースが組み合わされてゆくのです。担任の教師達は、子供たちの作文や美術作品、様々な社会学習や理科学の活動に、共に協力しあいながら取り組んでいきます。注)筆記用具をご持参ください。

22-MH-E (14:40 - 15:20)

English

W007 *アイアーンの世界を紹介*

by iEARN USA

アイアーンでは、ICTを活用したプロジェクト学習行っており、その数は年間100以上におよぶ。アイアーンビギナーズワークショップでは、アイアーンについて、まだあまり知らない方を対象に、その歴史や理念を分かりやすく紹介すると共に、アイアーンフォーラムのはいりかたから、現在進行中のプロジェクト紹介、プロジェクトの参加方法にいたるまで、アイアーンプロジェクトを始めるために役立つ知識を紹介する。このワークショップでは、アイアーンの全体像がつかめ、すぐにでもプロジェクトに参加できるようになることを目指す。アイアーンインターナショナルチーム担当

22-MH-F (15:30 - 16:10)

English

J006 *国際交流で日本の文化を伝える*

by 塩飽 隆子(Japan)

私は10～18才を対象に英語塾を主宰しています。過去3年間、イギリス・アメリカ・スペイン・トルコと、TV会議・email交換・テディベアー交流を通して、日本の文化を紹介してきました。国際教育の基盤を「まず日本のことを知る」ことに置き、自分たちの生活の中にある日本の伝統行事をあらためて洗い出し、自分たちの町の伝統工芸・産業を調べ、海外に発信してきました。日本のことを英語で海外に伝えることで、自分の国に対する自覚と誇りを持ってもらいたい。海外のことを自分たち同世代の子達から聞くことで視野を広く外に向けて欲しい。そして英語を勉強する本当の意味を分かって勉強に取り組んで欲しいと願って、海外との交流を積極的に取り入れて来ました。その実践発表の場をいただければ幸いです。

22-MH-G (16:20 - 17:00)

English

E011 *イギリス教育技術省・テレビ会議学習推進プロジェクト「教室にテレビ会議を」*

by Mike Griffith(United Kingdom)

Global Leapはイギリス教育・技術省のテレビ会議学習推進プロジェクトの母体となる組織です。「テレビ会議を授業に取り入れよう」というこのプロジェクトは、生徒達が自分たちの学校という枠を越えて、いろいろな場所の様々な人たちと、お互いに顔を見ながら交流をし、学習することを可能にしました。現在、イギリスの学校では、子どもたちが広い外の世界を理解するのに有効であるテレビ会議を、次々と授業に取り入れるようになりました。私Mike GriffithはGlobal Leap の主催者であり、このプロジェクトの責任者です。 テレビ会議学習では、田舎の子どもたちも、彼らとは対照的な環境に住む子どもたちと、リアルタイムで意見交換をすることができます。そして、自分たちの経験や考えを相手に伝え、お互いに共有することで、相手との違いや類似点に気づき、様々なことを学びます。テレビ会議は双方向交流ですから、どんなに離れたところの子どもたちとも直接相手の顔を見ながら発表したり、意見交換をすることができます。相手に質問を投げかけて、その場で回答を得ることもできます。この双方向交流は、イギリス国内に限らず、世界のどこの国とも同じことが可能です。　我々のプロジェクトの実践例をいくつか挙げましょう。 ●UK国内の美術館や博物館とのリンクによる学習：テレビ会議に必要な機材は Global Leapから施設に貸し出し、そこの教育担当スタッフにライブで授業に　参加してもらいます。子どもたちは彼らから専門的な知識を学ぶことができ　ます。●ヨーロッパの国々の学校とリンクした外国語学習：外国語の授業で、ヨーロッ　パの他の国とテレビ会議でリンクし、その国の言葉を直接その国の子どもたち　から学んでいます。生徒の学習意欲が高まり、成果が上がっています。 ●いろいろな国の教室とリンクした異文化の学習：自分たちの教室に居ながら、　様々な国の多様な文化に触れることで、その国の文化を知ることができます。 ●院内学級と一般の学校とのリンク：病院の院内学級のような普通の学校のカリ　キュラムとは違う学級の生徒も、テレビ会議授業に参加することで、子どもた　ち同士の共同学習が可能になります。

July 22 - Poster Session

22-POSTER-1 **E006** ***アバーディア青年環境プロジェクト***

by チャールズ・ブルースター(United Kingdom)

English

英国ウェールズにあるグラモーガン大学、アバーディアキャンパスの学生グループの作品を紹介するポスター展示。学生たちは、町の周辺にある汚染された広大な工場跡地の過去と現在の状況を調査し、雇用を創出できるような代替的な利用法を提案すると同時に、その地域の若者が利用できる施設の拡充を図っています。このプロジェクトによって、学生たちは講座履修のための作品集を完成させることができました。また、実社会のプロジェクトにも携わり、地元で実行に移すことができるような案、あるいは、工業跡地を再び活用する方法を探っている人々にヒントを与えるようなアイディアを考案しました。

22-POSTER-2 **E029** ***私たちの高校でのI-EARNの活動***

by Minoo Shamsnia(Iran)

English

I-EARNの暖かい家族と過ごした一年間に私の生徒たちはそのいくつかのプロジェクトに積極的に参加しました。彼らの活動について、現在の彼らの仕事、そしてI-EARNが生徒たちに与えた影響について紹介したいと思います。

22-POSTER-3 **E043** ***英会話クラブにおける協力関係について***

by Valentina Chernova(Russian Federation)

English

ロシアのNovosibirsk地方、Moshkovoにある、Moshokovo教育センターの英会話クラブは、10年の歴史を持っています。私達は、ポスターをつくり、私達自身と、世界の幾つかの国々の学校とのパートナー関係、私達の伝統、休暇、その他のイベントについて、アイアーンの生徒や先生達にお話したいと思います。 私達は自分達の日記を出版し、ポスター会合のなかでそれについて少し発表したいと思います。2002年に、このクラブは、アイアーン組織のサイトに学校として登録に着手しました。私達の生徒は、みな「テディベア.プロジェクト」にとても活動的で、その他のプロジェクトにも参加しています。写真や、手紙、絵画やその他のものを展示して、我々の「テディベア.プロジェクト」についてお話したいと思います。

22-POSTER-4 **J004** ***World Computer Exchangeの試み***

by 一色 裕里(Japan)

Japaese

米国のNPOであるWorld Computer Exchange(WCE)は、企業などから不要となったコンピュータの寄付を募り、デジタルディバイド解消の見地から、必要としている発展途上国に送る事業を実施しています。学校をインターネットにつなぐだけでなく、先進国と途上国の学校の生徒達の間でe-mailの交換やウェブサイトの構築(cross-cultural program)を通して国際交流活動も進めています。URL:http://www.worldcomputerexchange.org/ 本プレゼンテーションではWCEの活動内容について報告します。

22-POSTER-5 **J016** ***生徒は実際の生活の中で技術科学習の有用性をどのように感じているのか***

by きと あきひと(Japan)

English

この研究は、中学校の技術・家庭科で学習する技術教育の、実際の生活における有用性を、生徒たちがどのように意識しているかについて調べ、検討したものである。調査の結果、作品製作活動学習を通じ、創造的作業は実際の生活のなかでも役に立つと実感し、強い意欲をもつようになることがわかった。よって、教師が生徒にそのような意識を刺激するような指導を与えることにより、技術教育の中で、生徒の自発的な学習態度を促すことが期待できる。

22-POSTER-6 **J056** ***日本の塾教育について***

by Keiji EMI(Japan)

English

日本の学校教育は、文部科学省の定める学習指導要領に応じて行われます。教師は指導要領に従って、限定された内容を決まった時間内で教えなくてはならないので、授業は単調になりがちです。放課後、生徒は塾に行きます。塾では、学校の勉強の遅れを取り戻すために補修を受けたり、学校で習った以上の内容を教えてもらいます。つまり塾は個人指導の役割を担っており、学習指導要領から独立した理想的な教育法と言えます。当分科会では、私が塾で行ったいくつかの科学実験についてお話ししたいと思います。例えば、果物電池や紙製のオーブン、コンピューターを使った天文学などです。

22-POSTER-7 **J036** ***デジタルポートフォリオ検索システムを用いた教育実践***

by 北澤 武(日本)

Japaese

卒業生が作ったデジタルポートフォリオをデータベース化し、在校生が卒業生のポートフォリオを検索、閲覧しながら学習を進めていく教育実践を紹介する。先輩の作品を見ることで、児童の学習目標が明確になり、動機も向上した。また、デジタルポートフォリオの検索システムは独自で開発したものであり、入力したキーワードと類似した用語がマップとして表れるため、学習すべき用語の関連性が児童にとって分かりやすいシステムとなっている。

22-POSTER-8 **J053** ***学級日誌をとりまく交流***

by 大笹いづみ(Japan)

Japaese

自然な形で子供たちからはじまる交流が、学級日誌をとりまきながら様々な形に発展していく様子を楽しくお話します。

22-POSTER-9 **J077** ***エコマネー***

by エコマネー

July 22 - Reception Hall B

22-RHB-F (15:30 - 16:10)

English

E076 *クロス・カリキュラムでの働き 1945年プロジェクトの年*

by Jo Tate, Luchen Cheng, Doris TsueylingWu(Taiwan)

プレゼンテーター:Jo Tate, Luchen Cheng and Doris Tsueyling Wu 内容:このプロジェクトは、学生に自分の国で1945年の生命の様相を調査してくれるように依頼します。学生は新聞記者の役割をし、かつあたかも彼らがその時にそこにいるかのように、一人称で書く予定です。トピックのアイデアにどんな自然災害や科学的な突破口も含めることもできます。このプレゼンテーション・セッションでは、いくつかのキーポイントが強調されます。1. 国際プロジェクトの共有:異なる国々からの生徒の働きが示され共有されるでしょう。2. 歴史と英語のクロス・カリキュラムの台湾のモデルが示されます。その進行および効果は議論されます。このモデルの最終目的は、学生が世界について、よりよい客観的見解を持つよう招くことです。3. 日本とオーストラリア間でのビデオ会議はこのプロジェクトが教師と学生へいかに衝撃を与えたか実証することができます。

22-RHB-F (15:30 - 16:10)

English

E049 *フォルモッサ台湾共同プロジェクトのスナップ写真*

by ドリス ツェイリン ウー(Taiwan)

時間:80分間のプレゼンテーションリチャード チェン、ルチェン チェン、フェイ ウー、ドリス ウー。これはi＊EARN台湾からの共同プロジェクトー共同セッションです。1945年、台湾の歴史、特別の場所のプロジェクトが含まれます。プロジェクトは違っても、台湾の文化遺産と歴史は必ずプロジェクトの主眼となります。全セッションは年代順になるよう注意深く組み立てられています。まず最初にプレゼンターが新聞記事、音楽、写真を使って、台湾が1945年の頃の様子を聴衆の皆さんに経験していただきます。その後、皆さんに台湾の南部の文化遺産を見ていただきます。その間、生徒のプレゼンターは小学生に自分たちに身近な地域の歴史を教えるため、一丸となってどのように文化キャンプを構築していったかを説明します。セッションの最後は特別の場所のプレゼンテーションです。南部台湾のとても特別な場所を紹介します。私たちのプレゼンテーションは、いかにして生徒と教師が効果的に共同作業を進めることができるかを示し、自国の文化と歴史をさらに深く理解することによって自らも大きく得るものがあるということを示すものです。さらに、プレゼンターは外国の先生にモデルガイドをしたいと考えています。皆さんのご意見をお待ちしています。

22-RHB-F (15:30 - 16:10)

English

E036 *iEARN Projects Working with Community: Collaborative Learning through Internet Platform -- AJET*

by Faye Wu(Taiwan)

40 mins Presenters: Doris Wu, Faye Wu, Richard Chen, Jane Kang How can high school students get involved in the community service? What organization can be our target for outreach? Our report shows that the community service programs based on the iEARN projects provide high school students in Taiwan a lot of opportunities to contact new challenging experiences. Positive feedbacks include improving their volunteerism, developing their leadership potential, fostering their friendship as well as taking the initiative in affecting their own community. Some successful models will be introduced,including working with Creation Social Welfare Foundation, World Vision Taiwan, local community center, primary school and church. The session features that most of the coordination, preparations and discussions are conducted through AJET with on-line meeting and on-line bulletin board. An demonstration of using ajet platform is expected.

July 22,23,24 - Room 401

22,23,24-401-A (11:20 - 12:00)

Japanese

W008 *JEARN紹介ワークショップ*

by 上野浩司(Japan)

JEARNにボランティア登録すると、ホームページスペースや掲示板機能、ML作成など、交流に必要なインターネット三種の神器と呼ばれる機能を使うことができます。コーディネータ登録すると、これにプラスしてイベント管理のさまざまな機能を使うこともできます。登録方法から、様々な機能の使い方までを説明し、また、JEARNが提供する翻訳掲示板などの、便利な機能の活用方法を実際に体験してもらうことで、明日から、JEARNのシステムを活用した交流ができるようになることを目指します。

July 23 - Room 302

23-302-A
(11:20 - 12:00)

English

E033 ***高校のカリキュラムの中でのICT統合***

by Hedieh Najafi(Iran)

最近、ICT統合は教育の議論の核心にあります。このプレゼンテーションでは、高校のカリキュラムの中でのICT統合の経験を見なおすことに焦点を当てます。イランのKherad高校では、学生は主題をマスターするために異なるプロジェクトをしています。他方では、教師はインターネットや他の情報ツール、ソフトウエアを使って教育プランの質を向上しようとしています。このプレゼンテーションでは、教育プログラムへのICT統合のための専門の発展プログラムを含め、この学校で行った全ての取り組みの要旨を発表します。

23-302-B
(12:10 - 12:50)

English

E077 ***教育システムによる素晴らしい新しい経験***

by アバス　エナヤトボア(Iran)

恵まれない環境にいる生徒が人生において自らの目標を達成したり、就学時にいろいろな面において良い成績をとり、我々の教育システムにうまく調和できるようにするため、本当に多くの人々が良い方法を考えてきました。私たちの卒業生はいろいろなオリンピック、科学コンテストなどにおいて金賞、銀賞、銅賞といった賞をすでに獲得しています。私たちが経験してわかったことは、貧しい家庭に生まれても潜在能力を認知することによって目を見張るような素晴らしい成績を収めることができるということです。ただし、それには健全な最新のカリキュラムを我々が持っているということ、必要な手段を与えることができ、学校に高度な教育設備をを備えることができるということ、また、文化的、感情的な余裕があるということが条件になってきます。ここでは、我々の学校と活動を評価します。

23-302-C
(13:00 - 13:40)

English

E099 ***仮想空間での模擬実験を用いた授業と学習***

by Ssenkubuge Lawrence(uganda)

23-302-D
(13:50 - 14:30)

English

E017 ***高校ハザード・マップ・プロジェクト***

by Michael Beckwith, ツジ　ユウイチ(Iran)

日本は安全な国だという、いわゆる「安全神話」は、7年前の東京でのオームの地下鉄サリン事件以来崩れてきました。さらに去年、大阪の小学校に男が侵入して8人もの子どもを殺傷した事件では、学校はもはや安全なところではなくなったことを思い知らされ、人々はショックを受けました。今回発表するハザード・マップ・プロジェクトは、アメリカと日本の生徒の取り組みです。2国の生徒の安全意識と、実際に彼らが日常生活で直面する現実とのギャップを明らかにしようとする試みです。このプロジェクトは、オンラインでの交流と物の交流からなります。

23-302-E
(14:40 - 15:20)

English

E032 ***学生たちの異文化との協力的な仕事***

by ruty hotzen(Israel)

eメールとURLを使って、異なる文化のクラスと勉強し、教えあっている様子を紹介します。もしできるならば、直接会って会議をしたいのですが。この勉強方法は生徒や先生にとって大きな革新をもたらしてくれました。

23-302-F
(15:30 - 16:10)

English

E105 ***アフリカの若者の発達への情報技術の役割***

by Yahaya Korsah(Ghana)

この発表のねらいは、コンピュータが第三世界のアフリカの若者たちにとって重要な役割を果たしていることである。アフリカの学生らの窮状に焦点をあて、またアフリカで実施されている技術教育の方法を紹介する。

23-302-G
(16:20 - 17:00)

English

E031 ***アイアーン　マケドニア　で　若者世代が協働できる***

by Mr. Jove Jankulovski, Ms. Mimoza Anastovska-Jankulovska, Ms. Rada Mazaganska (Macedonia)

アイアーン・マケドニアではこの国と地域におけるいくつかの重要な企画やプロジェクトを行ってきた。もっとも重要な企画として、「若者はテロに反対の声を上げる」(www.imor.org.mk/programmes/noterror) というプロジェクトである。このプロジェクトではアルバニア、コソボ、マケドニアの若者が、疎外された辺縁の集団に手を差し伸べて、会話を成り立たせ、平和と忍耐のメッセージを届けることにより、この地域におけるテロ活動に反対の声をあげるというものである。このプロジェクトに参加する若者は、他の活動に加えて、複数のオンライン協働作業を行い、さまざまな対立を解決して平和に交流を行う訓練を受け、オンライン協働プロジェクトに臨んだ。継続的な交流から若者のネットワークが作り上げられた。重要な成果の一つが若者のテロ反対声明である。他にも前向きの興味深い成果があり紹介したい。私の結論は、若者を繋ぐには環境と道具、つまりICTとオンライン協働プロジェクト作業・プロジェクトに基づいた学習さえ用意すれば十分である。これが我々の現状である。

July 23 - Room 304

23-304-A (11:20 - 12:00)

English

E108 ***学習プロジェクトを通じて異文化を結びつける***

by Elizabeth Burgos, Nila Pershad(Suriname)

このプレゼンテーションの内容は、iEARNスリナムが、教育及び他の学習プロジェクトを通じて様々な文化を結びつけた体験についてです。iEARNスリナムは、この会議に参加されている先生方が、民族や文化が異なる生徒達が如何にしてお互いから学び合ったかをこのプレゼンテーションによって体験して頂きたいと思います。現代でも、誰でもが、お互いの文化や信仰を尊重しつつお互いに学び合うことは可能です。スリナムの教育及び学習プロジェクトは、生徒達がお互いの民族的背景や文化から学ぶのに、最も効果的だと実証されました。生徒達はスリナムの様々な文化に関わるプロジェクトに共同で参加して、お互いに相手の言うことを聴き，相手の信仰に敬意を払うことの大切さを理解し始めました。生徒達は，自分達が住んでいる国の文化について、もっと理解することが可能です。これらのプロジェクトを通して，生徒達は自分達の文化だけではなく、他の文化についても、たくさん学ぶことができます。

23-304-B (12:10 - 12:50)

English

E100 ***My Hero(私のヒーロー)プロジェクト***

by Jeanne Meyers(USA)

My Hero は、営利的な教育インターネット事業が最高の人を賞賛するようなものではありません。私たちの使命は、ヒーロー(英雄)物語について世界中からの情報を集めたインターネット文庫で、全年代の人たちに光をあて励ますことです。My Heroは最新のインターネット技術を用い、リテラシーや異文化交流を促進させるユニークで教育的な経験の機会を提供します。現代は今まで以上に、子供たち、教師、親たちは、行く手の難問に直面して、希望と勇気のメッセージを切望しています。My Heroのホームページでは、子供たちや大人によって書きこまれた数千ものすばらしい人間のストーリーを紹介します。ストーリーを通じて多くのヒーローたちの足跡をたどることによって、私たちは誰でも自分が、大きな困難をも乗り越えることのできる隠れた力や、抱き続けていた夢を持っていることに気づくことができます。My Heroは、あなた自身、家族、学校、団体が、この双方向のウェブ・プロジェクトに参加されるようお勧めします。「あなたにとってのヒーロー」をこのホームページの表彰サイト上で公開表彰することによって、顕著な人が報酬を受け、またグローバル・オンライン社会にとって新しい希望をもたらすことになります。

23-304-C (13:00 - 13:40)

English

E065 ***若者社会の協同***

by JAWHAR ABUBAKAR JABBATEY(Ghana)

目的:社会における政策立案者と、政策のほとんどの対象となる若者たちとの間に強力で持続的な関係があるときに、コミュニティにもたらす恩恵を列挙し解説します。実行段階での受益者とその対立者が、相手方の不利益を認める別な見方をとるときに、両者間でよく同時発生する課題から立証されます。この発表を通して、若者と政策立案者の間でなされる方法が、効果的で魅力的になり、両者に利益をもたらすことが可能であることに注目されるよう期待するものです。対象者: 若者のリーダー、青少年政策立案者、関心のある方所要時間:1.5時間

23-304-D (13:50 - 14:30)

E116 ***青少年を対象としたHIV/AIDS教育***

by abdul mumuin issah(ghana)

23-304-E (14:40 - 15:20)

English

E055 ***iEARN-iRANの過去の活動***

by Reza Mahjourian(Iran)

この発表は、iEARN-iRANによる15の共同プロジェクトの各々を簡単に紹介するものです。これらのプロジェクトの多くは、第9回iEARN国際会議からイランの参加者たちが帰ってきたときに始まりました。ほとんどのプロジェクトはイランの生徒の間だけのものですが、外国にパートナーを見つけることができる人もいます。このプロジェクトのためのパートナーを、他のi-EARNのメンバーに入れることによって、もっと見つけることを望んでいます。

23-304-F (15:30 - 16:10)

English

E054 ***変動する社会における教師教育***

by ホム・ナス・ディータル(Nepal)

タイトル:変動する社会における教師教育氏名:Hom Nath Dhital 教師への教育は、教育制度全般において最も重要なサブシステムの一つである。社会の変化に合わせて、教師への教育も新しく変わるべきである。生まれながらにしての教師というのは存在せず、自国の社会的、文化的、経済的要因に応じ、しかるべき特権機関によって、教師となるべき訓練を受けるのである。国家での教育の地位を向上させるために、一番重視されるのは生徒のカリキュラムの改善であるが、これまで教師への訓練が軽視されてきたために、教育制度がほとんど崩壊するまでに至っている。優れた教育は、優れた教師が生み出す結果である。UNESCO(国連教育科学文化機関)は、1996年3月にｱｼﾞｱ太平洋の展望について発行した「変動する世界における教師の役割の向上」において、次のように述べている:将来にわたり、変化が続こうとも、優れた教育には優れた教師が必要であることに変わりはないだろう。ｱｼﾞｱ太平洋地域の多くの国々は、少なくとも過去30年において、急速な経済的、社会的、文化的、政治的変化を経験してきている。この変化は21世紀に入っても、衰えることはないと思われる。ネパールの教員試験では、ﾄｩﾘﾋﾞｭｰﾊﾞﾝ大学、国立教育発展センター(NCED)が教師への訓練を行なう権限を持っている。基礎的・初歩的教育プロジェクト(BPEP)では、特定の分野について、短期間の訓練課程を行なっている。上級中等学校は、特定の地域の小学校、下級中等学校および中等学校の教師に対し、教師訓練課程を実施している。それにもかかわらず、教師の60%以上が訓練を受けていないというのが現状である。1972年の国家教育計画の実施後、同国では様々な社会・経済・政治制度の変化のために教師への教育は軌道に乗っていない。1957年に設立された最初の機関である教育大学は、最新の教育手法を活用した教師の訓練に着手し、政府に最新のカリキュラムおよび教科書を使った小学校および中学校を全国に設立さ

せた。ネパールにおける最新型の教育の発展からほぼ50年後、小学校学齢児のうち、学校に入学したのはわずか67%である。そのうち、男子は76.5%。女子は53.5%である。概算では、下級中等学校および中等学校学齢児のうち、相当する学年に入っているのはわずか3分の1である。小学校では、1年生に入学した生徒100人のうち、5年生を修了できるのはわずか28名だけである。このことは、小学校における損失が非常に高いことを示している。1992年に教育委員会は、次のように述べている:「上の学年に進むことができない生徒の数はもっと多く、生徒の中には課程を修了するのに、平均して5年を要するところを12年もかかっている者もいる。180日行なわれるべき授業が、実際に行なわれているのは100日にも達していない。5年生の生徒の総合的知識は、3年生に相当するレベルしかない。」今回の発表で私は、21世紀の全世界における教育制度向上のために、ネパールにおける教育の展望について他国の人々と意見を交換したいと考えている。

23-304-G (16:20 - 17:00) English

J075 ***Reseach based presentations in the School of Policy Studies***

by School of Policy studies students B (Japan)

Second year students at the SPS, Kwansei Gakuin Univ produce a reseach based presentation focusing on a comtemporary issue in Japan. Secondary and primary research is used to investigate the problem and current solitions, as well as formulate new policy solutions.Leadership and accountability within the terms is developed through the use of coordinator roles, which are specific jobs for team members. Participants are invited to view the results: well organised, audience friendly,visually interesting, and content rich presentations.

July 23 - Room 305

23-305-B (12:10 - 12:50) English

E115 ***若者における差別をなくすために***

by ハッサン・シェリフ・アブデュライ(ghana)

23-305-C (13:00 - 13:40) English

E095

by Mohamed Siddra Mansaray(Guinea)

23-305-D (13:50 - 14:30) English

E021 ***海外との協働学習で民主主義を学習***

by Daina Valanciene、Rima Tarbuniene(Lithuania)

市民教育は、民族、社会、国、そして世界に対する人の権利と義務を理解し、市民権をはぐくむ教育システムの重要なゴールの一つである。それはまた、人がその国の文化的、社会的、経済的、政治的生活に参加する必要性も育てるものである。この教育過程全体は、若い世代が批判的に考え、主体的に参加する能力を高めるために、民主主義社会での生活原則と民主主義を生み出す際の問題点の両方を理解できるように生徒を導くものでなくてはならない。ワークショップの間、私たちは、アメリカの学校とリトアニアの学校とで交わされた民主主義教育に関するテレコミュニケーション・プロジェクトを発表する予定である。このプロジェクトの参加校は彼らの権利と責任、寛容さのレベル、市民社会における市民参加、法律、その他関連する問題について意見を述る。800人の生徒が行った、テストの前と後の2部からなる調査は、数々の記録・解説と共に発表されるであろう。ビデオにより、生徒達がこの問題は国際レベルで論ずる必要があると考えていることが明らかになるであろう。

23-305-E (14:40 - 15:20) English

E051 ***学校でのコミュニケーションの必要性および問題***

by Masoomeh Enayatpour(iran)

すべての学生と同様にイランの学生も世界的交換に加わるべきです。しかし、もう解決したのですが、いくつか問題があります。私たちの地方の状態や文化により、私たちと同じ条件を持っている先生方と分かち合いたいことをたくさん経験してきました。このプレゼンテーションは、イランの2校の異なる高校の共同企画で準備してきました。Mrs.Bavianが手伝って下さっています。

23-305-F (15:30 - 16:10) English

E038 ***iEARN ウクライナにおける市民教育***

by ニナ　デメンティエヴスカ　ラリサ　シュヴチャク　ヴァレンティナ　サカツカ(Ukraine)

iEARNウクライナネットワークにおいて2002-2003年度に行われた3つの国内外のプロジェクトのプレゼンテーション。3つの隣国(ロシア、ウクライナ、ベラルーシ)のDnipro Day(2002インターネット環境教育)プロジェクト。機能障害を持つ人のためにホームページを作る希望の光社会通信伝達プロジェクト。誰がためにベルはなる、我々の小屋はばらばらになったらーウクライナの生徒と教師が対テロ問題について話し合い、アメリカの学校と共同作業をする。

23-305-G (16:20 - 17:00) English

E016 ***I-EARN エジプト***

by Dalia Khalil(Egypt)

最近のイベントでは、地域のI-EARNの団体や協力者は、多くの難関と同時にチャンス(財政的、企画の推進、提携)に直面しています。発表者は、エジプトI-EARNとその提携者がどのように異なる状況を克服してきたのか、また地域の国際水準に関する様々なチャンスを探し当てたかを紹介します。

July 23 - Room 311A

23-311A-C (13:00 - 13:40)

English

E079

by Bhadmus Wumi(Nigeria)

23-311A-D (13:50 - 14:30)

English

E084 *オディッセイ・プロジェクト*

by リチャード・リグリー(Japan)

オディッセウスがトロイ戦争の勝利の後に、故郷への帰還を果たすための10年にわたる冒険の話は、西欧文学の曙とともに生まれました。海と火山の王ポセイドンの怒りを買ったオディッセウスは10年の長い冒険旅行を余儀なくされます。神々に翻弄されて、一つ目巨人キュプロプスと戦い、海の精セイレンの誘惑に負けぬよう自らを船の帆柱にくくりつけ、黄泉の国ハデスのもとに降りて堕ちてしまった戦友たちに会い、暴風雨や船体の難破を生き延びます。これは、人間の弱さ、死、成長の話であり、機知と知恵や強さの話でもあります。オディッセイ・プロジェクトは10年にわたるプログラムで大型帆船や鉄道、時にはらくだを使った発見の旅で、一連の世界中での旅をモチーフとしてさまざまな国や大陸の教室の生徒たちを繋ぎ、教室では関連する科学、技術、地理、歴史、言語芸術や環境の学習活動をします。 教室はプロジェクトへに参加し、調査研究や旅に関する活動をしながら、世界中に散らばる学習サークルと連携し、他の文化を持つ学生たちと一緒に作業しようとする中で相互理解を深め、世界の技術、社会、経済がどういう発展を遂げて来たかについての理解するようになります。この世界中を航海する力を持つ大型帆船は、多くの欠点や未来の危険を孕みながら現代社会に持ってきた道具ですが、未来の象徴でもあります。風という自然の力で環境に優しく、子供でも大人でも対等にその注意が要求されます。どの子供も人生における冒険旅行の過程にあり、子供たちを繋いで世界の問題を理解し、将来役割を果たす十分な準備をする一助となりたいと考えています。このワークショップに参加し「冒険学習」をしましょう。そして、旅や準備された資料が授業にプラスに働き、理解や連携を深めるものであるか、を目の当たりにしてください。

23-311A-E (14:40 - 15:20)

Japaese

J042 *プレゼンテーションにおけるコミュニケーションの重要性*

by 石部 睦雄, 長尾 尚(Japan)

23-311A-F (15:30 - 16:10)

English

E037 *ワークショップ:アイアーン オンライン講座ファシリテーターになる方法*

by エリアナ・メトニ、ロジーラ・オケロ(United States)

アイアーンはオンライン教師向け養成講座を2001年9月に5つの実験的講座を手始めに実施した。45カ国300人の教師の参加したこの実験的講座の成功の後、専門家養成プログラムの一環として年二回の講座を開き、この講座はロシア語、フランス語、アラビア語に翻訳されてきた。http://www.iearn.org/professional/online.html このプログラムは協働で実施し作業することで学習を行う方法である。オンライン教師向け養成講座の発展に伴い、プログラムに参加しアイアーンオンライン講座の補助をする過去の参加者を求めている。各講座に二人のファシリテーターの協力が必要で、9週間の講座を補助し管理する。このワークショップではオンライン講座補助を行うにあたっての要件について話す。現在活躍中のファシリテーターも参加し、自分の経験やオンライン講座補助のやり方についての話も聞くことができる。

23-311A-G (16:20 - 17:00)

English

E034 *飢餓と貧困について教育する資料*

by Stephen Vhenya, Losira Okelo(USA/Zimbabwe)

飢餓に立ち向かう精神を養うことは、中学生を通して小学生が飢餓、栄養失調、貧困や食物の安全性について議論し、理解するのを助け、そして飢餓のない世界を作るための活動に参加させることを第一の目的とする国際的な教育です。このプロジェクトは教師たちが議論や活動を指揮するのを手伝うためのCD-ROMやマニュアル、ウェブサイトも含みます。資料や相互的な議論の会合は英語、フランス語、中国語、イタリア語、アラビア語、ギリシャ語、スワヒリ語そしてポルトガル語で、ご覧いただけます。このワークショップは年間を通して、そして世界食物デーに向けて生徒たちと行ってきた活動をあなた方と共有しようととする"飢餓に立ち向かう精神を養う"プロジェクトの進行役の人たちや教師たちによって促進されるでしょう。私たちはあなた方の生徒たちにこのプロジェクトにアクセスさせるためのI-EARNの技術機器の使い方についても議論し、そしてこのプロジェクトをあなた方の指導にどのように合わせるかを計画するのを手伝いたいと思います。

July 23 - Room 311B

23-311B-A (11:20 - 12:00) **J065** ***THE KUMON METHOD***

by 公文教育研究会, グループ広報室(Japan)

English

世界43の国と地域、計330万人に広がる 個人別学習の公文式。その秘密をお伝えします。

23-311B-C (13:00 - 13:40) **J025** ***世界水フォーラムに参加して***

by 頓田 晴美(Japan)

English

世界水フォーラムに参加して、先進国と発展途上国との水事情の違い、水源の確保、市民と企業の利益との対立など、様々なことを考えた。水汲みに時間と」労力をついやさなければならない子供と女性たち、水ビジネスの問題など、「水」について皆で話し合う場をもちたい。

23-311B-D (13:50 - 14:30) **J059** ***教育は国境を越えて　サイエンス番組で目指すボーダレスエデュケーション***

by 上林絵梨香, 中村真由美, 増井奉政, 中島一雄(Japan)

English

《 18本の科学・文化に関する教育用映像番組の放映 》

23-311B-E (14:40 - 15:20) **W002** ***～世界の子供たちと宇宙でつながろう～***

by 尾久土正己, 三菱電機(Japan)

English/Japanese

天体観測イベントにかける思い ★宇宙の視点で世界を見ることができる子供たちになってほしい（隣国理解、平和、環境問題） ★2003年は、この200年間で一番火星が大きく見える「世紀」の大接近の年。是非、子供たちに　天体観測を通じて宇宙に興味を持ってもらいたい。 ★iEARN国際余議inJAPAN終了後、自国に帰っても世界の先生・子供たちが同じ空を見上げる　ことで、日本での大会を思い出し、次の活動のエネルギーにしてほしい。＊三田市インターネット望遠鏡で観測した火星の映像などは、インターネットを通じて世界中で見ることができる＊2003年の夏は火星の「世紀」の大接近。火星が昇ってくるのが22時以降。20日をすぎれば、サイズが20秒角を越し、木星サイズの大きな火星が見え、表面の模様も見える可能性がある。今回の接近は200年間で一番接近する最高の条件。★ワークショップ　平成15年7月23日(水)14:40～17:00 14:40～15:10 講演「インターネット天文台と火星」(尾久土正巳博士) 15:10～15:40 三田市インターネット望遠鏡のご紹介（三菱電機株式会社） 15:40～16:30 グループ討議 天体観測と教育、インターネット望遠鏡の活用など 16:30～17:00 グループ発表 ★インターネット望遠鏡による天体観測会 7月23日～24日の夜間　※端末から自由にアクセス頂けます。

July 23 - Room 403

23-403-A (11:20 - 12:00) **E093** ***学校を拠点としたテレセンター：ブラジル型モデル***

by Adriana Vilela(United States)

English

World Linksは、アイアーンの提携団体です。アフリカにおいて学校内のテレセンターの組織化を成功させてきました。 2003年、World Linksはラテンアメリカでテレセンターの活動を開始しました。Accenture foundationからの補助金によって、サンパウロ郊外の最貧困地域favelaに、学校拠点による5つのテレセンターを開設したのです。World Linksは、the Center for Democratization of Informatics in Brazil (CDI) との協働により、20人の学生にテレセンターの運営を指導する予定です。その後、彼ら実習生たちは、この地域における自分の同僚あるいは家族に、テレセンターの利用法を指導することになります。Hewllet Packard 社は、テレセンターにも利用可能なiPAQSを同地域の各学校に10台ずつ寄付しました。ブラジルの学校では、税金が設備投資に使われることはありません。現在の課題は、サンパウロの教育省および学校のteacher-parents associationsとの協力による持続可能なモデルの構築を如何に行うのか、という点です。

23-403-B (12:10 - 12:50) **E098** ***生きる権利のある人間として：「地球上におけるすべての生命宣言」の実例提示***

by Alimamy Bangura, Sylvester Youngz, Brima Sorie Kamara, Hidowa Saidu(Sierra Leone)

English

シエラレオネのアイアーンの同僚とともに、アイアーン・シエラレオネが主催する二つのプロジェクト(www.childsoldiers.org ;http://peacereconcile.virtual activism.net)の成功を報告する。アイアーン・シエラレオネに所属する私と私の同僚は、世界の平和を願うシエラレオネの集い(WPPSSL)における平和活動の仲間たちと一緒に、我々はみんな、人間として生きる権利を持っていることを、テレコミュニケーション技術を用いて示したい。

23-403-C (13:00 - 13:40) **J007** ***A Study of Presentation Lesson in High School***

by 北村光一(Japan)

English

高等学校の情報教育において、プレゼンテーション能力を身につけることは重要である。そこで、この能力を身につけるための指導法モデルを提案する。この指導法モデルに基づいて生徒の実態に応じたアニメーション教材を開発し、従来の一斉指導と、コンピュータ函くｆｉアを利用したアニメーション授業を実施し、比較検討した結果、生徒の実態に応じたアニメーション教材を用いた学習が従来の一斉指導法よりプレゼンテーションスキルを身につけるのに有効であることが明らかになった。

23-403-D (13:50 - 14:30)

English

J009 ***SARSと風評被害***

by 上野浩司(Japan)

日本において、SARSはその病気の危険性以上に風評による被害が大きかった。私の住む沖縄では、米軍基地が多くあるが故に、9.11のテロ事件のあと、「沖縄は危険」という風評だけが一人歩きし、観光産業に多大な影響を及ぼした。風評被害が広がる原因は何なのか、また、沖縄の風評被害に抗した本校の生徒の活動もあわせて紹介する。

23-403-E (14:40 - 15:20)

English

E046 ***HIV・エイズ、垣根を越えて***

by ボブ・ホフマン(Netherlands)

2002年9月から12月、9つのアイアーン参加国がHIV・エイズ、垣根を越えて プロジェクトに参加した。このプロジェクトは健康の権利の世界キャンペーンの一環であった。参加した学校ではデジタルカメラを手に、生徒たちは地域での詳しい研究を行った。参加国は、アルゼンチン"フリオ・コルター" Esc. Prov. N. 714 Trelew(Chubut)、レバノン Adma International School(Fatka)、マケドニア DSEMU Gorgi Naumow Bitola、オランダ K.S.G. 'De Breul'(Zeist)、南アフリカ Mpophomeni High School(Howick)、台湾 Kaohsiung Girls' Senoir High School(Kaohsiung市)、ウガンダ Makerere College School(カンパラ) 、ザンビア Olympia Basic School(ルサカ)。プロジェクトの目的は:若者がエイズについてどう考えているか、自分の国について何をしっているのか、他の参加国の状況についてのイメージを明らかにする;知り合いの意見や持っているイメージを明らかにする;イメージ作りがどう成り立ち、どう機能しているかを明らかにする;これから先にすべきことに知恵を絞り、それに若者世代の果たす役割を考える。このプロジェクトはアイアーン・オランダ、AliceO、およびICT&Eとが組織した。この発表の目標:台湾とオランダの参加者のプロジェクトに対する意見を取り上げ、2002年のウェブを用いた成果を発表する。アイアーン・オランダはこのプロジェクトを再開し、2003年にも延長して行うことを要請されている。ワークショップの間に2003－2004年プロジェクト(2003年10月－11月)に参加する15カ国を募集する。ワークショップ終了後、新しく参加する国・学校には、プロジェクト期間中にデジタル画像を送るのに必要な、デジタルカメラが送られる。

23-403-G (16:20 - 17:00)

English

E080

by Afra Abnar, Elham Delzendeh

July 23 - Room 404

23-404-A (11:20 - 12:00)

English

E020 ***イランの週一のオンライン授業とその活動***

by Maryam Behnoodi(IRAN)

オンライン授業を使って約100カ国とどのように関係を持つことができたのか、そして現在までの約8カ月の登校期間中の活動がどのようなものであったのかをこの発表で説明したいと思います。そして生徒たちがどのようにしてそういった国々の中で行われたコンテストで賞まで取ることができたのか、またどのように生徒たちが、お互いに協力するようになったのかについても説明します。彼らは集団の中でどのように生活すべきかを学び、大人たちも彼らから学ぶのです。どうやって彼らが珍しい飛び方をする凧を飛ばすのかについても紹介します。

23-404-B (12:10 - 12:50)

English

E048 ***障害者のためのコンピューター***

by fereshteh valamanesh

私は養護学校で助手をしています。そこで、私たちは彼らの障害を克服するためだけではなく、生徒達のより良い教育の為にコンピューターを使い始めました。これは、私たちの努力に関する報告です。

23-404-C (13:00 - 13:40)

English

E075 ***CIVICS and BRIDGEのプレゼンテーション***

by BRIDGE-CIVICS コーディネーター(Lebanon)

CIVICS-BRIDGEのコーディネーターにより、合同のプレゼンテーションを行います。

23-404-D (13:50 - 14:30)

English

E060 ***カリキュラム改善の道具としてのテレビ会議:イリノイ国際高校***

by Ivan P. NIKOLOV(USA)

このプレゼンテーションは、プログラムやカリキュラムや制度を改善するツールとしてインターネットやテレビ会議を利用することに焦点を当てています。イリノイ付属学校は、国際学校パートナーシップを活用しながら、カリキュラムを州の基準と一致させるのに、情報テクノロジーをツールとして様々なアプローチを試みてきました。それを実例を挙げて紹介します。

23-404-E (14:40 - 15:20)

English

E107 ***国際協力***

by アブダル ムミン イッサー(ghana)

23-404-F (15:30 - 16:10)

English

E030 *ウガンダにおける環境汚染:技術的進化の遅れは環境汚染悪化の要因となり得るか？*

by キエンバ・パトリック(Uganda)

タイトル:ウガンダにおける環境汚染「技術的な進化の遅れは、環境汚染悪化の要因となり得るか？」名前:キエンバ・パトリック 環境、簡潔に言えば「人とそれを取り巻くもの」は、地球上の人間の現在そして未来にとっての重要な決定要素である。しかしながら、低開発国(LDC)であるわが国の場合、昔のやり方に固執した農法、魚の乱獲、ごみの投棄や大気汚染などを考えると、人口増加が土地、水、空気に与えた影響は非常に危険なレベルであり、こうした環境にとって好ましくない影響に対処する動きが遅れた原因として、わが国の技術的進化の遅れがどの程度関係しているのかという疑問が残る。実際に技術的な力量があれば、わが国は肥沃だが価値の下がってきた土地を保存する方法として、プラスチックやガラスをリサイクルすることができるだろう。また淡水湖には、危険なホテイアオイがなくなり、工場からの煙の処理や淡水の処理にも影響を及ぼすだろう。木炭をとるための樹木の伐採を減らすため、購入可能な電気機器を利用することによって、山林伐採が抑制されるだろう。土壌浸食や沈泥の堆積を減らすために行なわれる土壌や化学肥料および機械の研究によって、農業が発展するだろう。こうした危険な環境劣化の要因として、私はさらに、貧困、未開、ずさんな政府施策を含めた問題の側面からも、取り組んでみるつもりである。

23-404-G (16:20 - 17:00)

English

J030 *部活でのアイアーンの取り組み*

by 上野浩司(Japan)

本校では、「アイアーン沖尚(i EARNOkisho)」という部活動を中心として、アイアーン活動に取り組んでいます。そこでのユニークな活動の数々を報告します。また、この発表では私は日本語で発表し、それを生徒が英語に翻訳します。(普通の逆でしょ)

July 23 - Room 405

23-405-A (11:20 - 12:00)

English and Japanese

J043 *初心者が挑戦した国際交流(International Communication Beginner Challenged)*

by 増田 恵里香, 納谷　淑恵(Japan)

国際交流やテレビ会議自体が、どういうものなのか分からないところからのスタートでした。尼崎南高校で、そんな私(増田)が担当した2年間の交流について実践報告します。納谷先生をはじめ、多くの方々に支えられて乗り超えることができた2年間でした。2年間とも、IEARN国際会議会場と尼崎南高校をつないでテレビ会議を行ないました。特に14年度はテディベアプロジェクトを通して、ロシアの学校と交流しましたが、去年、納谷先生がロシアの会議に行かれた様に、今回ロシアのOlga先生が日本に来ることを検討されています。お互いの学校の交流の様子を直接お伝えできればいいなと思っています。

23-405-B (12:10 - 12:50)

English

E035 *我々はすべて生きる価値のある存在です:「地球上のすべての生き物の宣言」の1例*

by Andrew Greene(Sierra Leone)

2つのウェブサイト(i EARNシエラレオーネプロジェクト;www.childsoldiers.org と http://peacereconcile.vi rtualacti vism.net でiEARN Sierra Leoneに属する私の仲間と私それにWorld Peace Prayer Society Sierra Leone(WPPSSL)の平和の仲間)の成功例を紹介し、テレビ会議を使って、われわれすべては生きる価値のある存在だということを示す試みをします。

23-405-C (13:00 - 13:40)

English

J005 *課題研究における環境教育の展開*

by 関野 卓正(Japan)

課題研究で環境教育を生徒と共に行った。総合的学習の先行的試行として位置づけ、参加型学習、インターアクションプログラムで各種団体とパートナーシップを追求した。学習履歴としてのカリキュラムという観点からポートフォリオ型の評価を追求するとともに地域的な学習課題を探った。その結果、水と河川というテーマから武庫川におけるヌートリアが課題として浮上した。インターネットや電子メールを利用して知識を集め、実際のフィールドワークも行った。狩猟許可の申請、箱わなの設計と製作、捕獲による研究、将来的には移入動物に関する市民フォーラムの開催などを計画している。

July 23 - Main Hall

23-MH-B (12:10 - 12:50)

English

E023 *アイアーン　オンライン講座の紹介:協働プロジェクトに参加する方法*

by ロジーラ・オケロ(USA/Lebanon)

2001年9月に試験的に5つのオンライン教師向け養成講座を実施した。45カ国300人に及ぶ教師の参加を得たこの試みが成功を博し、現在では専門家養成プログラムの一環として年二回設けられており、ロシア語、フランス語、アラブ語に翻訳されている。英語で実施されている5つの講座は、1)創作芸術、2)文章・言葉の創作、3)芸術、4) 社会学・時事・自然地理・環境・数学、5)第二言語としての英語・外国語としての英語　で、いずれも9週間にわたり同時進行で勧められる。教師と生徒が協働プロジェクトを行うのに用いるのと同じ機器を使い、どの講座も、アイアーンの協働プロジェクト参加ならではの、文化の違いや技術格差のままに一緒に作業するようになっている。講座は双方向性で、他の教師や講座助手(ファシリテーター)と読み物、活動、宿題を、リアルタイムでなく個別に(アシンクロナス)、あるいはリアルタイム(シンクロナス)に行う。個別活動(アシンクロナス)としては、選択したアイアーンのオンライン話し合いフォーラムに宿題や議論を都合のいい時

間に毎週送る。リアルタイム(シンクロナス)活動としては、各講座はリアルタイムでチャットする時間を設定しており、そこで他の参加者たちと互いに活動について話しあうようになっている。講座には初めと終わりが明確で、講座の構成は9週間となっている。第一週目はオリエンテーションで、オンラインの級友や講座助手に紹介され、用意された楽しいプロジェクトを完成させることで、この学習環境と使う技術機器に慣れ、この講座の目的を理解する。オリエンテーションのあと、それぞれが選んだ講座に分かれる。毎週、宿題・読み物・集団作業があり、指導者の指導の下、あるいは自分のペースで行う。各講座では二人の講座助手が案内役となる。毎週の宿題は自分のペースで完成させ、プレッシャーを感じることなく、また利用者に暖かい、講座助手や仲間と連絡を取る。学習を目的とした社会なのですから。講座助手や他の参加者から意見を聞いたり励ましを得る中で選択し、協働プロジェクトにまとめていく。このワークショップでは、これまでの参加者や講座助手が講演し、アイアーン・オンライン講座を紹介するものである。このワークショップに参加して、世界中の教師に出会い、自分の学級が国際協働プロジェクトに参加する、この新しく面白い方法を学んでください。

23-MH-B (12:10 - 12:50) English

J014 ***テレビ会議を使った日米合作映画***

by 平山 欣孝(Japan)

ISDNを使ったテレビ会議やインターネットの電子メールなどの交流が発展して、日米合作映画を作った。交流相手を見つけたのは、学校を紹介する出会い系サイト。1999年に最初のテレビ会議を行って以来、小学生を100人招待したテレビ会議など、様々な形でのテレビ会議に取り組み2001年には、相手校からの一行が来日したり、私が渡米して共同研究発表をするなど、バーチャルな国際交流からリアルな国際交流へと発展した。テレビ会議をシーンを含めた日米合作映画が完成した2002年には、その映画の試写会をテレビ会議を使って行った。日米の主役の生徒は002年の夏にアメリカで再開し、友情を深めた。

23-MH-C (13:00 - 13:40) English

E003 ***テディベアとその効果***

by Maryam Behnoodi(IRAN)

テディベアは旅をしながら私たちの文化を運んでくれます。学生たちはそのおかげで、英語を第二外国語として学ぼうと思うようになりました。そして彼らは、この方法で知り合った外国の学生たちに、自分たちの文化を教えることに、さらに協力するようになり、その他の学生とも連絡を取る予定です。

23-MH-D (13:50 - 14:30) Japanese

J045 ***Teddy bear project with Taiwan***

by 清水和久(Japan)

昨年度台湾の志開小学校と交流を続けてきた。交流にはもの、PC、英語が必要であり、どのように交流をしてきたかの話をします。特にPCの利用では、テディベアの服のデザインをPCを使って両国で行い日本ではphoto shopのレイヤー機能を使っていろいろなデザインを合体させてつくりました。英語の交流は表現を決めてクイズ大会を実施しました

23-MH-E (14:40 - 15:20) Japaese

J008 ***テディベアプロジェクトで生まれた平和のための友情について***

by 岸原史明(Japan)

テディベアプロジェクトをきっかけに芽生えた、子どもたちどうし、教師どうしの友情が国境を越え、海を越えて育まれ、それが平和への大きな力に発展していく取り組みを報告したい。

23-MH-F (15:30 - 16:10) Japanese and English

W006 ***テディベアプロジェクトワークショップ***

by 岸原史明(JAPAN)

これから、テディーベアプロジェクトをはじめてみようとする向けのワークショップです。報機器を有効に使った交流の仕方を発表します。

July 23 - Poster Session

23-POSTER-1 English

E019 ***喫煙と喫煙が人間に及ぼす影響***

by Abrefah Kwame Isaac(Ghana)

喫煙は深刻な病気やたくさんの悪影響をもたらす可能性があるので、世界中の医者や医療の専門家は、人々が喫煙をやめることができるように一人一人を教育することに頭を痛めている。

23-POSTER-10 Japaese

J022 ***情報教育に関わる教科書比較交流***

by 山上 通惠(Japan)

文部省の科研で新教科「情報」教科書比較をしたグループが、その比較調査対象を世界の情報教育に関する教科書に広げたいと考えています。

23-POSTER-11

J079 ***琴について***

by 啓明学院筝曲部(Japan)

啓明学院筝曲部のメンバーが琴とその楽曲について説明します。ポスターセッションの後には、お茶室で琴の演奏体験もできます。

23-POSTER-2 **E039** *ウクライナのアイアーンプロジェクト*

by Nina Dementyeyevska, Larysa Shevchuk, Valentyna Sakhatska, Natalya Cherednichenko(Ukraine)

English

2002～2003年度にiEARNウクライナのネットワークを通じて取り組まれた32のプロジェクトの発表その中の一つ「人形の旅」を紹介します。ロシアーウクライナー日本の旅です。

23-POSTER-3 **E082**

by Lawal Akinola(Nigeria)

English

23-POSTER-4 **E103**

by DELMA BURROWS FARIAS(CHILE)

English

23-POSTER-5 **J012** *サイド・バイ・サイド・プロジェクトの自画像の掲示*

by 林 佳織(Japan)

Japaese

サイド・バイ・サイド・プロジェクトで交流した学級の児童(アメリカ合衆国フロリダ州マイアミの小学校)が描いた自画像(20×80cm)21枚。描いた児童の好きなことや夢なども、用紙の中に描かれています。本人の代わりに自画像が、海を越えて遠くの日本まで、お友だちに会いに来てくれました。

23-POSTER-6 **J041** *友だち100カ国にできるかなプロジェクト*

by 長瀬久明(Japan)

Japaese

インターネット上に無料の機械翻訳サイトが多数，開設されている．日本語と主な言語との間では，全インターネット接続者は，無料で翻訳できる．このための知識技術は，場所(URL)，簡単な操作(click,cut&paste)，翻訳しやすい作文，程度であり，中学生，高校生であれば短時間でマスターできる．筆者はこれを用いた，グローバルなコミュニケーションを計画，準備している．以上を説明，紹介したい

23-POSTER-7 **J052** *Cross cultural Information Technology classroo*

by YACHI Masahiro, SUDO Takeru, HATANAKA Akiko, HIROSE Go, IWAI Maiko (Japan)

Japaese

This classroom curriculum will be built upon two layers. One layer will be the designing or creation of a work, and the other foundation layer will be the closs cultural exchange of the work through exhibition or presentation. One crucial factor in this curriculum is for students to freely express their areas of interest.

23-POSTER-8 **J061** *"トライやるウィーク" 中学校での職業体験学習*

by 斎藤 文子 松本 尚之(Japan)

English

兵庫県教育委員会が「トライやるウィーク」という職業体験学習を中学校2年生で推進しています。「トライ」は2つの意味があり、ひとつは、英語の"Try"の意味で、もう一つは、学校、家庭、地域のトライアングルの「トライ」という意味です。1週間、14歳の生徒は、学校を離れ地域でいろいろな体験学習を行います。

23-POSTER-9 **J046** *高校生の観点から見た携帯電話が彼らの日常生活に及ぼす影響*

by Takuya Kotani(Japan)

English

私たちの生活は1990年代初期に始まった急激な情報技術革新により劇的に変わりつづけている。日本のPTAは14歳の子供たちの約28%、そして10歳の子供たちの約10%が携帯電話を持っていることを指摘している。彼らのの多くは小さい頃から携帯電話や、パソコンのような情報機器を使い慣れている。しかし、その一方で、彼らの両親の約40%が子供たちの情報機器の使い方に大変不安を抱いている。携帯電話や、インターネットを使った犯罪の数はどんどん急速に増えている。そのため、小学校や高校の教師は学校のカリキュラムの中で子供たちに情報リテラシー(読み書き)を学校で教えなくてはならなくなった。去年まではその内容を物理、技術や数学といった既存の科目の中で教えていたにもかかわらず、今年から「情報」という新しい必修科目が加わった。この研究の中で私たちはまず、情報技術や情報リテラシーをどのようにして物理の授業の中で教えたかを示した。次に、私たちは情報リテラシーの授業で、携帯電話が彼らの日常生活に及ぼす影響について生徒がどのように考えたかを新聞記事を使って調査した。

July 23 - Reception Hall B

23-RHB-E
(14:40 - 15:20)

English

E066 ***RELO-iEARN世界での連携 ー 地方での経験の共有***

by ビクター マナチン(Russia)

iEARNは、RELO(アメリカ政府地域英語教育事務局)や多数の海外諸国の文部省とパートナーシップを組みました。RELOは、学校での英語教育や、企業、大学でのトレーニングへのサポートを提供します。iEARNのプロジェクトが展開する英語クラスで、言語を有意義かつコミュニカティブな方法で活用することによって生徒の英語力を高めていることを発見しました。さらに、選択されるプロジェクトの内容や他の諸国の学生たちとの交流が、教育経験を豊かなものにしています。このプレゼンテーションにはエジプト、ロシア、タイから代表者をお招きしています。また、バンコクのRELOがどのようにiEARNとのパートナーシップを築いたかを、興味深い実績を交えてご説明します。ロシアの実績はモスクワのiEARNグループの方々とともにビデオコンフェレンスを通じてご紹介いたします。

23-RHB-F
(15:30 - 16:10)

English

E071 ***私たちの環境をより身近で見ること--iEARN台湾の水世紀プロジェクト***

by Jane Kang(Taiwan)

80分。司会者:Miller Lien, Vincent Chang, Doris Wu, Jane Kang 21世紀という水の世紀に住んでいる私たちは、人間相互の関係および理解を深め、他人とうまくやっていく方法を学習すべきです。その間、自然と人間の間に重要な関係があるので、私たちは、環境にできるだけ接近しているべきです。共同作業を通して自然をもう少し詳しく見て、他人を心配し、敬う態度を身につけることができます。このセッションでは、私たちは、毎日の生活で必要な成分、すなわち水から始めるでしょう。水のサイクルおよび都市の生水システムに興味を持っている学生は、自分たちで観察を行い、家で使用前に水を浄化する過程を把握します。そして愛の川の美しさ、故郷であるKaohsiungという川の町をお見せします。過去十年間それは汚い溝でしたが、掃除してきれいにしてからはKaohsiung市民に最も人気のあり、ロマンチックな場所になりました。Kaohsiung市民における重要な役割を果たしているか、過去から未来へどのように生きるかを私たちの学生がお見せします。別のグループの学生は、はるかIlan、台湾島の北東の角にある郡へ行き、Makau山(その自然森林に関する多くの論争問題を抱えている美しい場所)を訪れました。それは先住民の土地「Atayal」にあります。したがって、それらは、地元住民の見解を示しながら、種族と山の関係に関する報告書を作ります。先住民だけでなく老人および子供私たちの関係も懸案事項です。何人かの学生は特に老人、子供、障害者のための台湾の福祉システムに関心を持っています。学生は、彼らの生活を改善する方法を見つけたくて、彼らとうまくやっていきライフスタイルを感じようとします。活動により、学生は自然や周りの人たちを大切にするのにより多くの時間を費やすことを学びます。私たちは、それが本当に効果を生ずるだろうと確信しています。

23-RHB-F
(15:30 - 16:10)

English

E070 ***Wonders of Life -Global Art Project in i*EARN Taiwan***

by Jane Kang(Taiwan)

40 minutes presenter: Grace Ma, Jane Kang How can students learn to care about their family, friends, plants, birds and animals in their surroundings? With lovely pictures, poems and short essays, Taiwanese students show their artworks with love and respect to those who live on this spectacular earth. Besides the primary students' presentation, we also provide a hands-onactivitiy for our audience. Everyone will make a typical Taiwan handcraft as a gift.

23-RHB-V
(17:10 - 19:10)

English

E087 ***www.bullying.org 学びの道程***

by ビル・ベルシー(Canada)

いくつもの賞を授与された、世界一のいじめに関するウェブサイトwww.bullying.orgを創ることに繋がった、いじめについての個人的なそして仕事での学びの道程についてお話したいと思います。CBCニュースのピーター・マンスブリッジ氏はwww.bullying.orgを子供にとって世界一のウェブサイトと紹介しました。このワークショップではwww.bullying.org製作者のビル・ベルシーがこの面白いマルチメディアのサイトを紹介します。www.bullying.org はたくさんの賞を授与されたウェブサイトでいじめ問題を抱えた人を安全で前向きな国際社会で助けようというものです。www.bullying.org は国際的な支援組織でここでは、いじめやからかいにあっているのは自分だけではない、いじめやからかわれた人に非があるのではない、そしてできる前向きな対応策がある、ということを知ることができます。自分の経験や詩、絵、話(オーディオファイル)、音楽、またアニメや映画も投稿することができます。www.bullying.org には「役に立つ情報」コーナーがあり、記事や書物、法律や政策、研究、マルチメディアの情報などの膨大なリストからなります。www.bullying.orgには大人や若者を対象とした世界初の支援オンラインを用いた支援グループがあります。www.bullying.orgは子供にとってのインターネットをよりよくしようという趣旨のプロジェクトの一環である国際子供ネット賞を授与されました。www.bullying.orgは IT社会におけるノーベル賞であるストックホルム・チャレンジ賞の最終候補にもなりました。www.bullying.orgの閲覧数はひと月にだいたい50万人から100万人です。www.bullying.orgは先日ケーブルテレビを通して500万人のカナダ人が見ているカナダの家族チャンネルと提携しました。家族チャンネルはwww.bullying.orgと協力してカナダ国内でいじめ問題の意識を高める活動をします。世界のメディアがwww.bullying.orgの特集をしました。
「www.bullying.org, ひとりの学びの道程」は、北京、ケープタウン、モスクワで開催された会議、そしてカナダ国内での放映で大きな感動をもって迎えられました。

July 23,24 - Room 405,MH

23,24-405,MH-E,D **W010** *アイアーンコーディネータワークショップ*

by アイアーンUSA(USA)

English

アイアーンコーディネータワークショップ アイアーンコーディネータワークショップは各国のアイアーンコーディネータ及び代表が、互いの情報を共有し、それぞれの国でどのようにプログラムを進めているか、アイアーンに何が期待されているかまた、どのようなサポートが必要かを話し合う場です。各国のコーディネータの要求に焦点をあて、各国のコーディネータから前もって提出された問題や、日本から提出されている問題を考える時間に多くが費やされます。様々な国のコーディネータがワークショプを運営しプロジェクトをどう進めて行くか、また資金集めの方法、正式なNGOとなる方法、など様々な問題が話し合われます。

July 24 - Room 302

24-302-A **E068** *ルーインを使っての英語教育*

(11:20 - 12:00)

by ファラ カメル、ボブ カーター、ヴァージニア キング(Pakistan and Aust ralia)

English

本ワークショップは英語教育における問題を扱う実践的なワークショップです。協同的アプローチにより、本ワークショップは言語教育の求める成果、さまざまな障害、一連のテクニックを探求します。また、言語教育におけるプロジェクトを基本とする学びと協同プロジェクトの役割も探求します。iEARNのプロジェクトであるルーインは生徒の作文の世界作品集であり、ワークショップの基礎として使用されます。ワークショップの概略:英語教育において、どんな成果を生徒にもたらしたいか。このルーインを達成するにおいての困難は何か。我々が期待する結果を得るためにルーインをどのように英語教育に使っていけばよいか。ルーインを授業にとりいれるための授業計画の一つとして、小グループに分かれての準備。

24-302-B **E109** *I*Earn ヒューマン・ネットワーク構築におけるベラルーシの経験*

(12:10 - 12:50)

by ヴァレンティナ スヴォリナ(Belarus)

English

本プレゼンテーションではベラルーシの生徒と教師のI*EARNネットワーク構築の経験についてお話したいと思います。どのようにして学校とI*EARNプロジェクトを結びつけ、プロジェクトを始めるか。作業を組織化して教室に組み込む可能性について。また、他の国々での同じような経験についても話し合い、それをベルラーシに紹介したいと思います。

24-302-C **E101** *ジャパンプログラム*

(13:00 - 13:40)

by Rosy Aguila(Argentina)

English

24-302-D **E106** *新プロジェクトの提案*

(13:50 - 14:30)

by ruty hotzen(israel)

English

イスラエルにおける活動は、異なった部門の学校同士でペアを作り，そのペアで共同研究を行うという形でなされています。ペアとなった学校の生徒たちは、E-mailで情報をやりとりしたり、コンピューターを使ってのグループディスカッションに参加したりして、共同して研究プロジェクトにあたります。コンピューター上におけるフォーラムに加え，定期的に，実際にミーティングを持つことも重要です。この二つによって、イスラエルの学校で高等技術がどんどん利用されている間は、コミュニティ間のふれあいが続いていきます。私達の目標は次の3つです。1. 教師及び生徒にインターネットを利用することを教え、奨励する。2. 異部門間の共同研究のための共通のテーマを選び、生徒のプロジェクトでの高等通信技術の利用を発展させる。3. 様々なコミュニティの生徒達が親しく協力し合うことを奨励し，様々な住民グループが交流し続けるために定期的にミーティングを行うことを奨励する。

24-302-E **E047** *LANで教える新しい技術*

(14:40 - 15:20)

by amir khadem kimyaei(iran)

English

このプレゼンテーションでは、私たちがlan(ローカル・エリア・ネットワーク)のコンピューターで教える最良の方法を見つける努力に関する報告書を用意しました。私たちはいくつかの問題を経験し、解決法をみつけましたが、まだ議論すべきことがたくさんあります。これが私たちのプレゼンテーションで焦点を当てていることです。

24-302-F **E097** *ことわざ と慣用句 プロジェクト*

(15:30 - 16:10)

by アフラ・アブナー、エラム・デルツェンデー(Iran)

English

みなさん 今日は！我々の発表内容について少し述べます。我々が去年の夏から始めた「ことわざと 慣用句」プロジェクトに、現在世界中から25カ国が参加しています。ことわざを選んだのは、ことわざにはたくさんの経験が詰まっているからです。ことわざは文化を間接的に教えてくれ、地理的条件と文化の雰囲気を一緒に味わうことが出来ます。我々のe-mailアドレスです。 1) Gilava Delzendeh: Gilava_Delzendeh@hotmail.com 2) Afra Abnar: mapleafy@yahoo.com

24-302-G (16:20 - 17:00) English

E052 ***芸術教育の為の選択すべき適用法について***

by Suzan Duygu Bedir(Turkey)

このプロジェクトは見る為の芸術への新しい視点をもたらします。 この研究のねらいは、互いに影響しあう芸術教育の為の選択すべき適用法を 発達させる事です。様々な国や文化の違いをメール上で話し合う活動に よって、次元的な手がかりがこのプロジェクトに加えられる事でしょう。 このプロジェクトによって、生徒達の為に考えられた相互に影響しあえる 環境での助け合いによってカリキュラムを学ばせる、という事が意図されて います。 ＊9才～12才の子供達の為の芸術教育のウェブページを創る ＊インターネット上の使いやすい芸術教育サイトを子供達に指導する ＊インターネット上でのウェブアドレスから生徒達の考えを共有させる 機会を与える ＊生徒達、先生達により多くの芸術教育のための資料を得る為の機会を 与える

July 24 - Room 304

24-304-A (11:20 - 12:00) English

E058 ***ベンジャミン・ブルームスの階層的学習方法を用いたコンピュータ教育***

by Maliheh Mohseni(Iran)

このトピックを選んだのは、コンピュータを使った学習方法が精神運動の訓練ではないと考えているためである。コンピュータシステムは、豊富な知識や技術に基づいて成り立っているものなので、系統的にかつ科学的に行うべきである。ブルームスの階層的学習法はこの意味で非常に有用である。この学習方法は、意味づけておこなう方法で、利用者はコンピュータを論理的に効率よく学ぶことができる。この方法を用いた結果利用者にとって非常に有益になる。

24-304-C (13:00 - 13:40) English

E104 ***橋をかける:イランとアメリカの学生間のペンパルプログラム***

by Sussan Tahmasebi, Tyler Jourdonnias(USA/Iran)

このプレゼンテーションはイランとアメリカの学生間のペンパルプログラムを作り上げ実施する努力をハイライトとして彩ります。 プレゼンテーターは参加者と共にプログラムの範囲を他の学校や国へ拡大、また現在のイニシアチブの拡大および維持するための戦略を確認します。

24-304-D (13:50 - 14:30)

E118 ***The SEED Water Project***

by マイケル・テンペル、ポーラ・ハリス(USA)

国連国際淡水年を記念してシュルンバーガーはSEED水プロジェクトを開始します。シュルンバーガーのボランティアは学生に地域の水源の質を守り、よりよくするのに必要な知識を深め、考え方や技術を磨く助けをします。このプロジェクトはSEED連合助成金プログラムに参加する学校とアイアーン会員を含むプロジェクト協賛者により実施されます。参加者は世界を基準としてデータを対照比較し、考察をします。学生は地域の水源に対する理解を深め、正確な水質試験方法を学び、さまざまな文化の中でどう水が讃えられているかを探索します。学生は低価格の水質検査キットを用いて地域の水源の性質を調べます。学校ではMITメディア学部未来学習研究室の大学院生たちとシュルンバーガーの技術者たちが設計開発した、手ごろな電子水質検査機器を組み立てることもします。SEED水プロジェクトは学生たち相互だけでなく世界クラスの専門家と関わるまたとない機会です。学生は水質試験結果の世界的なデータベースの構築に寄与し、SEEDウェブサイト上で説得力のあるプロジェクト報告書を発表することになっています。

24-304-E (14:40 - 15:20) English

E005 ***西側諸国の若者はICT(情報技術の改善)を広めるべきだ。***

by COSBY KWABENA AGYEMAN(Ghana)

国を代表するみなさん、若者の情報技術の改善(ICT)を私は強調したいと思います。研究成果を広めるために、若い人たちをICTに関して早い段階で教育するのは非常に良いことです。そうすることで彼らは中等教育を受ける段階で有能になっているでしょう。西側の学生たちは、ICT世界の中で成長し、我々第三世界の人間は、ICT教育や訓練を受けることはもちろん、コンピューターでアクセスすることすら、困難なことです。例えばガーナのような、発展途上の国に寄付をするために西側の人々がICTを発達させることはとても良いことです。私たちがICTを発展させるため、少ない知識や接続機器を改善しようと努力している一方、西側の若者たちは、ただ見ているだけや、テレビゲーム、ギャンブル、暴力、インターネットを使ってポルノを見ることよりも、ICTに良いアクセス、有益な使用をするべきです。一方、若い段階で良い技術を使う訓練を始めると、非常にためになります。それは、可能性の発展段階になると、あなたを教化してくれるでしょう。ありがとうございました。ガーナより コスビー・クワベナ・アジェマン

24-304-F (15:30 - 16:10) English

E004 ***相互的な遠隔授業と生徒の学習スタイル***

by Alenka Makuc(Slovenia)

教育過程のあらゆる段階でのICT活用は教育の質的な向上を可能にします。私たちは小学校段階での生徒の学習の動機付けのために有効な、使いやすいウェブページを開発しました。これは電子本ではないので、生徒たちは学校で使っている文学の本を用意します。ウェブページは生徒、先生あるいは親が出合う機会を提供しますが、同時に主題、ガイドライン、文学、リンク、コミュニケーションツール、テスト、相互的なタスクなども入っているので、遠隔教育のデータベースに必要なすべての情報を含んでいます。先生やファシリテーターはすべての教科で学習課程に活用できます。

24-304-G (16:20 - 17:00) English

J076 ***Reseach based presentations in the School of Policy Studies***

by School of Policy studies students C (Japan)

Second year students at the SPS, Kwansei Gakuin Univ produce a reseach based presentation focusing on a comtemporary issue in Japan. Secondary and primary research is used to investigate the problem and current solitions, as well as formulate new policy solutions.Leadership and accountability within the terms is developed through the use of coordinator roles, which are specific jobs for team members. Participants are invited to view the results: well organised, audience friendly,visually interesting, and content rich presentations.

July 24 - Room 305

24-305-A (11:20 - 12:00) English

E059 ***視覚障害者のためのICT***

by Nasrollah Rezaey(iran)

今日、ICTはすべての人間にとって重要なテーマです。また視覚障害者も例外ではありません。彼らがお互いに、また視覚障害を持っていない人たちと意思疎通を図るためにOCR、スクリーンリーダーやe-ブックなどたくさんの便利なものがあります。大学でコンピューターを学んだ視覚障害者として、私は、新しい技術を使わなければ視覚障害者は世界中の進歩から遅れてしまうと思いますので、自分の国の視覚障害者がコンピューターやインターネットが使えるようになるために手助けの方法を探すことをずっと考えています。幸いにも、私は『コンピューターベースとJAWS自己学習』という本を供給することに成功しました。この本はCDとカセットテープ10本に保存されたe-ブックで、今進行中の『視覚障害者のためのインターネット自己学習』という本を供給しています。最初の本では、コンピューターの簡潔な歴史、視覚障害者のために詳しく説明された、キーボードを含むコンピューターの異なるパーツ、ウィンドウズやJAWSソフトウェアの基本概念を扱っています。理論的概念とともに、実行してプロセスを説明することで各部分を実証しています。二つ目の本では、今まで取り組んできたこと:インターネットの導入、インターネットの接続方法、ウェブページの仕組み、ソフトウェア・インターネットエクスプローラーの徹底的な説明を含んでいます。今後含める他の部分はeメールとチャットです。私は、TARAVAという名前のスクリーンリーダーを準備している科学と芸術ファンデーションの専門家です。このソフトウェアの優れた特徴は、アクセス可能になったときにコンピューターを使う場合ペルシア語を話すことができることです。今現在、視覚障害を持った学生や彼らの教師に上記の本や他の役立つものをいくつか使ってコンピューターやインターネットを教えています。また、私はイランの異なる町の視覚障害者のために新しく立ち上げた5つのウェブサイトを使う、教師や学生のトレーニングの責任者でもあります。このような活動を通して、私は、視覚障害者がお互いに、また目の見える人たちとコミュニケーションを取れるように試みています。

24-305-B (12:10 - 12:50) English

E045 ***国際手ティーンエージャープロジェクト;国際共同学習***

by ボブ　ホフマン(Netherlands)

国際ティーンエージャー・プロジェクトは、iEARMと緊密な連携を取りつつ、1年に2回、10週間の学習サークルを提供します。現在22の国、170クラス、3000人の生徒がこの活動を行っております。プレゼンテーター:ボブ　ホフマン、GTPコーディネーターオランダ　Bナターシャ　チェレニチェンコ、GTPコーディネーター　マケドニア　ニールチェ　ブロメステイン　ネイサン　ダカステル　(IICDオランダ)ワークショップの内容(不確定)ー　プレゼンターの国における中等教育システムについてー2003年学習サークルの成果ー国際ティーンエージャープロジェクトについてのプレゼンテーション・学習サークルのいろいろな面ーバーチャルキャンパスで入手可能な実際のテストー学習サークル/GTPを行う方法

24-305-D (13:50 - 14:30) English

E121 ***国内および国際協力の報告***

by ガスパール・テイラー(Trinidad and Tobago)

国内の報告:2002年10月1日に二つの国内ワークショップが立ち上げられた。一つは校長、教師、学生、若者集団の指導者、そして若者を対象とするもので、アイアーン・USAの協力により素晴らしい代表が参加しました。もう一つは、一つの島で開催され、文部省の役人、校長、教師、若者集団の代表とメディアが参加しました。国際協力によりプログラムを実際に行うことができました。我々の活動に関心を示すようになった文部省に協力し、インターアクティブな教室作りができるようになる日もそれほど遠くはないという夢を抱いています。

24-305-E (14:40 - 15:20)

E117 ***エイズプロジェクト:エイズの影響と阻止するための努力***

by alule Martin(UGANDA)

エイズと闘う国ウガンダで行われた仕事について、エイズ問題とどうやって調査研究するようになったのかを、スライドを中心に発表したいと思います。

24-305-G (16:20 - 17:00) English

E073 ***教育・経済の発展とICT(情報通信技術)***

by Ivin Jere(Zambia)

私の主な発表は、ICT(国際通信技術)が教育・経済分野で、コミュニティ(共同体)の発展に寄与する可能性があることについてである。ICTの風が全世界を横切って吹き抜けるとき、各共同体、全てのセクター、とりわけ発展途上国にとっては、ICTをうまく活用することに挑戦すべきである。現在、アフリカのほとんどの国では、ICT政策を見直す時期か、開始期にあるかどちらかである。今は、ICT政策が私たちのコミュニティ(共同体)の発展に確実に関わるよう配慮がなされるときだ。ICTは主流になるべきであって、他のビジネスと同様に扱ってはいけない。

July 24 - Room 311

24-311-E
(14:40 - 15:20)

W009 ***Current Status and Future Direction of Information Education in Japan --Comparing Textbooks from different countries--***

by IEC(JAPAN)

As "Information Society" progress worldwide, people have enjoyed the benefit it brings to us. Information Education is actively pursued in all parts of the world to promote knowledge and way of thinking about information, new type of creativity, problem solving ability. In Japan, we have launched official Information Education under the auspices of the Ministry of Education adopting systematic curriculum and textbooks for each grade in high schools. IEC have been actively pursuing research and evaluation of Information Education and making some proposals towards further advancement of Information Education in Japan. Information Society is by its own nature of global scale and we have to deal with Information Education as such. It is expected that many educators from all over the globe will gather at the "2003 iEARN Conference" in Sanda, Japan. We hope to take this great opportunity to introduce Information Education that IEC members have attempted in the previous curriculum system and the new textbook with which new Information Education started this year in Japan. We would like to ask you teachers from all over the world to bring textbooks and related teaching materials from your own country so that we can compare textbooks and how you use them in classrooms. Through such informal presentation and discussion we expect we can learn each other how we can improve our own Information Education through international collaboration among teachers and students.

July 24 - Room 311A

24-311A-A
(11:20 - 12:00)

English

J049 ***国際交流学習で中3生に変化 教師2人での実践、30秒自己紹介CMづくりノウハウ***

by 福永 由美子, 吉冨 理恵(Japan)

福永先生が初めての国際交流学習に挑戦しました。時間は中学3年生の選択英語。福永先生が国際交流学習に踏み切ったのは吉冨先生が転勤してきたから。共同してとりくめる同僚を得て、念願の国際交流学習に取り組んだ先生と、生徒たちに、起きた変化とは？また、交流学習につきものなのが自己紹介。交流学習は限られた時間、範囲の中で取り組む場合、時間との闘いになるもの。限られた時間内で自己紹介ビデオを作成する際のノウハウを伝授します。それは、時間も場面も小さく短く制限することです。ストーリーテリングといいます。そうすることによって、生徒たちは集中して取り組めるようになり、自信を持って表現しようとするようになりました

24-311A-B
(12:10 - 12:50)

English

E027 ***私の学校におけるオンライン・コースの経験***

by マリヘ モセニ(Iran)

私は「オンライン・クリエイティブ・アート・コース（オンラインの創造的美術コース）」に参加しました。ひとつのクラスの14人の生徒が今進行中のiEARNのプロジェクト「ことわざと格言」に参加しています。この生徒たちは他の国の生徒たちと一緒に文化的な経験を共有しています。私はこのプロジェクトの方法と参加したことによる結果を発表したいと思います。

24-311A-B
(12:10 - 12:50)

English

E001 ***アイアーン・モロッコ・コーディネーター***

by ムーラド・ベナリ(Morocco)

今年1年間のモロッコでのアイアーンの活動、特にシビックス4とブリッジプロジェクトでの活動を紹介します。

24-311A-C
(13:00 - 13:40)

Japaese

J037 ***明日という大空・未来という大地***

by 東 宏樹, 片山祥子他(Japan)

故郷『八鹿』の自然を、各地の中学生たちに紹介するポスター作りから始まった僕たちの総合的な学習の時間は、TV会議やメール交換によって、環境問題を話し合うことへと発展した。茨城県取手第一中学校・宮崎県八代中学校・鹿児島県宮浦中学校、そしてアメリカのシカゴ日本人学校との交流から生まれた疑問を、『環境と人の暮らし』というテーマの下、各方面から調査し、Webページを作った。今、僕たちはその『環境と人々の暮らし』の実態を自分の肌で体感したいと『トライやるウィーク』への準備を進めている。

24-311A-D
(13:50 - 14:30)

Japaese

J038 ***学校農園から学ぶ***

by 岡本真奈/加藤菜野, 田中秀太郎/米田隼人, 藤田大輔/齋藤美紀(Japan)

青渓中学校にある学年別の畑に、季節の野菜を栽培し、植え付け→草取り→収穫→老人施設への配布や地域住民への販売→得た収入を生徒会の活動費に充てる という流れを生徒の作業活動を通じて紹介したい。また、郷土の大教育者であり、儒学者の「池田草庵先生」の教えも紹介したい。

July 24 - Room 311B

24-311B-A
(11:20 - 12:00)

Japaese

J057 ***シンモク高校(ソウル)との異文化交流学習の実践(GCPN) 韓国・在日コリアン・日本の高校生による三者交流***

by 小西和治, 佐藤万寿美(Japan)

＜韓国との交流＞本年度，兵庫県教育委員会から選択科目「国際文化」を学校設定科目として開設することが認可された。その当初計画の学習内容では，日本の国内に住む，外国人の歴史・状況・文化について学ぶ・東北アジアの文化と日本文化の交流史，日本文化の形成史について学ぶ・日本の民族差別と差別解消の歴史を学び，日本の国際化の方向性を探る，以上3項目がシンモク高校との交流学習に密接に関わっている。そして，学習活動の大きな柱として，本校が実施している「Global Communication Projects」の一環としてのコンピュータを使用した学習を位置づけた。交流の主体は，本校の日本人高校生，本校の在日コリアン高校生，そして韓国の高校生の三者交流ができれば理想的であるという思いが担当者にはあった。そこで，3年生から本名(民族名)で学校生活を始めた在日コリアン生徒が「国際文化」を選択するための働きかけと，韓国の交流相手校探しの作業がはじまった。J59

24-311B-B
(12:10 - 12:50)

Japaese

J029 ***アジアを飛び交う日本語交流と国際教育センター10年の歩み***

by 国際教育センター 代表 油井加津子(Japan)

高木先生と出会って10年が過ぎました。ルマフォン交流からインターネットTV電話交流とこの10年は本当に情報通信革命と言っても過言ではありません。その怒涛の中に一人身をおいて教育革命、国際交流革命を自身の信念のとおりに生きていた勇気ある高木先生をテレクラスの神様のように遠目に尊敬しながら、自分流の国際理解教育を追求しリアルタイムの国際交流を楽しみながら10年。アジア日本語交流（ICF連続3回受賞）を中心に発表したいと思います.

24-311B-C
(13:00 - 13:40)

Japaese

J040 ***慶應義塾大学21世紀COE拠点形成計画; 次世代メディア・知的社会基盤 英語e-Learning活動報告（大学間言語教育部門）***

by 鈴木 佑治（プロジェクトリーダー；慶應義塾大学大学院、政策・メディア研究科教授），山中　司，谷内 正裕(JAPAN)

慶應義塾大学大学院、政策・メディア研究科は文部科学省による21世紀COEに選定され、その研究を「慶應義塾大学21世紀COE 拠点形成計画；次世代メディア・知的社会基盤」と称して、徳田英幸（慶應義塾大学大学院、政策・メディア研究科委員長）を代表者として、2002年度より研究と実践活動を行っています。本研究では、その中で展開されている英語e-Learningの研究・実践活動を報告するものです。鈴木佑治（慶應義塾大学環境情報学部教授）をリーダーとする本プロジェクトでは、大学から幼児教育に至るまでの一貫した発信型言語教育を実現させるため、学校間を結ぶネットワークの拠点として活動しています。各部門それぞれにおいて、コンセプトとなる言語コミュニケーション論のグランド・デザインから、カリキュラム及び支援教材の開発、現場との共同実践に至るまでの包括的な研究と実践を行っています。本発表では、大学間言語教育実践における発信型外国語教育の新たな枠組みとプロトタイプの提案として、山中が学生リーダーとして参加し、過去2年間に渡って展開してきた、イギリスマンチェスター大学と慶應SFC、千葉商科大学とのジョイント授業の実践を紹介します。私たちの研究はその成果を本大学のみにとどようとは考えておらず、世界中のの大学との発信型プロジェクトの輪を考えており、本発表における実践活動報告とは別に、趣旨にご賛同いただける方の学校や教育機関に、是非参加の輪に加わっていただくきっかけとなるような場の一つとしたいと考えております。

24-311B-D
(13:50 - 14:30)

Japaese

J031 ***総合演習とメディアリテラシー 一短期大学教員養成課程の事例を中心***

by 磯野喜美子，高林穂津美(Japan)

平成12年度から教職新課程が発足した。この新課程の特徴である総合演習の実践例を中心に報告する。この演習教科でのメディア活用の内容（テーマ選択、活動の動機付け、実践活動、結果集計、プレゼンテーション）に焦点をあて、現段階で達成しているもの、今後積極的に育成すべき分野 について提言を試みる。結論としては、個人情報管理と著作権についての理解が 今後一層重点的に研修されるべき分野である

July 24 - Room 403

24-403-A
(11:20 - 12:00)

English

J058 ***フォトシネマのある学校生活を楽しもう***

by Nishizawa Hiroto(Japan)

1. フォトシネマとは？　フォトシネマとは写真を使って作られた短い映画のことです。私の生徒たちは学校の行事のでフォトシネマを使って映画を作りました。その生徒たちの活動と出来たものをお見せしましょう。2. フォトシネマの作り方　自動モードの簡単な三つのステップをふめばすばらしい映画ができます。写真を選び、音楽を選び、映画のスタイルを決めます。もっと特別なものを作りたければ、手作りモードに挑戦してみましょう。手作りモードなら好きなように写真を動かせますし、文を加えることもできます。3. 学校生活でどのようにフォトシネマを生かすか。　日ごろ生徒たちが行った活動や作ったものを写真にとっていますか？いい写真は生徒の心を動かします。よくできたフォトシネマはもっと彼らに強い感動を与えます。それらを行事の前に使いますか？それとも後に使いますか？生徒たちが学校生活を楽しんでくれることを私は心から望んでいます。

24-403-B **E074** ユースキャン
(12:10 - 12:50)

by Wileyda Cardona, Nuria Peguero, Alvaro Sierra, Daria Kosovsky, Mama Diackel Kane, Rola Khalifeh(USA/Lebanon/Senegal)

English

私たちは、環境に影響を与え、また地方の居住環境を保護するために活動している世界中から集まった若者です。文化的および社会的な違いにもかかわらず、私たちは環境のために戦うため一体となります。しかし、私たちはあなたの支援を必要とします。私たちは効果を生ずるためにあなたを必要とします。私たちと一緒に、あなたのコミュニティーで効果を生ずるために何ができるかを議論しましょう。

24-403-C **E057** ***Lewin-世界の生徒の作文集***
(13:00 - 13:40)

by Virginia King, Bob Carter, Farah Kamal(Australia and Pakistan)

English

Lewinは世界の生徒たちの作文を集めたものです。Lewinはカラチ、パキスタン、バーンスデイル、オーストラリアの先生たちに監修されていて、スルタン モハメドシャーアガカン、カラチ校、パキスタンバーンスデイル高校、バーンスデイツ、オーストラリアの生徒たちによって編集されています。Lewinの目的は1. 若者に作文を公表する機会を提供することです。そのことを通して、読者に作文を鑑賞してもらう、アイデアや考え、思いを表現し、彼らの文化、歴史、経験、環境を世界の他の人たちと交流しあうということができます。2. プロジェクトの参加者全員にお互いの作文を鑑賞し合ってもらい、参加者の間の交流をはかることによって、お互いの励みになるし、積極的に講評し合うことによって、お互いから学び合うことができます。3. 若者の作文をiEARNニュースグループ、やフォーラム、またプロジェクトウェブサイトやLewinなどで公開することにより、できるだけ多くの人が楽しめるし、またそれによってさらにやる気を喚起できます。4. 生徒やサポートする先生たちのコミュニティーを発展させることで作文の技術を高め、お互いの励みとなります。このワークショップはプロジェクトの発展を見守り、プロジェクトの成功を見守ります。数カ国からのLewinの参加者はLewinでの経験を話し合い、そのプロジェクトが生徒たちにどのようにインパクトを与えたかを交流し合います。ワークショップでクリエイティブランゲージや協働ノプロジェクトー組織、指導、プロジェクト文化の発展などに関連した問題を研究したいと思います。

24-403-D **J051** ***Activating Junior High and High School English***
(13:50 - 14:30)

by YACHI Masahiro, SUDO Takeru, SUZUKI Yuji(Japan)

English

Graduate School of Media and Governance at Keio University has been selected as a site for carrying out a project for the 21st Century COE (Center of Excellence) programs of the Japanese Ministry of Education, Culture, Science and Technology (MEXT).The name of the project is Next Generation Media and Intelligent Social Infrastructure, which has been headed and cordinated by Hideyuki Tokuda, Ph.D., Dean of the Graduate School. The present study reports the activities of one of its sub-projects titled English e-Learning by N. Yuji Suzuki and his research group including the author. The author, as a project leader, has been in charge of activities in secondary schools. The author contributed much to the architecture of the infrastructure and content development in curriculum designing. The research group seek for schools and individuals who can participate in similar productive English e-Learning.

24-403-E **E102** ***将来の教師をつなぐ***
(14:40 - 15:20)

by クリスティン・ブラウン、エレナ・ノゲラ(USA/Catalunya)

English

このプロジェクトの目的は、将来教師になる人達を対象に世界規模のネットワーク・プロジェクトを体験してもらうことによって、将来彼らの教え子をオンラインのプロジェクトに参加させてもらおうということです。このアイディアについて議論を深めたいとお考えの方全員に参加していただきたいと思います。この分科会では教職を志望する方々がiEARNで果たすべき役割について、参加者の間で話し合い、プロジェクトの企画をしたいと思います。7カ国の教職志望者の間で行われたオンライン交流に関する発表も行います。「生徒を知り、自らを知る(Knowing Our Students, Knowging Ourselves)」プロジェクト(iEARNに参加する教育学の教授や教職志望者ならびにOrillas-iEARNセンターを中心に、CLMERで組織されたプロジェクト)では、文化的・言語的に多様な生徒に対して、公正さを保ちながら学校が成功するために、教育の現場で実施されていることを教職志望者に吟味していただくことを中心としました。

24-403-F **E088** ***cyberbullying, An Emerging Threat to the always OnGeneration***
(15:30 - 16:10)

by Bill Belsey(Canada)

English

cyberbullying, An Emerging Threat to the always OnGeneration presented by Bill Belsey Cyberbullying is a rapidly emerging form of immoral, antisocial behaviour that presents new and sometimes frightening challenges to parents, teachers, and others committed to the education and well-being of our children and youth. Bill Belsey's www.cyberbullying.ca project brings the nature and scope of this behaviour into sharp focus. I will use this site as the primary cyberbullying reference site for my work with teachers. It is a much needed child of its widely used parent site, www.bullying.org,said Dr. William Egnatoff, Professor, Computers in Education, at the Faculty of Education of Queen痴 University. The project, initiated by noted Canadian educator Bill Belsey, was created because he observed that cyberbullying has become a huge problem in other parts of the world, where mobile phones and other telecommunications tools are more deeply embedded in youth culture. 的 think that we have a window of opportunity to try and be more proactive and raise awareness about this issue through education. Unfortunately, cyberbullying is already becoming a larger issue in the lives of young people every day observes Belsey. "Cyberbullying involves the use of information and communication technologies such as e-mail, cell phone and pager text messages, instant messaging, defamatory personal Web sites, and defamatory online personal polling Web sites, to support deliberate, repeated, and hostile

behaviour by an individual or group, that is intended to harm others." -Bill Belsey This presentation offers a formal definition of cyberbullying, information about how cyberbullying might be prevented, strategies and resources for those who are currently dealing with cyberbullying in their lives, facts and related news about today痴 鄭lways Onsociety. It also offers an introduction to what Belsey calls 田yberslang 典his 羨lways Ongeneration has something akin to their own language that they use to communicate with each other. This includes the use of many acronyms, abbreviations and emoticons. Adults who see such messages on a child痴 cell phone, might not even know that they are being cyberbullied advises Belsey.

24-403-G (16:20 - 17:00) English

J010 ***Eメールによる「いつでも、どこでも気楽に国際交流」***

by 杉本範雄(Japan)

Eメールを授業に取り入れ、インターネット創生期より「国際交流(異文化理解)」・「国際理解教育」活動を実践してきました。英語の苦手な日本人にとっての「Eメールの有用性」を説き、そこから発展するTV会議や相互訪問、日常的な「生徒同士の異文化交流」活動についての報告と提案をします。

July 24 - Room 404

24-404-A (11:20 - 12:00) English and/or Japanese

J032 ***Use of Free Use Marks for Web Page Access by Educational Institutions***

by FUJISAWA Dai(Japan)

The need to access web information on several topics is increasing significantly. This is true for educational institutions that need to access data for teaching and knowledge sharing purposes. As opposed to books, information on the web is freely accessible and copyright restrictions are not fully respected (in spite of the efforts to encourage people to do so). Therefore, the need to impose restrictions on the use of educational material is crucial both from the authors' and editors' points of view. One proposal towards this type of solution is called Free Use Marks (FUM) that is promoted by the Agency for Cultural Affairs in Japan (ACAJ). This paper presents this proposal and discusses its uses and possible implementation procedures. This paper also discusses the use of FUMs in cases where users may reproduce, copy and make available material that already been approved by FUM servers. Ways for controlling this indirect use of these documents are addressed.

24-404-B (12:10 - 12:50) English

J002 ***知的障害生徒の環境問題をテーマとしてハワイ州高校生との交流***

by 山本大助(Japan)

平成12年夏より平成13年3月にかけて、ハワイ州の高校生らと様々な情報伝達手段を使って環境問題をテーマに交流した。テレクラスハワイ、Jearnなどの協力により交流を進めることができた。協力をすすめるためにMLなどを利用した。

24-404-C (13:00 - 13:40) English

E010 ***地球鉄道一環境、文化におけるインパクトアセスメント***

by チャーリーズブリュースター(United Kingdom)

1844年から、ミッドウエイ諸島を含む50数マイルの、ユーラシア大陸とアメリカ大陸を隔てるベーリング海峡の下に、ロシアと北米の鉄道システムを連動させてトンネルを通すということは可能であるかもしれないという案が浮上してきました。　この案は、1990年代を通して勢いづき、あらゆる国々の関心のもとで、政治家や学者達の間で話し合われて来ました。この夢のような提案は、世界の鉄道システムを統一し、経済的基盤を作るうえでも地球規模のスーパープロジェクトとして見る事ができるでしょう。かかる費用と兵站学的な側面からみて、アラスカと東シベリア両地域に広がる人類未踏の荒れ地の中に数千マイルの鉄道を通すという事は、一つの深刻な問題点となりました。加えて、これらの地域にそれぞれ根尽いている固有の文化に強い影響を及ぼすであろうことも問題としてあげられました。このプロジェクトのなかで、私は、たくさんの国から生徒達を招いて、それぞれの世界に発展している環境的、社会的、文化的な価値を見極めることに参加してもらいたいと思います。

24-404-D (13:50 - 14:30)

J073 ***Japanese High School Student's True Life***

by 三木高校(Japan)

24-404-E (14:40 - 15:20) English

E053 ***双方向世界における新たな芸術環境と芸術教育者の役割変換***

by H. Turgay Unalan(Turkey)

今日の文化的な環境はデジタル革命である。美術を教える者はこの発展により教え方が変わってきている。現代の美術教育者は、芸術活動をデジタル世界に反映させる使命を持っており、このテクノロジーの力を使って生徒のビジョンを変えていかねばならない。また、テクノロジーの力によって得られた様々なチャンスや教育環境を生徒が使えるように用意をし、指導しなければならない。生徒が互いの芸術活動を見たり応用したりして、さらに発展させていくように指導しなければならない。彼らがデジタル化した世界でユニークな結果を生み出せるように励まさなければならない。この調査は、17才から22才までの生徒のグループに焦点を当てている。生徒はアートの活動にテクノロジーを利用するようになるであろう。このプロジェクトは、生徒へのインタビューを通して芸術教育者の役割を変えようとするものである。

24-404-F (15:30 - 16:10)

Japaese

J034 *子どもと親と教師を結ぶ教育ネットワークの教育実践*

by 溝口広久, 波里純次(Japan)

玉川学園の児童・生徒およびその家庭と学校とをネットワークで結び、三位一体となって創り上げている教育ネットワークCHaT Netを利用した教育活用実践事例をその運用体制も含め紹介したい。その実践内容は、国際交流、総合学習、情報教育、教科学習、遠隔教育、等々多岐に亘る。ネットワークによってそれぞれの学習活動を有機的に結びつけ、三者が連携しての教育活動を展開しようとする試みについての報告である。

24-404-G (16:20 - 17:00)

English

E089 *持続可能なエネルギー源としてのアルコール*

by Isabella Junqueira Castejon, Rodrigo Junqueira Castejon(Brazil)

パワーポイント・プレゼンテーションは、再生可能エネルギー源としてのアルコールを生産する過程を詳述します。レッスンでは、代替エネルギーの生産で化石燃料の消費によって生じる地域的および世界的な公害の影響をどのように減らすことができるか実証します。また、この持続可能なエネルギー源が世界中の発展途上国の労働者やコミュニティーの経済状況改善にいかに貢献するか例証します。将来のカリキュラムは異なる年代や学年のために発展し、学生や教師にコミュニティーにおいて代替エネルギーの適用の機会を探すよう促すでしょう。学生と教師のための情報を集めて広めるためにフォーラムでをウェブサイトが使われるでしょう。

July 24 - Room 405

24-405-A (11:20 - 12:00)

Japanese

W001 *日本の音楽に触れてみませんか*

by 廣田元子

琴や和楽や和太鼓をお借りして日本音階を使った音楽の即興表現・・・セッション・・・をします。それを録音しておいて次に, コンピュータで背景画像ファイルを作ります。ブルーバックのスタジオでその背景画像をバックに踊ります。デジタルビデオを使ってビデオを撮ります。そのビデオの一部をとってビデオメールをつくります。できた ビデオメールは記念にFDに入れてプレゼントします。世界中の先生方が日本の先生方 と一 緒に音楽を通して短時間で楽しめるワークショップにしました。

July 24 - Main Hall

24-MH-A (11:20 - 12:00)

J069 *障害者とICTの活用事例*

by 成田 滋(Japan)

24-MH-B (12:10 - 12:50)

Japaese

J018 *おっさんでもできる国際交流　テディベアプロジェクトを通して"*

by 森田雅浩(Japan)

国際交流は、なにも若い先生たちだけのものではありません。英語が達者じゃなくてもできるんです。ほんの少しの勇気と、ほんの少しのやる気があればだれにでもできるテディベアプロジェクト。山の中の12人の子どもたちが、こんなおっさんと一緒にオーストラリアの子どもたちと繋がった時の様子を聞いてください。

24-MH-C (13:00 - 13:40)

J068 *日本の大学におけるe-learningの現状と課題*

by 小野 博(日本)

近年、18歳人口の減少や入試の多様化による入学者選抜競争の緩和は、大学入学者の基礎学力、特に英語力の低下をもたらしている。大学の英語教員が最も危惧している問題は、入試科目から英語を除外する大学が増えていることである。この結果、同じ大学・学部内において、辞書の引き方から教えなければならない学生から留学志望のTOEFL550点以上の学生まで入学し、大学の授業が成り立ちにくくなっているとの報告もある。そこで、第二外国語のように、大学に入学して改めて英語学習を基礎からやり直すリメディアル学習が注目されている。学習者の英語力をプレースメントテストによって判定し、その結果に対応したネットワーク対応型個別学習プログラムが求められている。私たちの目標とする日本人大学生の英語教育は、(1)日本でできることは日本で、(2)コンピュータが役立つことはコンピュータの利用で、(3)海外の方が能率的なコミュニケーション学習は海外で、である。大学入学後、リメディアル学習から始め、卒業時にTOEIC700点を目指す教育体制を多くの大学に構築したいと考えている。そのため、(1)多くの大学へのe-learningの導入を支援する、(2)英語教材に対し、ドリル型を含むリメディアル学習教材・音声中心教材・リスニング中心教材など、英語教員の興味関心に対応した教材を、大学の規模にかかわらず、非常に廉価で提供するビジネスモデルを確立し、実施する。さらに、(3)大学生の基礎学力(日本語・数学・英語)を評価するプレースメントテストや教材制作ソフトも同時に提供する。(4)最終的には大学での学習によって成果の現れた学生を対象に海外でのコミュニケーション学習の機会を国が与えるプログラムを提案し実現したい。以上の全体構想の中で、現在、e-learningのコンテンツ作り・検証実験等を進めている。

24-MH-G (16:20 - 17:00) Japaese

J001 ***Peace from Hiroshima to the world***

by 横山基晴(Japan)

2002年3月8日。卒業式を2日後に控えた3年生(前任校・大州中学校)170名は、「ザ☆ピース」と題する学年卒業式を行いました。3年生は「平和」をメインテーマに選び、そこで13曲の学年合唱を歌い、在校生に大州中学校の「文化」を残すことができました。この学年を3年間つくっていくうえで重視したのが、様々なテーマで展開した学年意見交流(学年通信や社会科だよりの紙上交流)と学期末の学年集会(合同学活)です。学年集会では、合唱・スピーチ・踊り・朗読劇・手話つき合唱・ポスター作りなど多種多様な表現活動を取り入れてきました。それは、表現活動を通して、自分たちが学校の主人公であることを実感することにより、学習を深めることが大きなねらいです。そんな活動の一つ、平和学習では2年生と3年生の7月に広島合唱団も招き一緒に歌いました。そのつながりで、生徒の平和宣言をもとに「平和の歌」を作っていただくことになりました。準備を進める中、9. 11のテロ事件、そして、その後の報復攻撃が始まります。「平和の歌」の歌詞には、映画『カンダハール』監督のメッセージも加えられ、「ねがい」という曲が出来上がったのです。「21世紀、ヒロシマで生まれた イマジン」として、生徒は学年卒業式で歌いました。ヒロシマの中学生の活動から生まれたこの曲を、世界に発信します。

July 24 - Poster Session

24-POSTER-1 Japaese

J020 ***工学教育における「情報とコンピュータ」教育のためのウェブ教材開発***

by もりやま じゅん(Japan)

この研究は、「情報とコンピュータ」教育のためのウェブ教材を開発するものである。これらの教材は、信州大学大学院と兵庫教育大学が1999年から2003年に行なった「工学教育のための教材セミナー」で開発された。この研究で作成されたウェブ教材の内容は、「コンピュータシステムの理解」、「ネットワークシステムの理解」、「情報倫理の理解」である。これらの教材は、http://e-tech.hyogo-u.ac.jp/ で入手できる。

24-POSTER-10 Japaese

J062 ***情報教育***

by 三田祥雲館高校(Japan)

24-POSTER-11 Enlish

J070 ***日本の中学校(篠山中学校)生活の紹介***

by Mikage Araki, Carmela Clendening(USA/Japan)

日本の(篠山中学校の)日常の様子を紹介します。登校の様子、授業、給食、清掃、部活動などごくごく普通の中学校の様子です。

24-POSTER-2 English

J023 ***生徒のコンピュータにたいする順応度分析にもとづいた中学校における情報教育カリキュラムの実施***

by あはま しげき、もりやま じゅん、まつうら まさし(Japan)

日本の中学校技術・家庭科における生徒の情報機器に関する調査に基づき，カリキュラムの提案を行う。また，そのカリキュラムに従った授業実践を行い，その報告を行う。

24-POSTER-3 Japaese

J024 ***初等教育における情報教育***

by 西垣 もと子(Japan)

情報教育推進校ではない学校の私の取り組みをポスターセッションさせていただきます。ほか、昨年指導要領の改訂によって教科書が変わったことでコンピュータがどのように関わってきているかなどをお話ししたいと考えています。

24-POSTER-4 Japaese

J039 ***幼稚園教員養成機関での情報教育の試みと今後の課題***

by 新田眞一(Japan)

"パワーポイントとペイントを利用しての絵本作成"の実践例を取り上げます。この試みを保育の場で活用する為の今後の課題について考察します。保育者と幼児、幼児と幼児のコミュニケーションの促進に役立つことを目指します。併せて、保育者が情報機器を保育の場で活用する為にはどのような問題があるかについて言及します。

24-POSTER-5 English

J072 ***高等学校における数学で、情報教育の視点での授業報告***

by Nakanishi Yoshihiko(JAPAN)

現代の学校教育での生徒たちの理解度は、小学校から高校卒業迄に7割～3割に半減するとも言われる。数学では、もろに波を被っている。最近は、情報機器もあるがあえて、ブラックボックスになりがちな内容を、できるかぎり、興味や関心をもたせて、集中させ、各自の思考を広げる工夫を図り、進んでやってみたくなるような計算の紹介や、理解の不足している所の発見から、練習して回復できる表の活用などの例を報告する。

24-POSTER-6 **E096** *ストリート・チャイルドの為の教育プロジェクト*

by セガワ　メディ(Uganda)

English

The Education for the Street Child Project (ストリート・チャイルドの為の教育プロジェクト)は路上で生活しているストリート・チルドレンを学校に戻す方法を考え、実行しています。彼らが路上でどのような問題に直面しているかについても取り組んでいる。分科会ではウガンダのストリート・チルドレン(特に少女)の実態をスライドやビデオを通じて説明したいと思います。又、スライドを通じ、プロジェクトの活動、研究内容、他の参加者からの協力や文章も紹介します。路上で生活している子供達が抱える問題、彼らの存在がコミュニティーに与える悪影響、ストリート・チルドレンの生計、生き残る手段なども紹介。プロジェクトがどのようにウガンダのストリート・チャイルドの実態を訴え、成果をあげているか、又様々なグループからどのような反応を得ているかを発表します。

24-POSTER-7 **J021** *総合学科における国際交流 ー青谷高校のTV会議の軌跡ー*

by 西尾敦(日本)

Japaese

総合学科である青谷高校は、情報教育と国際教育に力を入れている。この2つの柱を併せ持つのがTV会議システムを利用した国際交流である。これまでフロリダBECONを中心とした国際会議、ハワイ大学を中継したサモアとの交流など行ってきた。交流内容は、文化の紹介に始まりだんだん多様化してきた。また、近くの小学校の児童も参加し、小・高連携を実現した。その内容と実践の中で見えてきた課題や今後の取組みについて紹介する

24-POSTER-8 **E042** *モシュコヴォ教育センターの英会話クラブとそのパートナーシップ関係*

by ヴァレンティナ　シェルノバ(Russian Federation)

English

モシュコヴォ教育センター＋英会話クラブは2002年10月IEARNの活動の場として学校を始めました。このクラブは10-17歳の約100人の生徒を結びつける場です、1999年より私たちは生徒とパートナーシップの関係を築き上げてきました。

24-POSTER-9 **E025** *iEARNイランからの報告「慶事と弔事」*

by neda shirazi(Iran)

English

iEARNイランの後援者の1人として、私は、イランの慶事と弔事についての研究を始めました。人々は喜びや悲しみに際しある程度は同じ行動をとると思いますが、他の国々での慶事や弔事について、もっとよく知りたいと思います。そこで、「慶事＆弔事」プロジェクトでは喜びや悲しみに際して人々がどのような行動をとるのかを、先生と生徒たちが、文献、写真、詩、物語を集めています。そして若者は、地域の習慣や文化を徐々に思い出して注意を払います。それはとても素晴らしいことなのですが、消えて行きつつあり、保存する必要があります。このプロジェクトの大きな目標は、異なる国々の間の生徒と先生たちで、コミュニケーションと理解を広めることです。このプロジェクトで、全世界中の(あらゆる信仰から)習慣についての意見を交換し、そしてそれらを守り、呼び起こし、改善する提案を出しあいます。今、このプロジェクトはroshdg高校とshahed高校の2校の間で進めています。そして日本で他の皆さんと一緒に研究できることを楽しみにしています。

July 24 - Reception Hall B

24-RHB-E **W011** *空手*

(14:40 - 15:20)

by 有馬高校空手部

(仮題)日本の空手の紹介

24-RHB-F **W005** *コンピュータを有効活用した、小学校の英語活動*

(15:30 - 16:10)

by 山内　豊(JAPAN)

JAPANESE

教師も児童も楽しくなるコンピュータを活用した小学校の英語活動。授業のビデオ映像を見ながらその意義と効果を考えます。だれでも参加可能

ユース・サミット

日	内容	参加形態	利用施設
7月21日(月) (13:00-17:00)	オープニングセレモニー(13:00-14:45)	全員参加	淡路夢舞台国際会議場
	アイスブレーキング(15:00-17:00)	全員参加	
7月22日(火) (10:00-17:00)	若者の協働プロジェクト	選択参加	淡路夢舞台国際会議場 岩屋中学校
	日本の文化を体で感じるプロジェクト ・おにぎり作り ・竹箸づくり ・書道　など		
7月23日(水) (10:00-21:00)	若者の協働プロジェクト	選択参加	淡路夢舞台国際会議場 他
	淡路の自然や災害から考えるプロジェクト ・共生についてのディスカッション ・野島断層記念館見学ツアー ・夢舞台内フィールドワーク　など		
	情報交換会(18:00-21:00)	全員参加	ウェスティンホテル大宴会場
7月24日(木) (10:00-17:00)	若者の協働プロジェクト	選択参加	淡路夢舞台国際会議場 他
	異文化にふれあうプロジェクト ・紙すき ・言語系イベント　など		
7月25日(金) (10:00-12:35)	クロージングセレモニー ・Youth Summit 活動発表(10:35-11:35)	全員参加	淡路夢舞台国際会議場

※基本は、参加者自身が企画をつくります。
選択参加のものは、スタッフが用意した企画への参加となります。

参加登録のお知らせ

YouthSummitでは、私達スタッフが考え出した様々なプログラムがあります。その中にはそのプログラム内容上、参加者の人数を制限しなくてはいけないものがあります。その為、それらのプログラムに関しては登録を行いたいと思います。登録はYouthSummit開催中に行われます。 夢舞台のYouthSummit専用の部屋である301号室に、大きな模造紙を貼り、参加したいプログラム名のしたに名前を書き込んでもらい、先着順で登録していきます。

登録制のプログラムとその人数は

○竹ばし　約40人
○インターナショナル？　外国人25人　日本人35人
○浴衣(ゆかた)　人数未定

以上の三つです。HP・ML・当日配られるしおり、301内のスタッフによる紹介を参考にして、もし上の三つの中に参加したい企画があれば是非登録してください。

私達の用意したプログラムというのは、あくまでも参加者に用意した選択肢であり、決して必ず参加しないといけないわけではありません。全くプログラムに参加しなくても、様々な交流ができるように、準備をしています。自分の興味のあるプログラムには積極的に参加し、またプログラムになくても何かしたいことがあればスタッフに声を掛けてください。きっと一人一人がそれぞれのYouthSummitを作り上げられます。

プログラム

野外イベント

Youth Summit 最後の夜！みんなで夢舞台内の“野外劇場”に集まろう！国や言葉の違いなんて関係ない。だれもが一緒に楽しめる音楽にのせて、一緒に歌ったり、踊ったり・・・ 想像しただけでわくわくしませんか？太鼓の演奏や大合唱、民族衣装の披露などを予定しています。みなさん、楽器を1つや2つ、ぜひ持ってきてください。音の鳴るものなら何でもOKです。カスタネット、鈴、マラカス、ハーモニカ、オカリナなど。涼しい風を感じながら、同じ時間を共に過ごしましょう！

浴衣

日本ではご飯を食べる時、箸を使います。お箸を使うことは日本文化の1つです。そのお箸を自分で作ってみませんか？箸を作った後には、各々の国の文化について知る機会を作ります。竹箸作りに参加したいと思っている人は、それに備えて自分の国のおもちゃを持ってきて下さい！伝統的なものでも、今流行っているものでも構いません。これこそ自分の国を代表するものだ！！と思うものがいいんじゃないでしょうか。この機会に日本文化になじみ、さらに様々な国の文化に触れちゃいましょう！ただし、竹箸作りは淡路の会場において人数制限を行います。定員がオーバーした場合、参加できないことがあります。ご了承ください。

おにぎり作り

日本で手軽に作られ、誰からも親しまれているおにぎりをヒントに、各国の食文化への理解を深めることを目的とした企画です。現在、地球人口の約半数が米を食べていることをあなたは知っていますか？また、その数が今も増え続けていることを知っていますか？実際におにぎりを作ることで、米を身近に感じ、自国の食文化や食糧事情などを話し合いながら、21世紀の食のあり方を探っていきましょう。企画の内容としては、まず初めにバイキング形式で具材を選び、オリジナルのおにぎりを作ってもらいます。その後は楽な姿勢で食文化についてディスカッションをする予定です。人数は制限しません。たくさんの方が来てくれることをお待ちしています。

KA・MI・SU・KI ＆ O・RI・GA・MI

「牛乳パックや古紙を利用して、日本の伝統文化『紙すき』を一緒にしましょう☆ほら、周りを見回してごらん！私達の生活と紙はとっても縁があるのです。使って捨てるのは簡単だけれど、作るのってどうなんだろう！？」
「折り紙を世界中の友達と一緒に作ろう！色々なものを折って楽しみましょう☆そして、大きな紙で大きな鶴をみんなで作ろう！どんな鶴ができるかな！？」

ハイキング

私たちハイキング＆オリエンテーリングのスタッフは、みんなで1つの地図を見ながら淡路島・夢舞台を散策し、交流を深めてもらい、美しい自然を満喫してもらおう、という企画を用意しています。しかし、ただ美しい自然を楽しんでもらうだけではありません。淡路島夢舞台は、関西国際空港など大阪湾の埋め立てに利用した広大な土砂採取の跡地に植栽をし、自然環境の回復と緑豊かな景観の想像を積極的に取り組もうとする環境創造型の開発事業によって造られました。淡路島の一味ちがった自然の美しさを実感しつつ、土砂採取の跡地に植栽し、自然を回復させた、という自然保護についても考えてみませんか？主な内容としては、自由に夢舞台内を散策してもらおうと考えていますが、夢舞台内には有料の植物園や明石国立公園もあります。また、大縄跳びやビーチボールなど軽い運動を楽しむコーナーも用意しています。ユースサミット期間内にぜひゆっくりと淡路島の自然を体験してみませんか？スタッフ一同みなさんの参加をお待ちしています。

“インターナショナル？”

言語・言葉が相手に伝わらなくてもどかしさを感じたことがありますか？そんなときはどうやって伝える？言語・言葉のない世界ってどんなものだろう？自分と違う国の人と話して、同じことでも、その表現のしかたの違いを感じたことがある？

・・・このようなことを、みなさんに「自己紹介ゲーム、ボディラングエイジ(ジェスチャーゲーム)、ディスカッション、シェアリング」の体験を通して、自分の気持ちを伝えることの難しさ、それぞれの文化の違い、考え方の違いなどを感じてほしいと思います。世界の共通語とされる「英語」って、自分にとってどんなものだろう？自分の国の言語ってどんなものだろう？私たちはどうして言語・言葉を学ぶのだろう？その中で新しく気づいたことが、これから何かを考えるときに役立てばな、と考えています。みんなで考え、お互いが思っていることを伝え合ってみませんか？

アイスブレーキング

わたしたちは、参加者たちの交流のきっかけとなるような企画にしたいと思っています。 まず、“なんでもバスケット”の企画では、共通の項目で、参加者たちにいくつかのグループを作ってもらって、自己紹介などを簡単にしてもらいたいです。また、福笑い企画では、ファミリーの人達が集まってもらって、そこで一緒に福笑いをしてもらいたいと思います。この企画では海外の参加者が日本文化に触れ、日本文化を知ること、日本人の参加者が日本文化をみなおし、他の国の文化にも興味を持ってもらいたいと思っています。この企画をとおして、この後の企画でどんどん交流を広げていってもらいたいです。

持ち物　;名札

イベントのご案内

淡路人形芝居「恵比須舞」(人形座)

7/21, 13:00？13:10　(メインホール、オープニングセレモニーにて)

大漁祈願のおめでたい演目です。恵比寿さんが「おめでたい」と言ってはお酒を飲みます。

茶会と琴の体験

啓明学院茶道部・箏曲部

7/23, 13:00 - 17:00　(4 階茶室)

子構成によるお茶のもてなしです。琴はポスターセッション(23-POSTER-11)で説明があり、茶室では試奏ができます。

「ありがとうアート」

7/22, 9:00？17:00　(レセプションホール B)

「ありがとうアート」は、親しい人はもちろん、生き物や地球、宇宙への感謝の言葉でつづる絵です。円形の紙に印刷された線をたよりに、うずまき状に内側からから感謝の言葉、感謝の気持ちを書き込み、離れてみると絵に見えるように色を変えながら描きます。感謝の言葉は全世界共通の愛の祈りの言葉です。感謝を表した人にも、感謝を受け取った人にも、あたたかい愛の波動が伝わります。ありがとうアートの寄せ書きに参加してください。あなたの感謝の言葉で絵をつづってください。

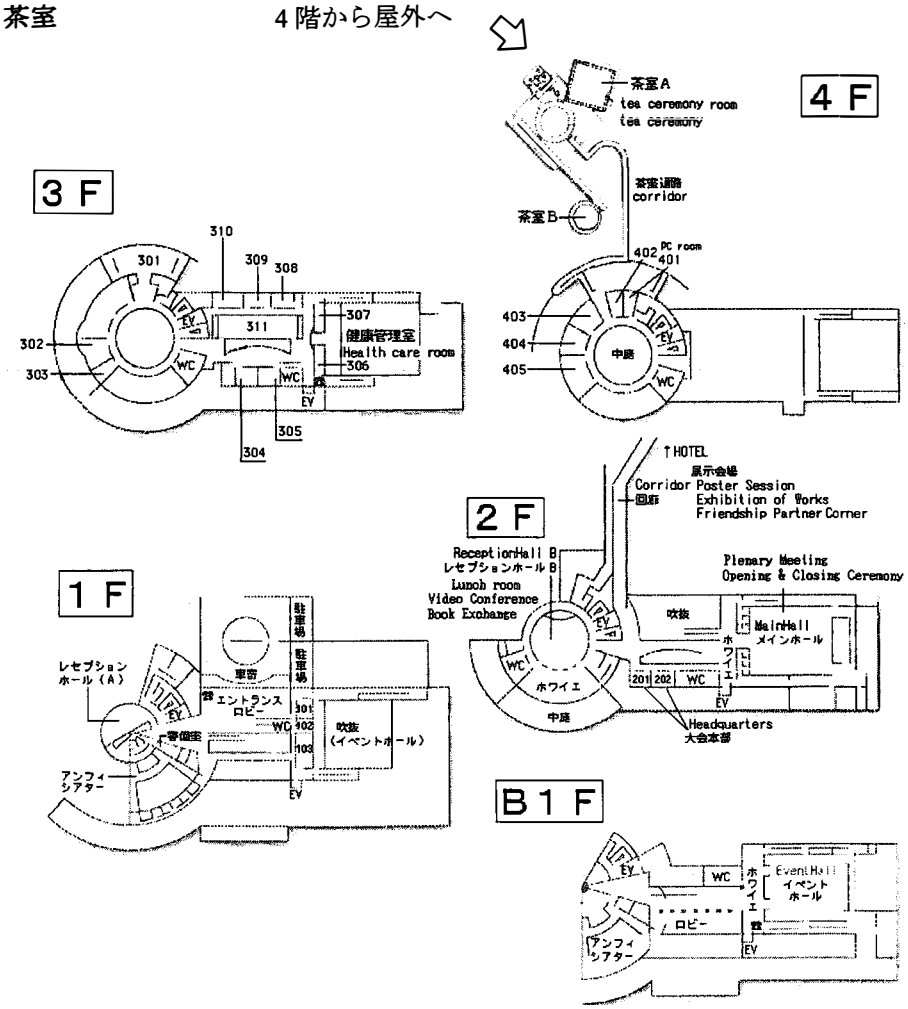
本の交換

7/22-24 9:00？17:00　(レセプションホール B)

世界中から集まった参加者と本を交換しませんか？ルールは簡単、置いた冊数と同じだけの本を持って帰ることができます。絵本や教科書、雑誌なども歓迎です。古本でもかまいません。欲しがる人がいると思える本を持ってきてください。

兵庫県立 淡路夢舞台国際会議場

大会本部	201, 202	電話: 0799-74-1022 (7/20-25 9:00-21:00) 夜間: 0799-64-0468 (ホテル立石)
メインホール	2 階	
レセプションホール B	2 階	
ポスターセッション	2 階回廊	
健康管理室	306	
PC ルーム	401, 402	
茶室	4 階から屋外へ	



関西学院大学

FMMC
Foundation for MultiMedia Communications

関西から
文化力
POWER OF CULTURE

Friendship Partners

iEARN Japan

財団法人 松下視聴覚教育研究財団
Matsushita Audio-Visual Education Foundation

KUMON

K-OPTI.COM

FUJITSU

Panasonic

MITSUBISHI ELECTRIC
Changes for the Better

... and more. We thank you all with love.